



2



\* 0 0 0 2 4 3 0 0 0 0 \*

0002430-000

6 1 9 - 5 2

まつり

神作浜吉・著

宝文館

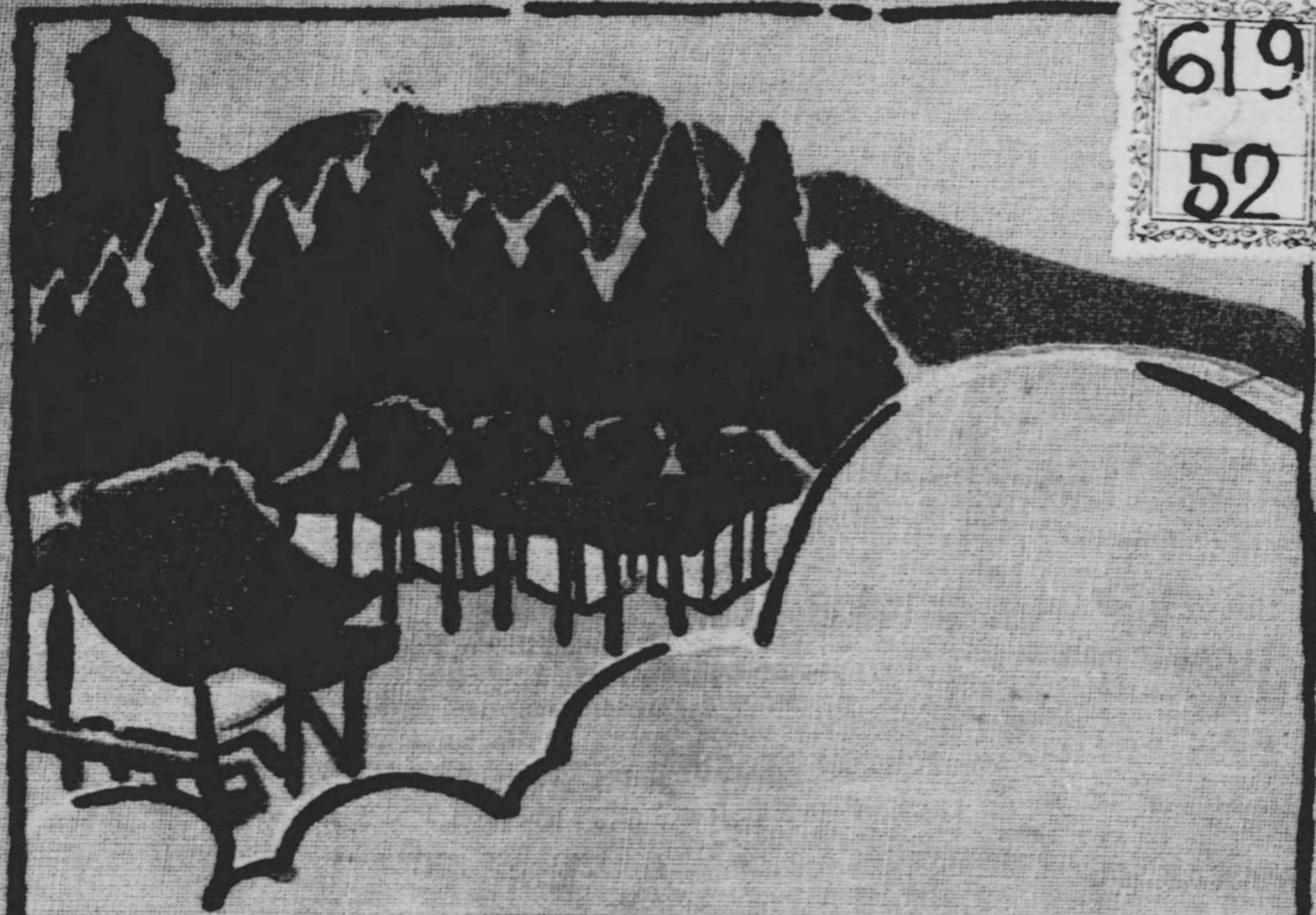
昭和6

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの







619  
52





「ま っ り」正誤表

頁	行	正	誤
三	二	(藝術)	藝術)
六四	六	外交政務	外交當局
七五	三	「鈞」	「鈞」
三〇	六	坤爲地 	坤爲地 
三二	二	坤爲地 	坤爲地 
一九五	三	淮南子に「德澤	淮南子に「德澤
二三五	九	柴田花守	紫田花守
三三九	一一	其計畫の衝に當つたのは、天玉命及び兵站部の主腦たりし	其計畫の衝に當つたのは、兵站部の主腦たりし
三三九	一二	經世家	經世家
三四三	三	分明	分明
二七〇	六	財貨の蓄積は	財貨の蓄積と云ひ
一九〇	一一	圓滿なる	圓滿たる
三〇四	七	外國の教義は、	外國の教義天、
三〇四	八	皇道は我等の天祖	皇道は我等のは祖
三二六	一一	就中柿本人麻呂と、	就中柿本人麻呂と、





贈呈

著者

神作濱吉講述



り

著者寄贈本



東京  
寶文館藏版



贈呈

著者

神作濱吉講述

著者寄贈本



り



東京 寶文館藏版



孔曰年仁遠曰  
取義唯守仁成  
不以我全

忠孝節義  
此四字  
皆仁也

故副島種大臣の眞蹟



善女神の...大...  
不...と...物...  
又...  
又...  
又...

不...と...大...  
不...と...物...  
又...  
又...  
又...

故黒川眞頼大人の眞蹟



美事  
奇剛  
乃真  
可神  
事空  
既為  
亦為

奉  
師志  
真宗  
真宗  
真宗  
真宗  
真宗  
真宗  
真宗

故西川須賀雄大真人の蹟



619-52

## 序言

今や思想の風潮は隄防の壊れたる逆流の如く、時代の變調は颶風に煽らるゝ怒濤より激しきも、而も其の逆流に棹し、變調に踊る人生は、依然としての人生である。易に宇宙の萬象は、悉く變易の鐵則に支配せらるゝが、而も其變化する中にも物自體は毫しも變らぬと云つて居る。祖國二千五百有餘年の歴史を緝けば、眞に走馬燈の如く回轉し居るが、而も國家の中心生命には、少しのゆるぎも見受けぬのである。斯く觀るときは社會も國家も人生も萬象も、部分的には變化を見るが、總體的には變化のないことが分る。否其變はる所があればこそ、其中心生命が持續するのである。恰も草木の葉や花が年々歳々新たなるに由つて、其生が保たるゝと同様である。故に社會・國家が其自然の波瀾に棹し、宇宙の鐵則に順應しつゝ、其本命を全ふせんには、是非とも其變化せざる恒久的原理を軌範として



一切の事相を批判し、刹那／＼の時運に善處することが肝要である。随つて社會國家の運営施設に對する先決問題は、的確なる指導原理を捕捉することである。細胞組織に由つて生存する萬象は、必ず細胞の中心たるべき核を要する。核に由つて細胞の組織が保たれ、其處に生の表現を見るのである。人類は細胞組織の最も完全に發達せる有機體である。されば人類の共同團體たる社會には、當然中心となるべき核の存在すること勿論である。而して其中心たる核を稱して政府と呼び、其實權を總攬する者を主權と稱す。此主權と人民と領土とを國家成立の三要素と稱し、中に就て主權を特に必要と認めて居る。故に主權にして微弱ならんか、當然國體の鞏固を缺き、隨て政權の動搖も免かれざるものである。

我等の祖國は建國の始めより、國體の精神即ち生命が、絶對的原理の上に表現し茲に萬古無窮の主權を確立せられたのである。然し時代の思潮は變化窮りなく、國際間の波瀾亦起伏常なきを以て、其思潮に順應し、時勢に善處しつゝ能く大勢

を支持せんには、主權と脈絡相通ずる國體精神と、民族心理の實相とを指導原理とすべきは、理の當然である。然るに現在國政の樞機に當る者、並に之れを翼賛する者を見るに、何れも肝腎なる指導原理を茲に求めずして、全然立國の要素と歴史とを異にせる、他邦國の概念的乃至皮相的なる形式方策に模倣し依頼する爲め、何事を計畫するも、直ちに行詰りを生ずるは、痛歎に堪えざる次第である。若し我等が皇道の『まつり』即ち『まことのつらなり』なる原理を體得し、すがすがしく彌榮えに表現せる、皇運の實相を達觀し、國本の根機を味識し、之れを唯一の信念とし軌範とせば、其運営施設は必ずや國家諸般の真相と調和を得、萬事に會通し得べきである。然るに茲に根本の信念と軌範なき爲め、部分的に盲動し、其日暮しの政策に没頭し、其極財政經濟家は單に財政經濟の方面のみを考へ政治法家は單に目前の姑息的彌縫策に捉はれ、教化學術に従事する者は單に世界に於ける皮相文化に模倣追隨するを以て、到底渾然たる合理的政策を樹立する



能はざるのみならず、折角の努力も計畫も所謂木に竹を接ぐが如き結果となるのである。是れ余が口を極めて、現在に於ける國政の樞機に參與する者を始めとし、苟も憂國慨世の志士に向つて、夙に祖國肇造の大精神に目覺めしめ、以て百般施設運営の指導原理を是非とも國家唯一の皇道に歸依準據せしむべく、大聲疾呼する所以である。

昭和六年四月三日 神武天皇祭の夕

東都の客郵に於て

著者誌す

目次

指導原理としての皇道……………一  
 言靈に就て……………一八  
 神代史の哲學的考察……………三五  
 祖國の教化に就て……………五一  
 教育勅語下賜四十年記念式に於て……………六〇  
 教育勅語下賜四十年を祝するに際し中華民國に於ける教育史の回顧……………八六  
 論理學としての易學……………一三七  
 明治天皇を仰ぎ奉りて……………一六三  
 聖德皇太子の憲法と教化……………一七六  
 弘法大師の教育觀……………一九九



故井上梧陰大人の思想的價値を慕ひまつりて……………二二六

故西川須賀雄大人を偲びまつりて……………二三五

『マルクス』主義に對する批判……………二五六

危言三則……………二八六

我等の祖先……………三〇一

大和民族の優秀性……………三三四

國本培養の急務を論ず……………三三六

宏遠なる肇國の意義に就て……………三四三

經濟政策の根本的刷新に就て……………三五九

刻下の急務に就て……………三七五

開校滿二十年並に卒業生千人祝賀會に於て……………三八四

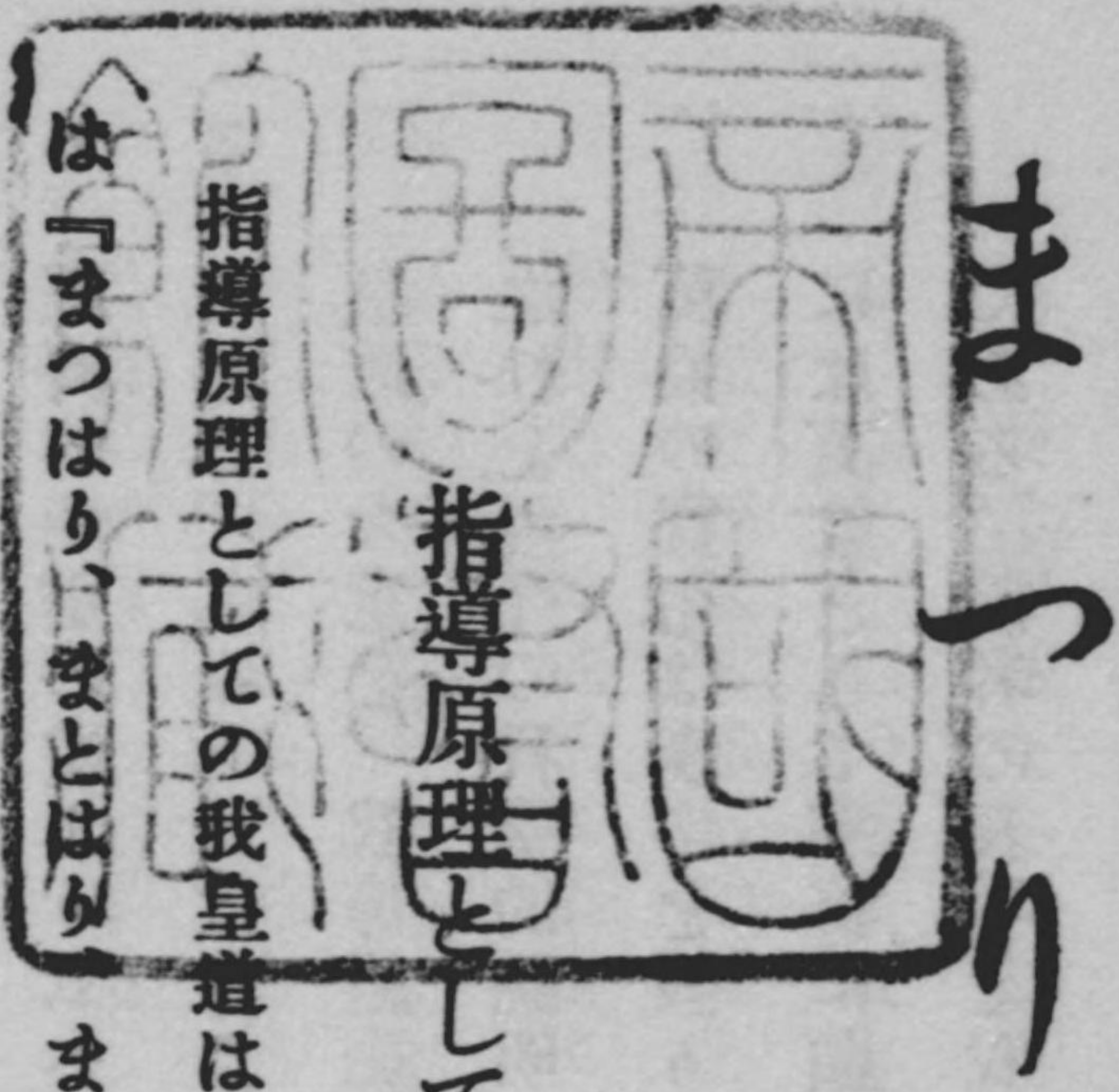
日本の教育學は是非とも和製でなければならぬ……………三九三

武家時代に於ける家庭教育の一事例……………四〇七

目次 (終)



龜山 神作濱吉 講述



指導原理としての皇道

指導原理としての我皇道は、一言にして悉せば「まつり」である。「まつり」とは「まつはり、まとはり、まとまり、まつろひ、まじはり」である。通じて「まことのつらなり」である。空間的には宇宙に充實豊滿せる萬象の表現であり、時間的には萬古に生々發展する生命の飛躍である。政治上の言葉で表はせば「しらす」である。聖徳皇太子の高調する所に従へば「和」である。價值感賞の意味から申せば「しきしまのみち」である。原理認識の意味から云へば、「ことだまのみ



ち」であり、「たまほこのみち」である。道德至善の意味から申せば、「みちやのみち」であり「すがくしきみち」(須賀神社の神靈の表現である)である。信仰敬虔の意味から仰げば「すめらぎのみち」であり「かながらのみち」である。生々發展の意味から申せば「ひいづるのみち」(靈出づるの道・又靈秀るの道)である。經濟的産靈の道より云へば「いやさかのみち」(八坂神社の神靈の表現である)である。「みち」は身・血であり、靈・血である。

皇道の大意を、我等祖先の叫びし言靈コトダマに就て申せば、前述の通りであるが、之れを現今の科學的説明に徴すれば、宇宙に表現する、萬象の實相である。

萬象の實相は漢字を假りて云へば、生であり誠である。此生即ち誠が空間的には萬象として宇宙に顯現し、時間的には生々發展して無窮の生命をなすのである。前者の表現を我等の祖先は「すがくしきみち」(清々しき靈血の意)と稱し後者の表現を「いやさかのいのち」(生々發展の皇運の義)と稱するの

である。而して此「まこと」即ち實相は事實的眞理としての學術的對象であり、愛・善・誠としての道德的對象であり、美としての感賞藝術的對象であり、信としての尊く畏き敬虔的對象であり、而も之れが渾然融合せる一元の本體と認識するものである。即ち此絶対的大價値なるが故に空間的に萬象を顯現し、時間的に萬古に無窮なる所以である。西洋の哲學者は兎角概念的であるから、空間・時間の觀念を特に超越的に認むるものなるが、我等の祖先は左にあらすして、絶対的價値なる「まこと」なるが故に自然と空に汪溢し萬古に無窮なるを認識し、「まこと」の信念と空間・時間の觀念を一元的に總合的に認むるものである。換言すれば時間は「まこと」の生命であり、空間は「まこと」の現象である。「まこと」を内觀することに由つて生命即ち時間の觀念を生じ外觀するに由つて萬象即ち空間の觀念を生ずるのである。(是れ即ち「まことのつらなり」である)之れが我等が皇道の一大特色で、同時に我等民族



の獨創的哲學である。再言せば「まこと」なるが故に「すがくしく」自然界に榮え「いやさかえ」に理性界に長しなへなる所以である。而して此體驗的認識は、根元の本體即ち「まこと」が自然界に表現せる實相を認めし上に於て、人生即ち理性界に於ける實相も同じく有るが儘に自ら生であり・真であり・善であり・美であり・信であることを、如實に認識し體得し、茲にありがたき「しきしまのみち」即ち皇道としての人生當爲の法則を表現せし次第である。

みち（靈血）の最も尊く畏こき表現を「まこと」又「かみ」と申すのである。此「まこと」の総合的表現の絶對的大價值を「みくらだなの神」と申上ぐ。「みくらだな」の言靈の意義は、主觀的には「みくらの種子」即ち價値の種子で、分解して申せば生・眞・善・美・信の種子である。客觀的には「みくらの種子」即ち倉廩の種子で分解して申せば萬象の種子である。總合して禮拜すれば絶對的愛（まこと）である。故に我等の祖先は此尊く畏こき大御神を「あまてらすすめらみこ

と」（又「あまてらすすめらまこと」・「あまてらすすめらおほかみ」と尊稱し奉りしものである。我等臣民一統の祖先は皆此大御神の靈血から分れ出でしもので、茲に「みち」（靈血）即ち「まこと」のつらなりを自覺し居る次第である。此大御神は言靈の示す如く萬古に照臨し給ふので其繼承者は永久に「すめらみこと」即天皇に坐すのである。隨て天皇は祖國國體の生命であり、國民信念の中心で在らせらる。而して斯く尊稱し奉れる言靈の意義は、自ら明瞭に理解さるるのである。即ち「あまてらす」と云へば、宇宙に照臨し萬古に無窮なりとの意味である。次に「すめら」の内容的意義は、

第一に 澄める意味で、清きこと・麗はしきこと・すがくしきことを云ふ。

第二に 濟める意味で、濁りし水の新たに濟めること・亂れしものが治まり

しこと・常に清々變化して愈々濟み涉ることを云ふ。

第三に 住める意味で、常住不斷安定の意味を云ふ。



第四に 進むと云ふ意味で、向上發展して息まざるの意味を云ふ。

第五に 綜べる意味で、一切を調和統制することを云ふ。

更に総合的に云へば、精純無窮の統制力である。易に所謂『大なるかな、乾元。萬物資りて始まる、乃ち天を統ぶ』の乾元は、生々の權を統べ司ることを稱へたる言葉で、其統ぶると云ふ意味が我等の『すめら』に相當するのである。次に『みこと』又『まこと』の言靈の意義を考ふれば、

第一に『まこと』とは孫事・孫所の意味で『まこ』孫は眞子・實子・靈子・生子で『ひこ』(日子・彦)『みこ』實子・靈子・御子・神子『ちこ』稚兒等と異名同質である。活く・生まる及び増殖の意味である。『生きる』『生まれる』と云ふこと程、確かなる『まこと』即ち事實はないのである。故に『生まれる』『生まる』ことを『まこと』と稱するのである。即ち生れた許りの嬰兒が教へざるに、本能的に呼吸し、乳を呑むことは自ら生さんが爲めの欲求

的動作で、是程確かなる『まこと』はないのである。故に此『まこと』の事實を生と稱するのである。易に所謂『生々曰易』と云ひ又『天之大徳曰生』と云ふも、同じ道理なることが分る。

第二に『みこと』即ち『まこと』は眞事・眞實・眞正にして實(又眞)の籠り居る所の意味で眞理・原理の對象を云ふ。世人の眞と稱する言葉は之れである。換言すれば自然界の實相を稱する言葉である。

第三に『まこと』は誠と云ひ・愛と云ひ・善と云ひ良心に恥ぢざる意志を云ふ。目に見えぬ神に對して恥ぢざる精神は即ち此『まこと』である。普通世人の稱する善は之れである。換言すれば理性界に於ける當爲の徳性を云ふのである。

第四に『みこと』は『見事』にして美しき意味を云ふ。換言すれば感賞界の對照たる美を稱するのである。



第五に「みこと」は生命（みこと）尊貴（みこと）の意味で、信仰の本體を稱する言葉である。余は之れを信と稱するのである。

以上が「まこと」又「みこと」に於ける言靈の内容である。繰返して云へば、「まこと」は「生くる」ことであり、生々發展して息まざる意味で、之れが「まこと」の本質である。此本質はすが／＼しく伸び、彌榮えに榮ゆる上に、眞實に生き、眞愛・至善に生き、純美に生き、信仰と與に渾然融合して生くるものである。隨て生・眞・善・美・信は一體となつて、互に相關係し抱容するものである。我等臣民の大御祖であり、同時に主君に在します天皇は、此絶對的價値即ち「すめらまこと」を表現遊ばさるる現神なるを以て、當然我等臣民は畏くも此「すめらまこと」に信順歸命することが「まつり」の本旨を表現する次第である。我等臣民は此「まこと」と同心一體をなすが故に、我等の信仰と云へば、其内容に必ず信仰・感賞・認識・道德・生々發展の諸相を抱容するもので、隨て他の一切の價値も皆以上の關係

と授を同ふするものである。是れ畢竟「まこと」が概念的にあらずして、實在的表現なる所以である。之れを「まことのつらなり」と云ふ。而して此「まこと」が人生一切の生活に表現するに際し、其根底をなすものは、あやに畏き大御祖と我等臣民との間に自然に天照發顯せる清愛で、（所謂「まことのつらなり」の機縁である）此清愛より忠孝一本の信念が発生せしものである。此忠孝一本の信念から父子の親も夫婦の和も兄弟の友情も朋友の信義も表現し、遂に完全なる人格を創造し得るものである。既に完全なる人格を創造し得ば、延ひて家庭の輯睦に盡瘁し、國家の福祉に奉公し、社會の平和に貢獻し得ること勿論である。

斯く述べ來れば、國民としての理想は「まこと」の全徳を具へる所謂全人格的國民たるべきことである。全人格的國民にして始めて一切の本務を盡し義務を完ふし得ると同時に、完全なる權利を享有し得るものである。此全人格的國民を忠臣と稱し又良民と稱するのである。此良民であり忠臣にして、始めて萬古無窮の



皇運を扶翼し得る次第である。此全人格者にして學者となれば、學術を以て社會國家の福利を増進せしむべく、道德家となれば安寧秩序の指導者たるを得べく、藝術家となれば、民人同胞の思想を美化し其處に感賞的生活を享有せしむべく、宗教家となれば國體に即し民族性に適へる安心立命の信仰心を感起せしむべきである。實例を擧ぐれば學者兼教育家としての菅原道眞が和魂漢才の智見を以て支那文化の芬芳精華を攝取し以て國民の智徳を培養し發展せしめたるが如く、道德家としての中江藤樹が實踐躬行身を以て子弟を徳化薰養せしが如き、藝術家としての人丸・赤人・定朝・康慶・雪舟・正宗等が、『しきしまのみち』を弘め大和魂を藝術上に表現し、以て當時は勿論後世に至るまで人心を美化し感賞せしめたるが如き、宗教家としての最澄・道元・日蓮・親鸞等が國體に即し民族性に適せる宗教を唱道せしが如き、經濟家としての熊澤蕃山・二宮尊徳等が道德を根底とせる利用厚生の經濟道を指導せしが如きものである。故に歴史を繙き國家革新の蹟を案ずるに

眞に「まことのつらなり」なる皇道の眞義を自覺せし英傑が、其中心の衝に當り居るときは必ず相應の治蹟を遂げ居るも、之れに反し此根本的指導原理を理解せざる士が中堅に當り居る際には、必ず革新の功を一簣に虧きしものである。一例を云へば大化の革新に失敗せしは當時の中堅人物たりし中臣鎌足を始め之れを輔佐せし士が、相應の人格者なりしも、惜しいかな其指導原理が肝腎なる『しきしまのみち』を疎外せし爲め、遂に不成功に終りし次第が理解さるるのである。明治維新の事業に就ても王政復古の一面的の事業即ち徳川幕府を倒壊せし事業には成功せしも、一面的の事業換言すれば主要的の事業とも云ふべき王政維新の創造に就ては、所謂功を一簣に虧き（肝腎なる神武創業の如き、根本的指導原理を理想とせる人材を缺きし爲め、唯目新らしき歐米文化の皮相に眩惑し、無批判的に模倣是れ努めし結果）遂に今日の如き行き詰りを來たすの因を醸成せしものである。此時に際し我等の感激に堪えざるは、長くも明治天皇の神格を具備せられ、終始



施政の大綱を總攬遊ばされし御事である。當時在朝の權臣は概して歐米文化の心酔者にして、祖國本來の教化を忘れ國體の真相並に民族心理の何物たるを辨知せざりし爲め、兎角脫線的政治に逸せんとせしを、幸ひにして叡明なる明治天皇の指導原理に由つて、辛ふして其危難を免れしものである。換言せば明治維新に際し若し明治天皇の在ませざりしならんには、明治中興の事業は到底表現し能はざりしを推察さるる次第である。而して明治天皇の指導原理と仰ぐべきは長くも天皇の御詠である。天皇の御詠は天皇としての宇宙觀並に人生觀を表現遊ばされしと同時に、國體の精華であり民族の生命であり、而も皇道の本旨を宣明表現せしめ給ひしもので、是れに勝る指導原理はないのである。故に當時在朝の權臣にして夙に皇道に目覺め、民族文化の眞髓を體得し、以て天皇の叡旨聖慮を衷心より味解し色讀し、以て獻替翼賛の功を全ふせしならば、天皇の叡圖をして層一層有終の美を濟さしめ得たるべきに、當時在朝の權臣の多くが、毫も茲に目覺めざり

しは惜みても餘りある次第である。

斯く叙べ來ると論者或は云はん、汝の説く所は餘りに頑固にして而も陳腐の言なりと、是れ畢竟祖國文化の真相を味解せざるものの贅語である。絶對的眞理は時の古今により、地の東西によりて變化すべきものでない。物質界の事實に就ても黄金は何時でも黄金であり、金剛石は何處でも金剛石である。易の眞理の如く變化するものは常に變化するも、變化の中には必ず不易の生命がある。人生社會も時勢の變調は免るる能はざるも、其變調に善處し其思潮の流れに棹すべき、舵とも磁針とも云ふべき、指導原理は毫も變化せざるものである。祖國の歴史を見ても其變遷の跡は一樣でないが、其間に流るる萬古無窮の生命は依然として少しも變らぬものである。是れ所謂皇運である。隨て此皇運扶翼の指導原理も亦自ら確乎不拔なる筈である。之れが即ち皇道である。此皇道は世界を通じて誤らざる絶對的原理なることは、事實に徴して明かである。



孔子の仁は我皇道の『まこと』即ち絶對的愛と殆んど同じ様に思はる。孔子は『天の道は誠なり、之れを誠にするは人の道なり』と説いて居る。即ち宇宙究極の大本體は誠であり、之れが人生に表現して仁となり、之れが宇宙に表現して生となる。(生とは前にも云へる如く、易に所謂生々之れを易と云ひ、又天の大徳之れを生と謂ふ意味である)而して仁の本始の表現を『恕』と説いて居る。換言すれば『恕』は仁の發芽で、一切の道德は茲に成立つと云ふのである。茲に孔子の道德觀が人生の自然に發生し、穩健着實の倫理學を構成する所以である。之れに就いて孟子は仁に對するに義を以てし、人生の至徳は仁のみでなく義が併立するものと云つて居る。即ち仁義は人生の兩面である。天に陰陽ある如く、地に剛柔の別あるが如く、人に仁義が存すると謂つて居る。孔子は仁が大本で之れから義も信も智も禮も表現すると説いて居る。即ち仁の根本内容には一切の道德要素が含容せられ居ると云ふのである。

隨て孟子は父子の親は仁に存するも、君臣の分は義に由つて成立すと説くのである。換言すれば父子の關係と君臣の關係は、根本に於て倫理を異にすると云ふのである。勿論中華民國の歴史を緝けば、同國に於ける君臣の關係は全く孟子の説く通りである。義一つで君臣の關係を繋ぐ爲めに、其關係は到底萬古無窮に表現し能はざるものである。其處に肇國の意義が我等の祖國と全然揆を異にするのである。我等の祖國に於ては、義に於ては君臣とも云へるが、情に於ては父子であると云ふ如くに、君臣の關係は父子の關係の延長せしもので所謂『まことのつらなり』である。斯く忠孝一本の『まことのつらなり』が一切の道德を表現するので、孔子は恐らく之れを理想として仁を説かれしものと思はる。此點が孔子の學説を以て醇乎として醇なりと稱せらるる所以と信ぜらる。宇宙の本體が一元なる以上は、道德の本源も是非とも一元でなければならぬ。一元なるが故に陰陽となり、剛柔となり生々發展し



得るものである。仁と義と道德の根本を二元となす爲めに、其處に種々の理窟が着くのである。一本の仁から義も起り禮も起り智も起り信も起るが自然である。我皇道の「まこと」は一元であるが、其内容性の主成分は、生であり眞であり善であり美であり信であり、而も此價値は互に聯絡交錯し調和融合するもので総合すれば絶対的愛であり「まつり」即ち「まことのつらなり」である。

文天祥は流石に卓見家であつた。彼れが平素の信條として身に着けし格言に「孔曰爲仁。孟曰取義。唯其仁成。不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>義至。」とありしは其抱負の程を推察することが出来る。彼れが空前絶後の偉蹟と芳名とを發揮せし其動機と信念とは、全く一本仁の精神的表現であることが分るのである。

我皇道の「まつり」即ち「まことのつらなり」の意義を味得するときは、易の哲理も孔子の仁も、悉く包含せられ居ることを認識し、而も自然に有るが儘に表現

せる深遠高大の絶対的價値を禮拜することが出来る。随て我等は「まつり」の信念を以て一切の指導原理となせば、愈々彌榮の皇運を無限に向上發展せしめ得ることを確信するものである。



## 言 靈 に 就 て

敷島の大和の國は、『ことだま』(言靈)の助くる國、又『ことだま』(言靈)の『ちはよ』(幸延よ)國と言はるゝ程に、我等の大祖先の遺せる言葉には、皆一つ／＼に、大祖先の生命が宿つて居る。換言すれば、大祖先の生命から、躍り出でたる叫びの聲が、言葉となつて、永久に生きて居るのである。故に此意味の言葉ほど、眞實のものはない。例へば我等の祖先が、火に觸れて我知らず『ひ』と叫んだ言葉も、氷に觸れて同様に『ひ』と叫んだ言葉も、本當の實感的發聲語である。昔し希臘の哲學者『ヘラクレイトス』が、宇宙の本體に『ロゴス』(Logos)と名づけたが、此『ロゴス』と云ふ語の意味は、言語であるとのことである。此點から考へても、實感の叫びから、出た言葉ほど、確實なものはない。隨て我等は大祖先の言葉を味つて行くと、其處に大祖先の體驗せられた、活事實が的確に了

解さるゝ譯である。若し我等の大祖先の時代に、今日の様な蓄音機の『レコード』があつたならば、我等は其『レコード』に由つて、親しく大祖先の音聲を、聽くことが出来る譯である。然し其『レコード』がなくとも、當時大祖先の叫びし『ことば』が現存し居る爲め、我等はこれを通じて、確實に大祖先の、意志を推知することが出来るのである。

此理由に由つて、國語は非常に大切で、而も貴いものなることを、證明し得ることが出来る。例へば我等の『みち』(道)と云ふ言葉に就て、其内容的意義を説明すれば『み』は靈であり、『ち』は血であるから、道とは人間の本性及び生活の眞相と、關係とを、如實に表徴するもので、取りも直さず、道の脈絡貫通せる状態は、血管の脈絡貫通せる實相と、同一状態であるとの理由が分る。又『ち』は乳であるから、道は單に人間の履むべき、軌範に止まらずして、更に人生を、より能く愛養撫育する爲めに、必要缺くべからざる、滋養素であるとの、意義をも



持つて居るのである。私が心の師として崇敬する、故西川須賀雄大人は『總じてちと云ふ聲は、人生養育の意味を表する言葉で、血・乳である。ちちと重ねるは、子を養育する徳を、稱へる所から出て居る。更に『みち』(道)とは、神明の域に通達すべき、道路の意味で、人を養ふ究竟的方法である』と云つて居る。更に『み』は美なり御なり三なり。『ち』は風なり路なり地なる故に、『みち』(道)の本質は、美しき上にも美しからしめ、豊かなる上にも、ますく豊かならしめ、貴き上にも、うたゝ貴からしめ、堅實なる上にも、いよく堅實ならしむる、意義を含んで居る。余は是迄屢々我等大祖先の、哲學なり宗教なりに就て、講演せし際に、我等の大祖先が、體驗的に覺識せる、宇宙の本體を、『ひ』(靈)と呼ばれしことに付ても、其關係並に實相を、的確に立證し得るのである。即ち『ひ』(靈)の發語を通じての無数の言葉が、互ひに參差交錯して、宇宙の本體が、『ひ』(靈)であるとの事實を、的確に證明し居るのである。例へば人生の本體が、『ひ』(靈)

である故に、此の『ひ』(靈)は本質的に、互に引く力があり、率ゆる力が起るのは當然である。其『ひ』(靈)の飛躍する状態を稱していきほひ(勢)と云ふも、是亦當然の命名と思ふのである。此の勢ひは思ひとなり、慕ひとなり、其極、濃ひ籠つてこひ(戀)となる。『こ』とは(籠)即ち籠るの義で、『ひ』(靈)の充實豊満せし形貌である。活潑々地・飛躍追進的本性の充ち盈てる、『ひ』(靈)は愈々飛躍發展して、遂に人生に夫婦の關係を生ずるものである。

戀は人生種族保存の根本要素であるから、所謂『戀は神聖』である。然し『ひ』(靈)は矛盾反對の性能を有する爲めに、(委しくは拙著『體系的國體新論』に就て參照ありたし)一步を誤れば、時に本能的情慾に陥るものである。所謂『戀は曲物(くせもの)』と云ふのも、これが爲めである。要するにこひ(戀)の意義は、『ひ』(靈)の大活動を物語る適例である。

斯く夫婦の關係が成立すれば、『ひ』(靈)はひすび(産靈)の作用に由つて、みた



ま(靈魂)となるのである。即ち『ひ』が『み』となるのである。既に『み』(身・實)となれば、其状態を稱してはらみ(孕み・腹實)と云ふ。物質的の形容詞を用ふれば、み(身・實)を包むが故に、包みとも云ふ。草木の花の初生の未だ開かざるものをつぼみ(蕾)と云ふも此關係である。『み』(身・實)となれば、其動作はたのしみ(樂)くるしみ(苦)なやみ(惱)うらみ(怨)いたみ(傷み)ねたみ(嫉)うらやみ(羨)等となる。斯く『み』の發語を通じての言葉には、必ずみたま(靈魂)の意義を包含して居ることが分る。『み』とならざる前、即ち『ひ』の場合には『ひ』を通じての言葉は、亦必ず其意義を物語つて居るのである。例へばおもひ(思ひ・念ひ)かんがひ(考ひ)したひ(慕ひ)たつとび(尊・貴・尙)うやまひ(敬)ねがひ(希ひ・願ひ)と云ふ様に、精神的意義を物語つて居る。彼のうたひ(歌ひ・謠ひ)まひ(舞ひ)などの如きは、『み』(身)としての動作の如く思はるるも、精神の形容が先であり、主であるとの意義が豫想さるるので

ある。此の如く言葉其物が、大祖先の生命の叫びであり、體驗の事實であることが、的確に了解さるるのである。随て我等は大祖先の遺せる言葉を吟味し、其處に同様の體驗と修養とを積んで、其意義を體得することが大切であり、且活きたる修養であり、實習であるのである。學問なるものは、單に文獻のみに就て研究すること、能く了るものでなく、更に先人の手形とも云ふべき、無限無量の言葉に就て、其内容並に意義を考察することが、一層有效の方法と思ふのである。地名の如きも其處に由つて起るところの意義が、絆りて居る故に、其地名の由來を攻究するときは、其歴史的事實は勿論、其他の關係事實をも、考察することが出来るのである。地名に意義の存在することは、殆んど世界を通じて普遍的事實である。況して言靈の幸延ぶ、敷島の大和の國に於ける、傳統的一切の言葉には、一々固有の意義を含み居ることは、當然の事實である。

更に我が大祖先の言葉には、今一つの特徴を有つて居るのである。そは我が大



祖先は、最初から一元的哲學的考察を以て、萬事を觀察せし故に、一元の發動に對し、必ず主客・表裏の相關的觀察を下せしものである。何物にも盾の兩面ある如く、觀察する所から、一つの言葉にも、自然陰陽・表裏の二義を含んで居るのである。例へばすすむ（進）の言葉に就て云へば、普通に解釋すれば、前進の方面を指すものなるに、我が大祖先の進むと云ふ言葉の内容には、すすむ（進む）澄む（澄む）と稱する止まるの意義を含んで居る。住む・澄むとは止まり・停まるの義で、進むと云ふ意義と同時に、止まる・静まると云ふ意義が在る。再言すれば進むと云ふ意義と同時に、止まり・停まると云ふ意義を有つて居るのである。孟子の所謂「科に盈ちて後進む」と云ふ意義は、稍、盾の兩面を見たる考察法で、偶然にも我が大祖先の考察法に、暗合するのである。故に攻むると云ふ意義と、同時に守るの意義を伴ひ、退くと同時に捲土重來の、進取力を養ふの氣分を有つて居るのである。即ち我が祖先が、如何に逆境に陥ることあるも、毫も屈伏せざ

りし所以が了解されるるのである。尺蠖の屈するは伸びんが爲めなりとは、眞に我が大祖先の逆境に陥りし際の、心行きを形容するに足る譬喩である。斯く思考せし原因を追察すれば、畢竟我等の大祖先は、生れながら大自然の崇拜者として、根本的に宇宙の本体を體驗直觀せし結果、宇宙の眞理は、永久に進展向上して、自彊息まざるものと、覺識せられしことを推察することが出来る。此の如く『ひ』（靈）の本質が、飛躍的である爲めに、進むと同時に退かんとするの性能を有し、浮かばんとすると同時に、沈まんとするの反能を生じ、遠心力と同時に求心力を生ずる次第となるのである。即ち『ひ』（靈）は矛盾反對の性能を有する故に、『ひ』（靈）の飛躍には、必ず表裏陰陽兩様の傾向を有するもので、隨て一つの言葉にも、此の矛盾反對・表裏陰陽の二義を、含み居ることが分るのである。即ち安しと云へば、支那語に従へば、大厦の中に女の居る形容で、極めて消極的安であるが、我が大祖先のやすしと云ふ言葉は、それと全然正反對で、やは彌、すは進むで、



追進的生氣を持つて居る。換言すれば追進的生命にして、始めて安心立命が得らるるとの謂ひで、積極的安である。即ち安んずると云ふ中に、追進向上するところの生命が、燃えて居るのである。いへ(家)と云ふ言葉は、支那流に従へば豕小舎の意味であるが、我がいへ(家)は、い(寢)へ(隔)で、寢所を隔つると云ふ意義で、一面から見れば消極的に感ぜらるるも、元來へ(隔)は即ちへ(重)で、一個の家も次第に分裂し、獨立して殖え重さなるの義を有つて居る。即ち一家の子孫が次第に繁殖して、次第に分家が出来て行くと云ふ、追進發展的意義を有つて居るのである。うごく(動く)と云ふ言葉も、一面にいする、ゆすると云ふ、意義を有つて居るから、動くと同時に靜まると云ふ、意義を含んで居る。いづくしみと云ふ言葉も、單に慈愛の意義のみでなく、一面にはちごそかと云ふ、嚴肅の意義を含んで居るのである。嚴島神社(市杵島神社)のいづくしみと云ふ言葉に、漢字の嚴の字を當てて居るのは、此意味である。親が子供を愛する、い

づくしみの心は、時にちごそかなる教へとなる。其のちごそかなる心は、いづくしみの一面の働きで、所謂いづくしみとちごそかとは、盾の両面の如き意義である。此の言靈の意義は、傳統的に後世に於ても、多々發顯して居るのである。即ち大祖先の眞精神を、味解體得せし、幾多真人の唱へ出だせる格言中には、全然一言一語の中に、陰陽表裏の關係的對照を、的確に云ひ顯はして居るのである。例へば負けるは勝ちとか、勝つて兜の緒を締むるとか、人は武士花は櫻とか云へる言葉は、何れも道の表裏と、盾の両面を云ひ露はすものである。即ち負けるの反面には、勝つとの意義を表し、勝ち誇る表面には、敗亡の因が潜み居るとの意義を含ませ、仁愛と正義とは、一元的本體の内外であり、剛と柔とは同じ道の兩面である。斯の如くして始めて敷島の大和の國は、言靈の助くる國とか、言靈の幸延ふ國とかの意義が、如實に説明さるゝのである。

更に我等の大祖先の遺せる、言葉の一大特徴と認むる點は、其追進的向上的精



神の叫びを、的確に如實に象徴し居ることである。然るに後世に至り、一部の學者が、如上の意味深長なる言葉遣ひを、狹義否極端なる消極的意義に曲解し、枕詞などと稱へて、單なる作歌的形式軌範となせしものありしに、不幸にも此等の曲解に雷同し共鳴する、似非學者相繼ぎ、因襲の久しき浸潤の極、遂に全然大祖先の活潑々地的生氣を沒了することとなりしは、真に遺憾の至りである。然し情々沈思熟考するときは、當然如上一部曲解者流の見解は、全然子供騙しの形式一邊の措辭たることを察知し得るのである。即ち我等が大祖先は、宇宙の大本體を、實在的に直觀し體得し、其本質は無窮に生々發展して向上し飛躍し、所謂自彊息まざるものと覺識し、隨て人生一切の信念理想は、進展飛躍的と認められたのである。故に此意義が一切の言葉にも作用にも、顯現することとなつたのである。されば我が祖先の言葉の中には、一見單なる感動詞、若しくは形容詞と思はるゝ節あるも、熟考翫味するときは、必ず其處に追進向上の意義と生命との含蓄

し居ることを發見するのである。隨て我國語と外國語とを對照すれば、其處に必ず的確なる觀念並に思想の差違を認むることが出来る。例へば支那流の『白髮三千丈』と云ふ形容辭と、我等の祖先が唱へし『千五百秋の瑞穂國』とか『細矛千足るの國』とか『寶祚の盛なること天壤と與に窮りなかるべし』とかの、實感語とを對照せば、兩者の思想的本質に、全然相違の點を發見し得るのである。又『やすみしし我が大君』の意義に就ても、若し漢字者流の解釋に従へば、八荒若しくは八紘に輝く、大稜威の天皇と云はるるも、これは空間的、一面の意義に過ぎざるもので更に時間的永久の意義がある。何となればやは彌、すみは進むの意義で、何處迄も向上し進展し、所謂萬世無窮に尊榮なるべき天皇と云ふことである。『あやに畏し』とは、畏き上にも彌増しにかしこかるべき謂れである。是に由て考ふるときは、枕詞の如きは後世の學者が、消極的に漢學者流に見解したる、消極的感動詞、若しくは一種の形容的措辭で、全然我が大祖先の潑刺たる、追進的向上



發展を念願する、精神氣魄の實感を減却するものである。此意味に於て真正なる我等の祖先の實感語は、我等の修養自覺を助くる、唯一の教権であり、恩澤であるのである。

更に我國語の一大特色は、一種の粘着語にして、思想の發表に至便なる上に、助動詞及び特殊なる接續詞（所謂てにをは）の作用と相須つて、思想の發表を、一層自在ならしむることである。故に我等の國語を、他の國語に翻譯するには、頗る困難なるも、他の國語を我等の言語に、譯述することは、至つて容易なるものである。是れ即ち我等の祖先が、夙に他國の文化を攝取するに、至大の便宜を得たる次第にして、隨て他邦文化の精華を自由に同化せし所以である。

以上説く所の『言靈』の意義から考察すれば、我等が祖先の人生觀は、的確に推知諒解し得るのである。即ち我が大祖先の『人生の目的』は、何處迄も追進向上的希求生活なる次第が分るのである。言葉を換えて云へば、何事も現在に於て

より、能く進歩向上を希求することが、人生の使命であり、目的であるのである。更に露骨に云へば、人生は現實に神としての人となり、神としての國を創造するのが、究竟の目的で、これが爲めには、生ある間は一刻も息むことなく、向上追進の氣魄を以て、自彊息まざることである。

此氣魄精神は後世の賢哲にも、屢々其實例があるのである。就中近代に於ける著名の實例は、舊米澤藩主たりし上杉鷹山である。鷹山が古稀の歳を迎へし時、壽筵を開かれ、近侍の者に懇切なる饗應をなせし後、改めて所懐を述べられしが、其要旨を摘記すると『余は是迄は相應に氣力もありしこと故、克己反省の效も聊か顯はれ、且近侍者も懇切に助言し呉れし故、格別の過失もなかりしが、今や全く老境に陥り、元氣も滅切り衰へたれば、自分は出来る丈、克己反省する積りではあるが、何分老衰甚だしく、諸事に慎しみの心弛みて、知らず識らず我儘も募り、氣短かになるかと、是れのみ獨り恐れて



居る次第である。況して今後は幾許もない餘命であるのに、萬一大きな過ちでも起る様では、折角是迄反省修養した、甲斐もなくなる次第であるから、何卒凡てのことに、見流す様なことをせず、少しも遠慮なく、思ふ存分忠告して貰ひたい』との事にて、孔子が七十にして矩を踰えずと、云はれしことと對照して、一入奥床しき感を覺ゆるのである。鷹山の如きは、眞に我等が大祖先の生命氣魄を、有するものと云ふべきである。

斯く各個人の理想信念が同一なる上は、社會的生活も、當然共存共榮を、目的とすることとなるのである。而してより能く進歩向上を期待するが故に、一切の行爲は、當然心身の最大能率を、發揮することとなる。現在の言葉で云へば、能率増進の下に、全力を盡して自他共榮の生活を、遂ぐることとなるので、而も日に新たに日に進むことが、宇宙の大道であり、人生の目的であるのである。隨て美しきものは、より能く美しからしめ、善きものはますます善くあらしめ、眞な

り誠なるものは、いよく眞に誠ならしめ、更に此等の統一總合の大成と實現とを、愈々益々進展向上せしめ、而も永久に隨處に、自彊息まざらしむることが、人生究竟の目的であり、所謂神ながらの大道である。

斯大道の意義が、政治に顯はるゝときは、所謂『しらす』で、祭政一致となり、道義即法治となり、君臣同體となり、治國平天下となるのである。教化に顯はるれば、個性發揮となり、獨立自尊となり、自他併立となり、機會均等となり、凡聖一如となる。經濟に施せば、有無相通じ、相互扶助となり、道德即經濟となり、共存共榮となる。藝術に顯はるれば、美を讃え、靈を尊び、風を移し、俗を易え、天を樂しみ、世を敬ふに至るのである。國防に施せば、愛を翳し、義を讃え、弱を扶け、暴を制し、所謂仁義の師旅となり、平和の保障となるのである。而して此事實は、大祖先の遺せる言葉が、一々の確に物語つて居るのである。隨て我が祖國は、肇國の當初から、平和の支持者であり、萬國共榮の率先者であることを、



史實に由つて宣揚し、證明して居るのである。故に國史國語の教育と宣明とは、内にしては國民精神の振興を助け、外にしては祖國をして、愈々益々萬國共榮の主唱者たり、鼓吹者たり得るのである。反言すれば、國史國語に根據を置かざる教育は、國民精神の涵養陶冶は勿論、國家統治に要する、政治思想の開発、並に社會運営に於ける經濟、其他國防の意義等に至るまで、不徹底の因を爲すと同時に、永遠に世界の指導者となり、優勝者たる資格と、實力とを贏ち得る能はざるものである。嘗て一世の宏儒碩學と稱せられし、故井上梧陰大人が文部大臣に就任せられし際、夙に國史國語の教科改善に、甚深の注意と努力とを拂はれしことは、今より追想して、愈々益々其卓見に敬服する次第である。世の識者希くは猛省する所あれ。

### 神代史の哲學的考察

我國體の優秀無比なることは、神代史の證明するところに於て、炳として明かなることであるが、世人は單にこれを神秘的に考察し、若しくは動もすれば、普通の宗教的見地に立つて解釋するものもあるが、これは何れも不可思議の甚しきものである。何となれば我等の國體は、現實の靈其者の飛躍發動に於ける、絶對的價値の顯現なるを以て、當然事實上からの確に説明し、論證し得るからである。諸外國の哲學を始め宗教道德は、多くは理想と現實とを、全然別物として考察するもので、此點が我皇道即ち惟神の教と、根本的に相違して居るのである。我皇道に於ては理想即ち現實で、靈即ち魂、魂即ち靈で、内觀すれば靈、外觀すれば魂である。而して靈（ひ）の本體は、始めもなく終りもなく、經もなく緯もなき、渾然不二の一元的實在で、毫も假想を許さぬ絶對其物である。即ち宇宙に於ける





萬象の實體は靈で、靈のひすび（産靈）が萬象である。更に繰返して云へば、靈は即ち魂、靈と魂と一致融合するものは是れ即ち神である。神を内観すれば靈で、外観すれば魂である。而して靈は所謂絶對的實在で、換言すれば在るべくして在り、在らしむべくして在るもので、自發的に伸展し發動するものである。此靈の大大體が大直靈であり、天御中主神である。故に天御中主神は靈の大本體であり、宇宙の實在である。即ち宇宙を内観すれば大直靈又天御中主神であり、外観すれば森羅萬象である。隨て萬象を還元すれば天御中主神となり、天御中主神が分々個々發動して、宇宙の萬象と顯現するのである。此分々個々の發動は、機械的に所謂分裂の意味と異つて、何處迄も統一の儘、即ち本體の儘の分裂である。（平易に云はゞ恰も一升の水の一合が水蒸氣となつて空中に飛散せしも形を變へたる水蒸氣は質に於て跡に残れる水と、同質であると同様である如くに）故に其分裂は質的に差異なく、唯量的に差異を認むるに過ぎないのである。換言すれば、靈

（ひ）と産靈（ひすび）との差異丈である。隨て分裂の分々個々も、本體と質的同一であることは勿論である。大直靈は斯く産靈の作用に由つて發顯するのである。産靈とは一の直靈が、百千萬の直靈を吸收統一して、魂となるの作用である。前にも云へるが如く、從來に於ける世界各國の哲學は、總じて物と心とを分ち、物質と精神とを別として考ふるが故に、心と精神とを以て無形の物とし、肉と物質とを以て有形の物となすも、我國教に於ては、根本に於て此區別を認めぬものである。所謂靈即ち魂、魂即ち靈である。理想即ち實在、實在即ち理想である。質を認むると同時に量を認め、性を認むると同時に體を認むるのである。元來宇宙の萬象は、無形とか有形とかに、兩立して實在しつつあるにあらず。不二一體である。直靈は純にして極微稀薄なるも、これが吸收統一即ち産靈となつて魂となり、其魂の發達して其輪廓を膨脹するのが、荒身魂（肉體）である。何れも其處に自ら性あり質あり量あり體があるのである。而して産靈は一方に分裂作用を



起し、其分裂は更に總合して次第に高次の進展をなし、更に分裂し總合し、所謂肢體の關係を以て、愈々擴大し向上して息まざるもので、これが靈の本質であり、實體であるのである。此靈が眞の實在で、此實在は無に對する有の意味にあらずして、絶對的實在である。絶對的實在なるが故に、在るべく在るのである、在らしむべくあるのである。言ひ換ふれば、在らねばならぬ爲めに在るのである。即ち此實在が靈であり生命である。隨て無限に進展し、萬古に無窮であると同時に、一面には産靈となつて有限的顯象となり、空間を充たすのである。

此の如く天御中主神は、産靈の發動に由つて、無限に分裂し、顯象となつて、空間的に萬象を顯現するのである。而して其發展性は、無始無終無經無緯に、具體的根源的統一性を以て、所謂自彊息まざるものである。易經の「生々之を易と謂ふ」天の大徳を生と謂ふ」又「天行は健なり」と云へるは、靈の活動を形容するに最も適切の用語である。而して其發顯するや、宇宙の萬象即ち一切の環境と

交互順應し、反應するの特性あると同時に、更に其關係は、同一の肢體關係、即ち相對不離の結合を持續して休まざるものである。其實證は次に考察する天神七代地神五代の神々は勿論、以上と八百萬神の協同一致、渾一總合の下に作用し發顯せし事實が、的確に證明し得て炳かである。

天御中主神の斯くして顯現せらるゝ際に於て、其最も顯著にして、高大無邊の神格を顯はせし神を、高皇産靈神と稱し奉るのである。即ち此高皇産靈神は、宇宙の萬象を掌る神で、學者は之を自然界の現神と崇め奉るのである。科學は此大神の考察に基調を置くものである。更に一方には理性界生命界を掌る所の神靈が、神皇産靈神で在らせらるゝのである。此神は現象界の分裂活動を、總合し還元して、大直靈の本體を引締むることを、掌らるのである。然し吳々も注意するところは、此二柱の大神は天御中主神が機械的に分裂して、質的に差異ある神となつたことでないのである。前にも云へるが如く、二柱の大神の本體は、天御中主神



で、唯主観すれば神皇産靈神で、客観すれば高皇産靈神で、一方は専ら現象であり、一方は専ら直靈であるに過ぎないのである。随て之を總合渾一的に拜すれば、天御中主神である。此の如く大直靈の分裂活動を、主観的に考察するときは、無限の生命と有限の現象と分るので、この無限の生命即ち時間的活動を掌る神が、宇麻斯阿斯訶毘彥地神並に天常立神であり、有限の萬象即ち空間的現象活動を掌る神が、豊雲野神・國常立神である。然し此時間空間は、決して實在するものでない、唯靈の生命に由つて時間を考へ、靈の顯象に由つて、空間を察するに外ならぬのである。故に時間から客観すれば靈であり、空間から客観すれば萬象であるのである。即ち靈の實在に由つて、内観的に時間を考へ、外観的に空間を感ずるのである。西洋の哲學者は時間・空間の觀念を超越的に認むるが我等の祖先は之に反して、絶對的靈なるが故に、自然と顯現し萬古に無窮なりと認識し、靈の信念と空間時間の觀念を一元的に認むるものである。換言すれば時間は靈の生命で

あり、空間は靈の現象である。恰も中庸に「誠あらざれば物なし」と云へるは、取りも直さず我等祖先の宇宙觀を言ひ現はせる格言である。常立とは底立の義にして、天常立とは時間の經過を意味し、國常立とは空間の廣延を意味する言葉である。一言にして盡せば、靈の實在に由つて、宇宙の概念を構成する意味である。靈は時間的に空間的に飛躍活動し、向上發展するものであるが、其次第と傾向とは、自ら種々の性と相とを、發揮するものである。而して其最も特異の性向は矛盾反對の相である、即ち一方には飛躍せんとするの性あるに反し、一方には固着せんとするの性がある。一方には悩みあると同時に、一方には怡しさがある。一方には積極的ならんとし、一方には消極的ならんとするのである。此矛盾反對の性向あるが爲めに、常に活動し進展するものである。物理學上の説明を以てすれば、遠心力と求心力との關係の如く、又ポテンシャル・エネルギーとカイナチック・エネルギーの如きものである。更に電氣に例を取れば、同じ電氣がプラスとマ



イナスとの兩性に分るる様なものである。一方に己れ自ら生きんとするの競争心があると同時に、一方には相互扶助の性向があるのである。此性向が靈の特色で、最も注意を要すべきことである。靈が無窮の生命を以て、無限に生々發展して息まざる所以は、全く此相對性があるからである。易理から言へば、大極の分れて陰陽兩性となると同意義である。宋儒の性理説から云へば、大極の分れて氣とを生ずると同意味である。生物學の原理は最も的確に之を證明するものである。譬へば吾人の身體の成長に付ても、一方には甲狀腺の作用に由つて、無限に膨脹せんとするに對し、一方には松果線（腦下垂體）の作用に由つて、極力引締めようとするが如きものである。心臟の鼓動に付ても、迷走神經は一圖に鼓動を急ならしめんとするに反し、交感神經は極力之を緩和せしめんとするが如きものである。又靈は自由を欲すると同時に、一方には拘束しようとする性向がある。即ち自由を望むが故に、自然と拘束の欲望が起り、拘束せんとする爲めに、自由なら

んとするのが靈の活力である。然し此矛盾反對は、所謂矛盾せんが爲めの矛盾にあらず、又反對せんが爲めの反對でなく、靈其物の絶對的根源的一元性の本質、即ち自然に渾一總合の機能あるに由つて、然るものである。陰と云ひ陽と云ひ、プラスと云ひ、マイナスと云ひ、本質的に二元的のものでなく、靈としては純然たる一元的であり、所謂物心一如である。此相對性關係は、全く靈其物の活動性で、單に主觀と客觀との相違に過ぎないものである。此矛盾反對の特性を表徴する神が、宇比地邇神・須比智邇神である。宇比地邇とは浮ぶ靈の義で須比智邇とは沈む靈の義で、（從來「ひぢ」は、單に泥の義にのみ解釋せられしも、余の考ふる所によれば「ひぢ」は靈血（ひぢ）である。）陰陽と云へるが如き相對關係を有する特性の神體である。此矛盾反對の本性があるが爲めに、發生成長があり、組織建設が起るのである。譬へば屋根は上より下に落ちんとするに對し、柱は之を下より上に支ゆるが如く、壁は左右何れにか倒れんとするの性向があるが爲めに、之



を支ふべく梁や楹が、左右何れにも倒すまいとするの働きが起るのである。植物の種子には自然に芽を吹き出さんとする、性向あると同時に、反対に種子の外皮は之れを引留めんとするの、作用があるのである。發生なり、成長なり、組織なり建設なり、皆この相對性原理の作用から起るものである。即ち角杙神活杙神の作用は、此特色を發揮して居るのである。『くひ』とは『くむ』の義で、『芽ぐむ』『涙ぐむ』と同じ意味である。又角（つね）とは芽（め）の事である。角杙とは『芽ぐむ』生杙とは『いきぐむ』である。既に靈の發生・成長・組織・建設の作用ある上は、更に之を擴大し向上せしめんとするは、自然の欲求である。即ち此擴大向上の特色を有し、其作用をなすが、大斗乃地神、大斗乃辨神である。大斗乃遲とは陽性的大の意味であり、大斗乃辨とは陰性的大の意味である。此の如く靈の擴大向上的發展性は、更に圓滿充實を欲求するものである。此圓滿充實の神が面足神、惶根神である。面足は形の豊滿を意味し、惶根は心の充實を意味する。

以上靈の發生・成長・擴大・向上・圓滿・充實に由つて、彌榮えに靈の發達進展する上は、更に之を調和し統攝し、以てより能き價值を、創造せんとするの欲求は、無限に生々發展せんとする、靈其物の生命であることは當然である。例へば經驗に付て言へば、宇比地邇神・須比智邇神以下陰陽四柱の神の經驗は、分裂せし靈、即ち肢の經驗で、之を統合し、全一の體としての經驗、即ち總合渾一體の經驗として、統合調攝せんとするの傾向は、靈其物固有の性であり、力であるのである。即ち此大飛躍大作用を掌る大神が、伊邪那伎神・伊邪那美神である。此二柱の大神が、奮勵精進して絶對無比の大價値を創造せんとし、而も之れに以上の諸神並に八百萬神が、協力同心の下に、愈々大成創造せられたる大價値が、畏くも天照大神である。此偉大圓滿なる大神の顯現に由つて、始めて伊邪那伎神は、御自身の大御實なる『みくらだなの神璽』を、天照大神にお授けに相成り、之を以て大神の御本體とせよと仰せられたのである。故に天照大神（現神の御名）の



御本體を「みくらだなの神」(大直靈の御名)と稱し奉るのである。而して此「みくらだなの神」の御本體の大價值は、如何なるものと窺へば、内觀すれば諸徳の種子(御位の種子)の義にして、現代的哲學の言葉で云へば、生・眞・善・美・信の種子である。外觀すれば萬象の種子(倉廩の種子)と云ふことである。三種の神器は、此神の象徴で、其意義は教化・政治・經濟の本源を意味すと申すべく、又平等・差別・調和の象徴とも仰ぐべく又百般事實の要素、即ち學術・道德・藝術・宗教の本源とも、考察せらるゝのである。(因に言ふ從來三種の神器を、單に智・仁・勇の三徳に考察するは、儒學に没頭せる少數學者の偏見に過ぎざるものである。此點は深く反省を要すべきである。)而して更に之れを総合的に考察すれば、所謂絶對的愛である。實は「みくらだなの神」の大本體の内容は、餘りに廣大無邊にして、今日の學術的用語を以てしては、到底表徴し得べき適當の文字がないので、止むなく吾人は假りに絶對的愛と云ふ文字を當つる次第である。佛教

の言葉を假りて へば、大慈悲である。孔子の言葉で申せば、総合の仁である。然し此等の文字文にては、到底「みくらだなの神」の大本體を、象徴することは不可能である。歐米の哲學を主張する學者は、生・眞・善・美・信を総合渾融せし大價值を、聖と稱する。さもあるが、此聖と云ふ意義は、到底「みくらだなの神」の御本體を象徴するには、餘りに貧弱の文字である。何となれば聖とは單に智徳の優れたる稱呼に過ぎないのみならず、彼等學者の聖とは、全く空想的概念の上に拵へ擧げたる空稱で、謂はゞ乾物の聖であり、ミイラの聖であるのに、之を以て恰も太陽の燃ゆるが如き、止むに止まれぬ無限絶大の愛を表現あらせらるゝ「みくらだなの神」の御本體を象徴するには、勿論不充分であるからである。儒教では愛を七欲の一に見て居る。勿論仁を以て博愛の義となす故、総合の仁には愛の義を含み居るならんも、兎角儒教の愛は、相對的愛であり、利害的愛であるのに、「みくらだなの神」の御本體たる絶對的愛は、全然利害を超越したる、没



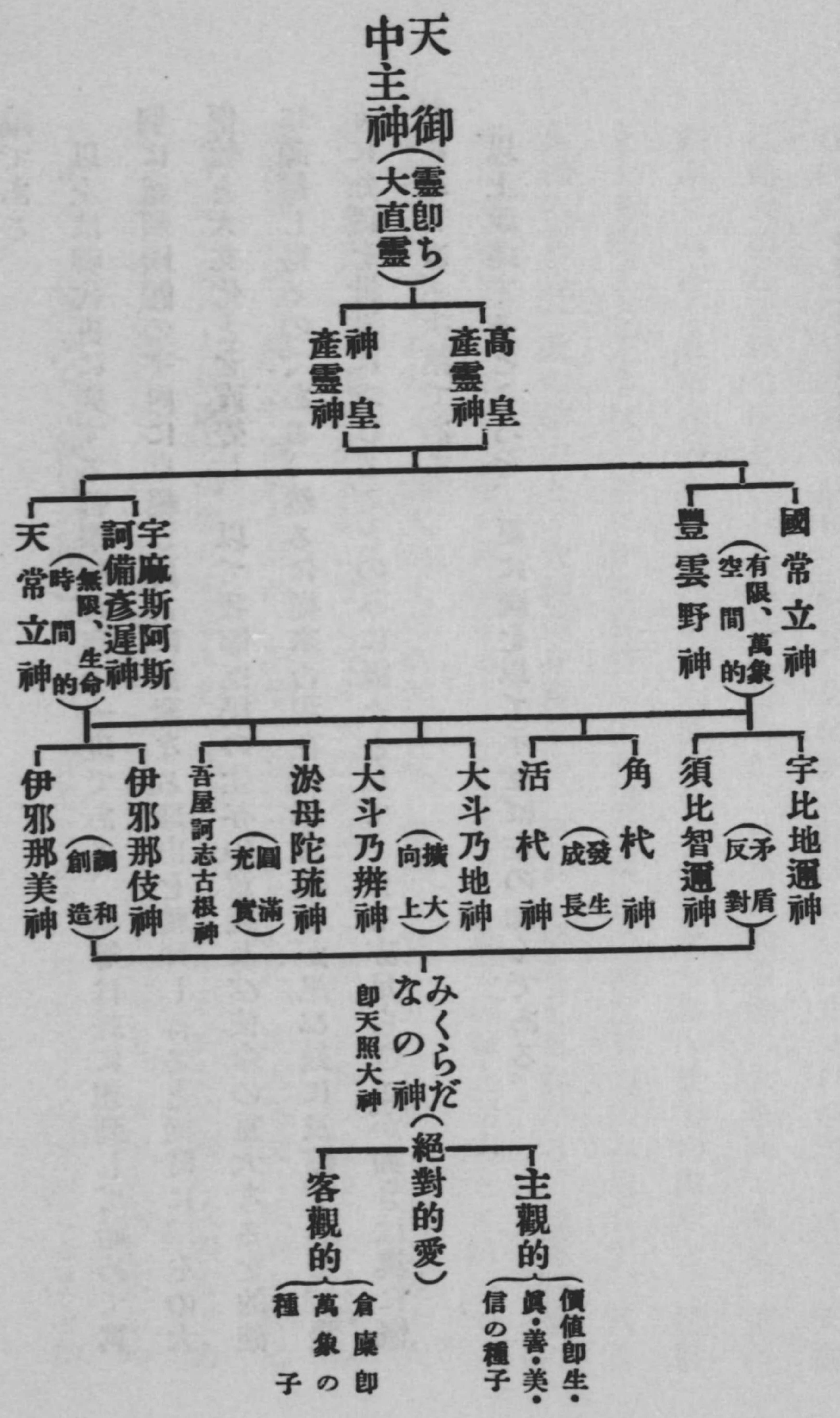
我的愛であらせらるゝからである。此絶對的愛は止むに止まれぬ至上愛で、大神は此大御心を以て世をしらし召されたのが、日本帝國肇造の大事業である。更に顧みて『みくらだなの大神』が斯る大價値を、發揮せらるゝまでの由來と、體驗とを考察するときは、單に伊邪那伎・伊邪那美兩神の精進努力のみならず、八百萬神の共力一致の助力と、大神御身親らの、惱みに惱みを重ねたる、修養體驗の成果であらせらるゝことを、拜察することが出来る。斯る因縁と努力とに由つて、創造大成せられたる、偉大至上の御神格は、當然止むに止まれぬ、正義仁愛の大御心となつて、上は高天原にまします天津神並に八百萬神に報ひ奉り、下は葦原瑞穂國に降り給ひし諸神を始め、我等同胞民族の爲めに、廣大無邊に政治と教化とを垂れ給ひし御事と忍察せらるゝのである。故に此大御神が祖國の大根本であり、大生命であらせられ、而も之れを承け繼がせ給ふ現神を、天皇と稱し奉るのである。隨て天皇は國家の原理であり、中心であり、生命であらせらるゝこと勿

論である。

以上は神代史に對する哲學的考察の一斑である。我等は茲に想到して始めて眞個に祖國國體の宇内に卓絶し萬古に無窮なる理由を禮拜し得ると同時に、その大價値と大文化とを直覺し、以て我等臣民の生存の意義及び使命の重大なるを的確に諒解し得るのである。然るに従來否現在の學者識者が思ひ茲に及ばずして、漫りに知識を世界に求むることのみに汲々として、日も亦足らざるが如きは眞に慨歎に堪えざる次第である。

以上説述するところを、更に圖を以て示せば左の如くである。





### 祖國の教化に就て

祖國の教化は、「をしへ」と云ふ。此「をしへ」の意義は、一言にして悉せば、愛の統攝である。故に祖國の教化の精神は、「愛」である。即ち「をし」は「愛」にして「へ」は「綜る」である。愛は人生生活に於ける、唯一至上の徳なるも、之れを無意識に表現するときは、或は偏愛となり、或は濫愛となつて、其處に怨恨呪の根を、發生せしむるものである。愛即ち「いづくしみ」の意味は、一面には温情的であり、他の一面には嚴肅的である。隨て「いづくしみ」に對し、一は漢字の「慈」を當て、一は「嚴」を當つるのである。この寛嚴宜しきを得ること、が、愛の統攝であつて、茲に祖國教化の根底が存するのである。

以上は「をしへ」の正面的乃至積極的意義で、更に「をしへ」の裏面的乃至消極的意義は、「をし」とは「食」の謂はれである（「をしもの」とは食物の謂ひであ

祖國の教化に就て



る)即ち母性が嬰兒をはぐくみ養ふに、己れの乳を以てするも、愛のまに／＼濫りに與ふれば、却て嬰兒の發育を害することとなるから、其處に乳を與ふる注意と調節とが必要となる。是れ即ち純眞愛が理性化せしもので、此呼吸の意味が教への淵源となるのである。換言すれば母性が嬰兒を育くむべく、純眞の愛情が理性化して、乳を調節する爲め、其處に『をしむ』(愛む・吝む・惜む)と云ふ意義(食物を愛む)を發生し、目前の愛を忍びつゝ、嬰兒の將來に對する福祉を念願し、涙を吞んで與へたき乳を節用することとなるので、この理性化せし愛が、頓て圓融的教化を表現する次第である。

『をしへ』の根本的意義の大意は、前述の説明にて悉せるも、更に其内容たる道徳・學問・藝術・信仰等の事實に就て考ふるも、それ／＼民族文化の特殊相を認むると同時に、而も祖國國體精神と、生氣脈絡相通じ居るの、實相を認め得るのである。第一に祖國道徳の基調は、親の子に對する、純眞愛の善化せしものであ

る。然るに一般道徳に於て、其標準とする所の善(即ち誠)は、概念的で而も各自良心の認識に由るものなるが、其道徳的良心は、各個人に於て、必ず多少の相違がある。隨て其認識に於ける、善(即ち誠)の信念に於ても、自ら相違を生ずるは、理の當然である。然るに親の子に對する、純眞の愛に至つては、誰も同じである。即ち貴族の親が子に對する愛情も、平民のそれも、將亦資産家に於ても、無産者に在つても、變りのないのが自然である。唯其の愛の量と、之れを表現し、統攝する方法、換言すれば、知識の程度と、關係とに相違を見るのである。此純眞なる親子の愛の醇化し、善化せしものが、取りも直さず忠孝一本の信念で、祖國道徳の基調なると同時に、其特殊性が認めらるゝ次第である。次に祖國の學問に徴するも、特に個性の著るしきは『しきしまのみち』である。斯の道は我等大和民族の、宇宙觀・人生觀の表現で、是亦純眞の愛と、有るが儘に信順する、思潮の原理化せしものである。茲に基調を置く所の、祖國の哲學なり、精神科學な



りは、全然民族精神の、表現なること勿論である。此學問的原理と精神とが、根本思潮となつて、外來文化を同化し醇化し、以て國體精神を、啓培向上せしめつゝあるのである。次に藝術に就て見るも、亦如上の原理と精神とが、渾然融合せる、内面的美觀より、表現する創造的事實なれば、自ら特殊性を發揮し居ること、事實に徴して明かである。即ち我等祖先の遺存せし藝術的作品、例へば詩歌なり、建築物なり、彫刻品なり、將亦繪畫其他の工藝品を鑑賞せば、其處に一々國體精神の實相と、民族思想の特徴とを、認め得るのである。次に信仰に就て考ふるも、亦、同様である。他民族の宗教は、概して概念的理想を、本體として信仰する故に、其本體たる神は、全然人生と別物で、人生は何時までも、人生であつて、纔かに神に近づき得べきも、到底神となり得ざるものと、信じ居るに反し、我等民族の信仰主體は、全然此の如き概念的理想にあらざして、眞實なる神を信仰する故に、人生も修養次第、信仰次第に由つて、遂に實在の神にまで、靈化せしめら

るゝことを、痛切に確信するので、茲に特殊の信仰があり、宗教が存する次第である。

猶太教の信奉主體なる「ヤーエ」(普通「エホヴァ」と稱す)にしても、基督教の「ゴッド」にしても、「マホメット」教(即ち回教)の「アラ」にしても、佛教の阿彌陀佛にしても、其他「ゾロアスター」教並にそれより分派せし、摩尼教にしても、其信奉する神は、何れも概念的・假定的で、而も絶対に人生と別物である。然るに我等大和民族の信仰主體は、此の如き假定的若しくは概念的にあらざして、現實なる神靈に、即せし信仰である。即ち天津神を始め奉り、皇祖皇宗の諸神は、何れも我等の祖先に在しまして、實在的に生・眞・善・美・信の圓融表現なる「あまてらすすめらまこと」に在しませば、斯神靈は我等を生・眞・善・美・信化せしめ給ふ、靈の本源なることを、眞實に禮拜認識しつゝ、信仰するものである。茲に我等民族の信仰が、萬古無



窮の大生命を、向上發揮して、息まざる次第が、納得さるゝのである。

更に概括的に言へば、元來我等祖先の教化に於て、祭・政・教の三綱を擧ぐるも、これは三なると同時に一であり、一なると同時に三である。即ち「まつり」とは、單に神を祭る丈の、意味並に行事にあらずして、同時に神の子孫たる、同胞民族を養ふことである。余の尊敬する心師、故西川須賀雄大人は、「まつり」の意義を、「まつはり」(待張り)、「まとはり」(纏り)、「まじはり」(交り)の外に、「まつらなり」(眞連合)で「ま」は「み」に通じ、「身」(靈)であり、「つり」は「釣り」に通じ、「つらなり」であるから、「靈」と「身」と連る意味である。言葉の上に「つ」の聲を冠らすものは、總じて連結の意味を表はして居る。其一例を言はゞ、「つり」は物が物を曳き寄せて、彼と此とを連結する意味である。「つぎ」は「次」「續」「嗣」「繼」等にて、子孫の次々と祖先の遺跡を連結して、絶えざらしむる意味である。「つる」「つま」「つもの」「つみ」「つた」「つと」「つつむ」「つどひ」「つづく」「つく

のふ」など、皆連結の表現語である。又曰く「まつり」を約めて云へば、「まち」である。「まち」は「眞血」で、正統の祭りの意味である。總じて「ち」と云ふ聲は、人生養育の意味を表する言葉で、「血」「乳」である。「ちち」(父)と重ねるは、子を養育する、徳を稱へたる所から出て居る。更に「みち」(道)とは、神明の域に、通達すべき道路の意味で、人を養ふ究竟方法である。又曰く「まつろひ」の言葉に、漢字の「服従」を當るも、これは餘り穩當と思はぬ。寧ろ信順とでも唱ふべきである。何となれば「まつろひ」は「まつり」と同じ意味であるからである。即ち天子の天津神に、盡させ給ふ道を「まつり」と云ひ、臣民の天子に仕へ奉るを、「まつろひ」と云ふのである。換言すれば「まつろひ」は「まつり」と同じ意味であつて、天子の天津神に、盡させ給ふ道を「まつり」と云ひ臣民の天子に仕へ奉るを、「まつろひ」と云ふのである。「まつろひ」は「まつり」を延ばしたる言葉で、「まつろひ」を約むれば「まつり」となること、誰も知るところである



と云つて居る。此等の理由から考ふるも、『まつり』は神に奉仕すると同時に、同胞民族までも、養ふべき意味なることは、疑ひなき事實である。再言すれば、祖神の遺訓に従ひつゝ、生活の資料即ち食物を始め、其他の必需品を創造し生産し、以て祖神の靈に、感謝の實を擧ぐる（即ち『うやまひ』にして、『うや』は『ゐや』とも云ひ、謝禮の意味であり、『まひ』は『幣』で物即ち事實である。即ち神に物を供へて謝禮の意を表することである。委しくは拙著體系的國體新論を参照ありたし）と同時に、之れを以て、同胞民族を養ふことが、『まつり』の本旨である。

茲に於て我等は、重ねて高皇產靈神の『神籬ヒコノサキの神勅』を禮拜し奉るときに、彌増しに神威の尊嚴宏大なるに、感佩措く能はざる次第である。

以上の旨趣なるを以て、現今の學術的用語を以て『まつり』を解釋すれば、共存共榮即ち經濟である。隨て祖國の經濟は神聖なる『まつり』に淵源する次第が、理解さるゝのである。而して此共存共榮的經濟即ち『まつり』の意義と事實とを、

完全に實現せしむることが『まつりごと』(政治)である。而して祭政一致即ち經濟と政治との、協調を完全に實現せしむる作用が『をしへ』即ち教化である。故に祭・政・教即ち經濟・政治・教化の三者は、素より渾然融合すべきもので、隨て此三位一體の圓融的表現が、取りも直さず、祖國の國體なるを以て、此國體精神を向上發展せしむべく、全國民に自覺せしむることが、祖國教化の目的であり、使命であるのである。



## 教育勅語下賜四十年記念式に於て

長くも今回教育に關する勅語下賜四十年を迎ふるに際し、茲に、朝野を擧げて此の喜びを等ふすることは、誠に歡喜に堪えざると同時に、此の聖勅を下し賜はれし、當時の世相を回顧すれば、眞に感慨無量に堪えませぬ。私は明治二十一年の初めに、郷里の千葉縣から東京に出まして、獨學の傍ら聊か教育學藝に關する新聞雜誌の編輯事務に携つて居りしも、偶々知人の斡旋に由り、明治二十三年八月、初めて今の東京高等工業學校に職を奉ずることになり、若年且未熟なるにも拘はらず、修身科を擔當することとなつて、随分苦しい經驗を重ねて居る際に、其年十月三十日を以て長くも教育に關する勅語の謄本を、同校に下賜せられましたので、教官の末班に列なる身分でありながら、何とも申上げ様なき、感激に打たれたのである。随て本日此の吉辰に當りまして、特に本市教育會より、此の佳

辰に因める、一席の講話を委囑せられしことは、寔に光榮の至りと存ずると同時に、一層感激を加ふる次第である。由て聊か卑見を申述べて、御高囑の責めを塞ぎたいと思ふのである。

お話は少しく前に洩るが、我國民が維新の大業を仕遂げし事は、歴史的に偉大の事業に相違なきも、熟考へて見ると、革新の動機と結果とに對しては、別に申し上ぐる事もないが、唯遺憾に存ずるは、國民全體は勿論、それに携つた先輩有志の士が、其革新に對する、充分の確信的抱負と、實力的準備とを持たざりし事である。然し之れは止むを得ざる事情で、寧ろ言ふ方が無理かも知れぬ。元來何れの時代の政治的革新に付ても、此の點は免れざる事と思はるのである。而して革新の際には、必ず革新派と保守派との二つに分れ、其の勢力は概して伯仲するもので、茲に革新の事業が、兎角種々の餘波を惹起す事となるのである。大化の革新にしても然り、建武の中興に於ても同様である。大化の革新が、充分に



成功せざりしは、保守派の勢力侮るべからざりしに因ると云ふものゝ、畢竟革新派に如上の確信と準備とに、缺陷ありし爲めである。建武の中興も、思ふ如く進行せざりしは、不平將士の反動に因るとは云ひながら、是亦革新派に、根強き確信と、期待と実行力とが缺けて居つた結果である。明治維新の事業に於ても、單に王政復古の大目的は名實共に成功せしも、其裏面に於て、革新に對する充分の確信なく、準備なく實力なかりし爲め、所謂前門虎を防ぎ、後門却て狼を容るるが如き、始末となつた。即ち國內には不平の徒の叛亂となり、國外には不名譽の條約を締結し、千載拭ふべからざる國辱を受くる事となつたのである。而して此不準備は、全く祖國を擧げて、長夜の眠りに耽らしめ、之れが爲め世界の狀勢に無關心ならしめたる、徳川幕府三百年來の失政に基因するもので、單に國民全體を深く責むることが出来ぬのである。今當時の事態を回想すれば、我國民は能くも長夜の安眠を貪つたものと思ふのである。彼の十五世紀の終りから、十六世紀

の始めに當つて、西班牙・葡萄牙の兩國が、互に海外渡航を競ひ立ちし時代に、西班牙は「コロンブス」に由て、亞米利加を發見し、葡萄牙は「バスコダガマ」に由つて、印度方面に渡航を開いて、一方は西へ西へと進み、一方は東へ東へと進んで、競ふて海外領地の發見を企てし爲め當時日の出の二大海軍強國が遂に我國の近間で、鎬を削つて活躍し、頻りに警鐘を亂打する様な、始末ばかりでなく、何時兩強國の軍艦が、我國の港に打寄するかも知れぬと云ふ、極めて物騒な場合であつたから、何としても我國民は、何時迄も長夜の安眠に耽り居ることは、出来なかつたのである。況して一方には此等外國人が、頻々漂着したり、亦其の漂着を奇貨とし、其の手蔓を以て、九州の雄藩中には、秘かに彼等と通商貿易を營む者さえ出現し、其の後更に西班牙・葡萄牙に次で、和蘭が起り、英吉利が起り、亞米利加が起り、露西亞までも、互に競つて我國に迫る様になつたので、是れが爲め漸く海外の事情を知る者も出で、徐ろに長夜の眠りから醒めかけ、其結果從



來の鎖國主義なる幕府を倒し、王政を復古し、海内一致して、世界の列國と駢馳せんとの、雄圖を抱くものも出づる様になつたのである。勿論當初は、其聲も力も、極めて微弱で、殆んど表面に現はれざる様であつたが、其萌芽は確かに間接の遠因となり、同時に兼て徳川幕府に嫌焉たらざりし、勤王志士の奮起と一致し、遂に王政一新の大業を擧ぐることとなつたが、前にも申し述べし如く、久しい間世界の大勢に遅れ居つた爲め、當時外交當局に當りし者も、自然外交的能力に乏しく、剩え勤王派と佐幕派との接衝より、意外なる攘夷論紛起し、一時極端に外國人排斥の反動高まり、其結果頗る外國人の反感を激成し、爲めに不利なる條約を締結し、慮外の國辱を招きしより、維新の事業は、内には極力國政の整理振興に、精進すべき必要あるにも拘はらず、治外法權を撤廢し、列國對等の條約を改訂せんことは、急務中の急務と云ふので、政府當局の苦心は、専ら茲に集注することとなつて、肝腎なる内政の改善は、兎角後廻しとなるの始末であつた。一例を舉

ぐれば、條約改正を遂ぐるには、是非とも外國人の歡心を求むるのが、第一要件と心得て、一圖に法典の改正を急ぎ、甚しきは風俗交際にまで、極端に歐米風を摸倣し、其極衣食住を歐米人と與にすべし、英語を用ゐよ、歐米人と盛んに結婚すべしと云ふ如く、所謂鹿鳴館時代を現出し、別して大官紳商連の假裝舞踏は、日を夜に繼ぎて盛んに演出すると云ふ有様は、心ある時人をして、眉を蹙ましめたのである。故に維新の初めに當つて、二三の有識者は、神武天皇の創業と意氣とを以て、遂行すべしと壯語せし主張も、全く口實に止まつて、眞に祖國肇造の大精神に、目覺めたる次第でなかつた爲めに、祖國固有の大精神は、全然地を拂つたと云ふも、過言でなかつたのである。加ふるに一面には、佛蘭西の革命思想家と稱へられる、「ルツソー」の思想浸入し、極端なる自由説を以て、政治の方針となさんとし、同時に自由黨の如き、政黨勃興し、頻りに自由主義を煽動し、其他漫りに歐米思想を鼓吹し、隨喜し、祖國固有の道義は、毫も顧みざる有様であ



つた。然し物窮れば通ずるとの譬の如く、極端なる外國思想に反抗して、國粹保存の必要を唱ふるものも起つたが、然し此等の國粹保存説も、實を言へば深く祖國の眞精神に、徹底せしものにあらずして、所謂反動的に極端なる舊慣説に捉はるるの嫌ひなきにしもあらずであつた。勿論國粹保存説と相對して、穩健なる道德説を唱道し、鼓吹するものもあつたのである。國粹保存説の主唱者は、谷干城の一派であり、稍穩健なる道德説の主唱者は、西村茂樹の一派であつたのである。

當時教育制度に付て回顧すれば、最初は亞米利加に倣ひ、次で英吉利を學び、更に佛蘭西・獨逸を眞似ると云ふ傾向で、一時は教育令の改廢は、眞に朝夕を待たざるが如き感じがあつたのである。試みに當時に於ける教育制度の狀況を回想するに、明治五年に發布せられたる學制は、畏くも叡聖文武なる、明治天皇の聖慮に由りし爲めに、眞に偉大なるものであつたが、之を執行すべき責任を有する、文部當局の頭腦には、祖國の國民教育に對し、全然確乎たる定見がなかつたので

ある。謂はば單に從來の藩學や、寺小屋を打破して、全く新たに西洋流の中學校、小學校等を作る考であつたので、偉大なる學制の眞意を、徹底的に表現せしむるなど、及びも付かぬ事である。試みに一例を挙げれば、當時の大木文部卿が、米國より招聘せし教師に、師範學校の教授を囑託する際に、其の教師に訓令して「本國なる米國に於てせる通りに教授し少しも日本の事情を斟酌して教ふるに及ばず」となせしが如き、無鐵砲の考を以て、當時の學制を執行したのである。當時一般の國民も、總て舊弊打破・新奇妄信と云ふ調子であつたから、此の如き文部省の方針を、何とも思はぬのであつた。隨て文部當局のなす仕事は、一切無定見無方針であつたのである。加ふるに前にも云ふ如く、『ルッソー』の自由主義浸入せし爲め、一般の傾向は干涉主義を非とし、自由放任主義を是とする狀況であつた。爲めに、明治十一年には、彼の井然たる大規模の學制を改正して、簡單なる四十七箇條の教育令となし、從來の干涉主義に比して、大に放任主義を取ること



となつたのである。此教育令は實に放任主義の學制であつた。何となれば、大切な國民教育の經費を、専ら授業料と寄附金を以て、支辨せしめたる一例丈でも了解さるのである。此制度は國民をして、極端なる考を抱かしめ、政府は國民教育を以て、全く國民の自由に放任するものと、唱ふるに至らしめ、折角勃興せんとせし國民教育も、漸次整頓し掛けた施設組織も、忽ち頹廢せんとする徴候を見ることとなつた。茲に於て流石に輕卒なる文部當局も、狼狽の餘り翌十二年、更に教育令を改正し、普通教育に關しては、再び干渉主義を採ることとなつた。此改正の旨趣を、國民に普及徹底せしめん爲め、文部省は局長書記官を全國に派遣し、改正教育令の旨趣宣傳に勤めたことは、今尙耳目に新たなる感がある。(故島田三郎の如きも當時文部省權大書記官として、各府縣に出張し、例の雄辯を振はれたことは、私なども當時親しく其講説を聽聞せしものである)其後國家の財政困難と、國民經濟の疲弊甚しきを以て、明治十八年再び教育令を改正し

た。是れ實に維新以後、教育の一時衰頹せし唯一の時期であつた。然し幸ひに此時期は餘り長く續かずして、明治十九年には、有名なる森文部大臣の英斷に由て、教育制度の大改正を見ることとなつて、漸く本邦教育制度の基礎が確立せし感が生じたのである。

然し以上の事實は、單に制度丈で、大切な國民教育の、根本精神とも云ふべき徳教問題は、依然として五里霧中であつたのである。或者は儒教主義を獎勵し、或者は西洋の倫理を可とする等、區々紛々で、隨て文部省も依然として、無主義無方針との非難を免れぬ有様であつた。畢竟一般の國民は勿論、政府當局に至るまで、王政復古に對する徹底的確信と準備と、批判力とに缺陷ありし爲め、換言せば祖國固有文化の眞髓價值を、認識し居らざりしを以て、俄に歐米諸國の事物に接觸するや、物珍らしき物質文明に眩惑し、一切無批判的に模倣し崇拜せし結果である。



此時に當つて叡聖文武なる明治天皇は、軫憂の餘り明治二十三年十月三十日を以て畏くも教育に關する聖勅を渙發せられたのであるから、眞に心ある國民は、擧げて陛下の大御心に、感佩措く能はざりし、次第であつた。而して明治天皇の、特に國民教育に軫念厚かりしことは、明治維新の際に、五箇條の御誓文を發布せられたる事に根源し、即ち「智識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」と宣はせられしを始めとし、次で明治五年を以て、學制を頒布せられ、其の御主意書中に「自今以後一般の人民必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめんことを期す」と仰出されたる一事を以ても、聖帝の學問道德に對する、軫念厚かりしを拜察し得るのである。次で明治十四年六月、全國の小中學校に、幼學綱要頒賜の勅諭には「彝倫道德は教育の主本」たるの本旨を宣明あらせられ、同十五年一月四日に、軍人に賜はりたる勅諭には、丁寧懇切に軍人の本分を宣明せられ、五箇の心得を明示せられしは、深く時弊を戒め給ひし、大御心なるを恐察し得るのである。

畢竟するに明治天皇の大御心は、時代を超越し、國民を愛撫するの餘り、茲に祖國教育の大本と、道德の基調とを宣示あらせられしもの故に、教育に關する勅語は、勿論國民教育の大精神を宣明あらせられしと同時に、之を下し賜ひし明治天皇の大御心の有難さを、感佩すべきである。

更に近年に於ける、歐米先進國を通じて、世界的に流るる教化的傾向は、宗教と教育との分離問題である。而して佛蘭西と獨逸とは、最近漸く劃然と、宗教と教育とを分離せしめたるも、世界の最優秀國と併せ稱せらるる、英吉利と亞米利加合衆國とは、未だに其目的を達するに至らずして、頗る政府並に識者の頭腦を悩ましめて居るものなりと聞く。此兩國は一切に於て、世界の二大明星の如く、他の群星を耀かし倒すの勢を有するものなるに、今尙此教化的大事業の成功せざるに、我等の明治天皇は四十年前に於て、難なく成文的に教育と宗教とを、劃然判別せしめたるのみならず、勅語に於て此淵源は、我が皇祖皇宗を始め奉り、天



津神が遠く肇國の始めに於て、確立あらしめたる次第を、宣明し給ひしことは、其叡智と洪謨とに、感佩措く能はざると同時に、我等國民の誇りとすべき、一大盛典なりと、仰ぐべき次第である。

私は今教育勅語を拜讀するに、其御主旨は、全然祖國肇造の大精神を、宣明あらせられたる次第と思索し、隨て其の御旨趣は、眞に國民道德の本源たるを、體認する次第である。今日は長くも此の聖勅下賜四十年の吉辰を迎へしことなれば、私は其歡喜と感謝とを表明せん爲め、僭越ながら聖勅の一節を講述すべき、義務を信ずるものである。

『我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ茲ニ存ス』

宏遠なる肇國と、深厚なる樹徳とは、的確なる國史の證明する所で、一點疑を

挾むの餘地はないのである。即ち皇祖の皇孫瓊瓊杵尊に賜はりたる三大神勅

一、豊葦原ノ千五百秋ノ瑞穂國ハ是レ吾子孫ノ王タルベキ地ナリ爾皇孫宜シク就テ治シ召スヘシ寶祚ノ隆ナルコト當サニ天壤ト與ニ窮リナカルヘシ

(世に天壤無窮の神勅と稱す)

二、宜シク吾高天原ニ聞コシ召ス齋庭ノ稻穂ヲ以テ爾當サニ吾皇孫ニ聞コシ召スヘシ

(世に大饗の神勅と種す)

三、吾皇孫此ノ寶鏡ヲ視ルコト當サニ吾ヲ視ルコトクセヨ與ニ床ヲ同ウシ殿ヲ共ニシテ以テ齋キノ鏡トナスヘシ

(世に齋鏡の神勅と稱す)

と同時に高皇產靈神の神勅

吾ハ則チ天津神籬及ヒ天津磐境ヲ起シ樹テテ當サニ皇孫ノ爲メニ齋ツキ奉ラ



ン汝天兒屋根命・天太玉命モ宜シク天津神籬ヲ持シ葦原中國ニ降リ我カ皇孫  
ノ爲メニ齋キ奉ルヘシ  
(世に神籬の神勅と稱す)

がそれである。天壤無窮の神勅は、祖國の主權と其の統治の眞精神を宣明し給ひ、  
大饗の神勅は國民生活の安定、即ち財政經濟の本義を、宣明し給ひ、齋鏡の神勅  
は、教化即ち徳教の大軌範を宣明し給ひしもので、換言すれば、三種の神器の御  
宣明とも申上ぐべき、御神勅と恐察致すのである。次に高皇産靈神の神勅は、皇  
祖の三大神勅の御旨趣を、一言に概括したる神勅で、謂はば具體的御説明と、恐  
察致すものである。即ち皇祖皇宗並に天津神と、皇孫以下億兆臣民の子孫とを、  
永久に『まこと』を以て連結せしむる御教は『まつり』の意義を以て盡すと云ふ  
ことである。『まつり』とは『まこと』の『つらなり』(連結)である。皇祖の『あ  
まてらすすめらまこと』と億兆臣民の『まこと』と連結して、茲に切つても切る  
ことの出來ざる、道德的連結をなすのが『まつり』で、之れが祖國國體の精神で

あり、實相である。(私の心の師として尊敬する故西川須賀雄大人は『まつり』の  
意味を『まつはり』(待張り)『まじはり』(交り)の外に『まつらなり』(眞連合)で  
『ま』は『み』に通じ、『靈』『身』であり『つり』は『釣り』に通じ、『つらなり』  
であるから『靈』と『身』と連る意味なりと述べて居る。又曰く『まつり』を約  
めて言へば『まち』である。『まち』は眞血で正統の祭りの意味である。總じて  
『ち』と云ふ聲は人生養育の意味を表する言葉で『血』『乳』である。『ちち』(父)  
と重ぬるは子を養育する徳を稱へたる所から出づるのである。更に『みち』(道)  
とは神明の域に通達すべき道路の意味で人を養ふ究竟方法であると言つて居られ  
た)。再言せば、皇祖皇宗並に天津神は、皇孫萬民を愛撫し給ひ、永久に福祉を保  
持し給ふ故に、子孫臣民も當然之れに報ひ奉るべき、感謝の念を生ずると同時に、  
國民各自は、皇祖皇宗並に天津神の子孫なるを自覺し、茲に自己尊重の信念を體  
得し、祖先と同様に價值を創造して、其の恩恵を擴充し、以て後世子孫に慶澤を





傳ふることが『まつり』の本旨であり、實相で、取りも直さず、國民の生命である。而して萬民は所謂億兆心を一にして、皇祖の延長とも生命とも申し奉るべき『すめらみこと』即ち一君たる天皇に對し奉り、國家の元首として、臣民たるの本分義務を盡すと同時に、一面萬民の大御祖として、永久に孝養し奉るのが『克ク忠ニ克ク孝ニ』の次第である。明治天皇の御詠に畏くも

罪あらはわれをとかめよ天津神たみはわか身の生みし子なれば

とありて、我等臣民を赤子と思召されて居る。嘗て内親王のお世話役を承りし、故佐佐木高行侯に『朕ニハ六千萬ノ赤子ガアル』と宣はれし由傳へ聞く所である。此大御心に對しては、國民たるもの番に君主として忠を盡すに止まらず、萬民の大御祖として孝を致すべきが當然である。之れが祖國に於ける忠孝一本の信念である。故に忠とは義に於ける君臣の關係より、臣民として君主に奉ずる本務であり、孝とは情と愛とに於ける父子の關係より、大御祖として養ひ奉るの本務である。

(孟子が『孝子之至。莫大乎尊親。尊親之至。莫大乎以天下養』とは舜の孝徳を稱へたる語なるも此語は移して以て我等國民が億兆心を一にして大御祖に對する孝養の眞意義を表稱するに適切なるものである。更に平たく申せば茲に謂ふ所の忠とは天皇と國家とに國民として盡すべき本務であり孝とは大御祖言ひ換ふれば天皇並に歴世の天皇に赤子として盡すべき本務である) 即ち億兆一心となつて、主權者と仰ぎ、又大御祖と敬ひ、以て忠孝を致すことが、億兆萬民の心を一にする『まこと』の『つらなり』である。之れが宏遠なる肇國の精神であり、深厚なる樹徳の餘澤である。所謂忠孝一本・祭政一致である。此の精神が、國體の精華となり、之れが世界列國に比類なき國家を表現するのである。

此の如く勅語の首章は、我が國體の特色と、精華とを宣明あらせられし次第で、最も大切な要點と、拜察するのである。是に付更に思ひ出す事は、今上天皇陛下の御即位に際し、下し賜はりし勅語の一章である。



『皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率ヒテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君臣體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキナリ』

と仰出されたる御旨趣は、教育勅語の首章と、同工異曲と恐察せらる。『國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ』と仰せらるる、今上天皇陛下に對し、我等億兆臣民は、君主と敬ひ奉ると同時に、大御祖と仰ぎ奉る故に、君主に對しては、臣民として忠敬を盡し、大和民族たる一大家族の大御祖としては、赤子として孝養を致すのが、一君萬民たる自然の關係で、取りも直さず純真なる『まことのつらなり』である。此の信念が、國民道德の基調で、之を以て父母に孝を盡し、兄弟に友を致し、夫婦の和となり、朋友の信となり、其他社會國家進んでは世界全人類に對する、一切道德の根元を爲すのである。(故副島種臣伯も、嘗て私に支那の忠孝は對立するものなるも、祖國に於ける根本の忠孝は、二にして一なり、一

にして二なり、故に之を大忠大孝とも稱する。即ち天皇を君主と仰ぐときに、忠敬を致し、大御祖と尊ぶときに、孝懿を致す。故に忠孝は一致なり。教育勅語の首章に、億兆心を一にするの、克忠克孝は、即ち是であると思ふ。此心を以て祖國に盡せば、亦忠と云ふべく、此心を以て同民族の宗家に盡せば、亦孝と言ふべく、此の忠孝は一本である。隨て此の心を以て、各自の親に事へば孝となり、各自の家に盡せば、又孝となるも、此の場合に於ける孝と、大御祖に對する孝とは、質に於ては同じきも、量に於ては對立するものにあらず。故に祖國道德の基本は、大忠大孝なる、歸一の信念であると言はれた。故に此點に、眞の理解がなければ、勅語の教旨を、充分に認識し、體得すること能はざると同時に、國民道德の基調に、徹底すること不可能である。

更に感激に堪えざる事は、此の聖勅は我が皇祖皇宗の遺訓にして、一天萬乘の天皇に在ませられても、御身親ら萬民と共に、拳々服膺あらせらるるとの御事



で、之れが天皇として皇祖皇宗を、始め天津神に對する、大忠大孝で在ませらるること、恐察さるる次第である。言葉を換へて申上ぐれば、天皇としての絶對的價値は、究竟する所は、皇祖皇宗、並に天津神に對する、至純至高の大忠大孝の信念に、外ならざること、恐察せらるる次第と存ずる。

私は明治天皇の偉大なる神君で、在らせらるる事を恐察するとき、全く以上に述べたる、大御心の表現と信ずるものである。即ち明治天皇は、御身親ら忠孝一本の大信念を以て、國民に模範を垂示し給へることを、恐察する次第である。果して然りとせば、今回教育勅語下賜四十年を迎ふるの喜びを發表せん爲め、成るべく記念事業を仰山に築き上げて、花々しくお祭騒ぎをなすを、美事の如く主張する者もあるが、私は此の勅語を下し賜ひし、明治天皇の大御心を恐察し奉るとき、何處迄も此の御教に従ひ、國民信念の基調たる、『まこと』の「つらなり」、即ち億兆心を一にすべき、忠孝の信念を眞に體得し、味覺する事が、最も意義あ

る奉仕と信ずる次第である。換言すれば、教育勅語それ自體が、我等全國民に與へられたる、一大精神塔なれば、我等國民は、各自の胸中に高く此の精神塔を掲ぐる事が、唯一の記念事業と信ずるものである。

終りに臨んで、私は蛇足として、一言を加へんと欲するものがある。それは明治天皇が、教育勅語を下賜あらせられるに付ては、夙に大御心を垂れ給ひ、夙に德行高さ、幾多の直臣に、御諮詢在らせられしやに、拜聞し居るもので、最初に於て親しく意見を徵せられしは、副島侍講（即ち副島伯爵にして永く樞密顧問官となり明治三十八年一月薨去せり）なりと仄聞す。次で佐々木高行伯（後の侯爵）にも、御諮詢在らせられしやに拜聞す。愈々具體案を調査せらるるに及びては、井上毅子（文部大臣となり國史國語教育の改善を圖り専ら實業教育の施設に銳意計畫せられたるもの）並に元田侍講（即ち元田永孚男にして幼學綱要の著者である、元田侍講は勅語發布の翌年即ち明治二十四年一月卒去）の兩士に、御信任在



らせられしやに仄聞するものである。(世人は或は起草者は井上毅子なりと云ひ元田永孚男なりと云ふも這般の消息より宣傳するものと推察致さる次第と思ふ) 其他には中村正直博士にも、意見を徴せられ、時の山縣内閣總理大臣にも、御下問あらせられしやに傳承し居るものなるが、専ら帷幄に於て、御諮詢に與りしは、元田永孚男と、井上毅子と、間接に副島種臣伯の三士の如く、承知致し居るものである。明治天皇が、千古不磨の教典として、發布せられし教育勅語の蔭には、此の如く九州出身の偉人傑士の、内助の功が、あつたことは、嘗に三士の光榮なるのみならず、九州人全體の等しく、誇りとすべき次第と信ずるものである。然し、以上三士の功績は、殆んど歴史的事實となつて、一般の有識者は略ぼ同様に承知の事なるも、茲に世人否九州人と雖も、殆んど夢にも思ひ及ばざる美跡は、隠れたる一大人格者にして、夙に私かに教育勅語の渙發を念願し、而も衆に率先して、親しく此の希望を、明治天皇に上言せし、一大偉人の存在することである。

それは佐賀縣出身の西川須賀雄と稱する、隠れたる篤學者である。氏は佐賀縣小城郡岩松村縣社(當時は村社)須賀神社の神官にして、官幣大社たる羽黒神社、竝に安房神社の宮司を務められた人である。氏は至て謙遜なる人格者で、毫も名聞を求めざりし隠君子にして、而も副島種臣伯とは竹馬の親友であり、同時に伯より信敬せられしものである。氏は明治十五六年頃より、當時の世相を達觀し、徳教の根底を確立せんには、是非とも祖國々體に基ける、勅諭の渙發を必要と認め、而も明治十七年八月、副島種臣伯の斡旋に由り、一大獻白書を明治天皇に上り、明治二十三年の國會開會に先だち、畏くも教育に關する勅諭を下賜せられんことを、切言せしものである。此事は後に私の親しく副島伯より内聞せしもので、現に私は其の上言の原稿をも、内覽致せしものである。教育勅語は、勿論明治天皇の大御心に出でしものにして、西川須賀雄大人の上言の内容は、概して別の意義を縷述せしものなるも、而も當時の徳教を振興せんには、祖國國體精神に立脚せ



る、徳教に關する聖勅の渙發に待たざれば、到底匡濟の實を擧ぐることに、不可能なりとの赤心と、而も此の聖勅は、是非とも明治二十三年の國會開設に先だちて、渙發あらせられんことを、切望せし卓見とは、眞に當時の狀勢に適切なるものと、謂ふべき次第である。私は私かに案ずる所に由ると、明治二十年以後の世相に及んでは、眞の先憂後樂の士中には、他にも西川須賀雄大人の如き、同憂の士ありて、私かに明治天皇に上言せし士も、在りしもの如く察せらるゝも、明治十七年八月に於て、夙に如上の上言をなせし先憂の士は、恐らく西川須賀雄大人を以て、先鞭を着けしものと推察する次第である。隨て西川大人は、眞に一日千秋の思を以て、渙發の日の早からんことを、心の内に秘め居られしものにや、愈々明治二十三年十月三十日を以て、勅語渙發の報に接したる時は、全く手の舞ひ足の踏むをも、覺えざりしとの事を、聞き及んで居るが、眞に左もありしことと信ずる次第である。私は今日の佳辰に遭遇し、而も本市開催の記念講演會に於

て、私が平素心の師として、敬愛措く能はざる、西川須賀雄大人の隠れたる卓見と、希望とを公表するの光榮を感謝すると同時に、九州人全體の光榮をも、感ずる次第である。故に九州人特に九州の全教育者は、此等先輩に酬ゆる上からも、教育勅語の精神塔を、一層各自の心境に高く掲揚し、同時に將來の國民たるべき、現下の兒童生徒並に青年處女の心境中にも、此の記念的精神塔を、高く掲げしむる様、奮勵あらんことを衷心より切望して止まざる次第である。而して其の精神塔を、各自の心境に高く掲ぐる方法は、如何にすべきかと云ふに、先づ第一に前に述べたる、皇祖の三大神勅、並に高皇產靈神の神勅を衷心より禮拜し、以て宏遠なる肇國の精神と、深厚なる樹徳の根底とを、體得するに在りと信ずるものである。以上が教育勅語下賜四十年記念の吉辰に臨みて、私の痛切なる感激の一齣である。



## 教育勅語下賜四十年を祝するに際し中華民國に於ける教育史の回顧

諸君、我等は茲に長くも明治天皇の教育に關する聖勅渙發四十年の吉辰を迎ふるに際し、祖國に於ける教化原理の確立を祝福し奉ることは、無上の幸榮を感ずると同時に、一面從來隣好厚き中華民國の光輝ある教育史を回顧するときは、眞に無限の感慨に堪えざるものがある。元來我等が祖國の教化は、肇國の始めより天壤無窮の大生命に根由せる皇道に基調を置くを以て、如何なる時世に逢着するも牢乎として卓立し、其淵源は混々として盡きざる爲めに、絶へて他邦異文化の侵蝕と脅威とを受けざりしも、而も肇國固有の大精神を向上發展せしむる爲め、其肥料とし糧食として、自然他邦文化の精粹を攝取し同化し、以て彌榮の本質を培養せしことも的確なる事實である。中にも夙に接觸せる支那文化の影響は、特

に祖國固有の文化を助長發揚せしめし上に、多大の効果ありしは、歴史上著明の事實である。支那の文化に次で接觸せし印度の文化、即ち佛教の感化も亦頗る我固有文化の肥料となり、其向上發展に多大の効果ありしも疑ひなき事實である。然し此二大外來文化の中、何れが多く祖國固有文化の進展に裨補せしかと言へば、余は勿論支那の文化を以て顯著なりと認むるものである。故に我等は支那文化の恩澤に、浴せしことを衷心より感謝し居る次第である。然るに現在祖國の教化事實に直面し、畏くも聖勅の御旨趣を奉體すると同時に、顧みて中華民國の教育現狀を望見するときは、轉た同情に堪えざるものがある。彼の民國の祖先が夙に世界無比の大文化を創造し、而も世界文化未發の際に於て、夙に燦然たる曙光を放ちたる其先進國が、光輝ある數千年の史蹟を忘れ、現代的なる三民主義に立脚せる教化を以て、現國民を指導せんとする實狀を想見するときは、我等は眞に他人行儀を以て默過するに堪え難き感がある。千有餘年の久しき、我等祖國文化の向



上發展に、多大の感化と影響とを享け、或時は殆んど我等の指導者たりしが如き  
觀ありし程なるに、而も其恩義國であり、先進國である現代の中華民國が、教化  
の方面に於ては（政治、經濟、其他社會的方面に於ける政策施設は別として）眞  
に氣の毒に感ずる次第である。我等は教育社會に於ける境遇と情誼とより、如何  
にも雲烟過眼に附することが出来ぬものである。故に我等は、今後單に我等祖國  
教化の向上發展に向つて、銳意努力するのみならず、兼て自ら勵み自ら圖りつゝ、  
先進國であり、恩義國である中華民國に對し、是非とも自覺徹底・啓明復興の機  
運を喚起せしむる底の、同情と誘導とを思念すべき義務ありと信ずるものである。  
之れに就けても思ひ出すは、故井上梧陰大人の卓見である。故大人は祖國の  
爲にも、東洋否世界の平和の爲めにも、終始一貫して隣邦民國を誘掖開發し、  
夙に強國の實を挙げしめんと、信念と厚意とを抱有し、日清開戦の直前ま  
で、虛心坦懐屢々民國の治勢を切論し、一日も早く同國の知識階級者を覺醒

せしむることを期待せしは、『梧陰存稿』の記事中に歴々指摘し得る事實であ  
る。

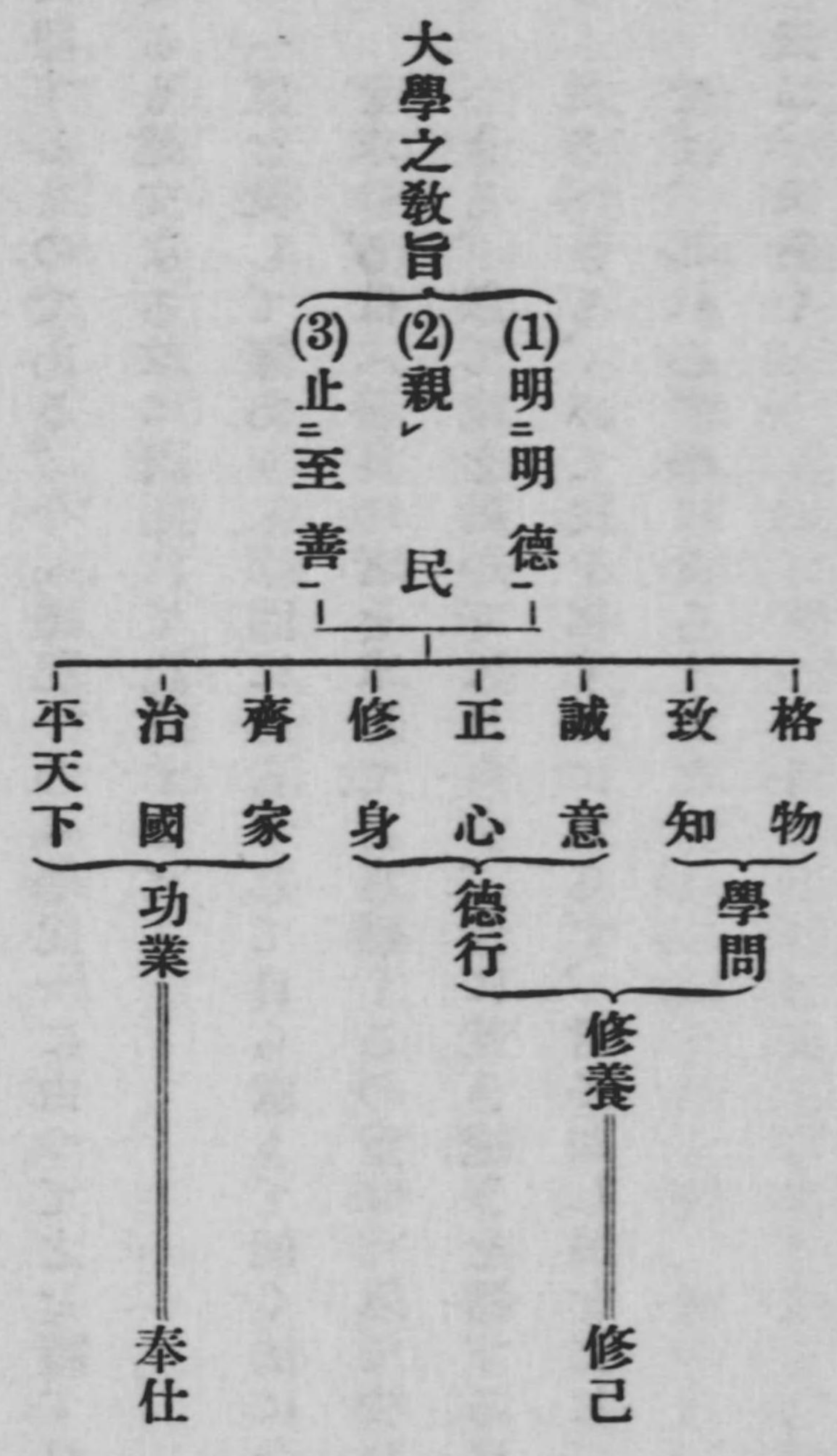
斯くありてこそ教化が世界の平和・人類の福祉を増進し得るものとなり、而も  
這般の氣魄を有する國民ならでは、眞個に世界の文化に寄與貢獻し得ること、不  
可能と認むる次第である。果して然らば、我等は今日唯輕々しく、教育勅語下賜  
四十年の幸榮に安んずるのみならず、更に一層明治天皇の高遠なる大御心に感佩  
し奉ると與に、此光輝ある國民教化の全精神を發揮して、以て隣邦中華民國人の  
自覺を促し、光輝ある同國教化の復興を實現せしむべく、努むることが大國民の  
好意であり、襟度であると思ふのである。これ余が今回の吉辰に際し、祝意を表  
すると同時に、中華民國教育史の回顧を試み、聊かこれに對して、所見の一端を  
披瀝せんとする微衷である。然るに此光輝あり浩瀚なる支那教育史を、僅少の時  
間に講述せんことは、至難中の至難事に屬するを以て、自然不徹底に終るかを



患ふる次第である。其邊は豫め海恕を乞ふて息まざるところである。

諸君の御承知の如く、支那の文化史は眞に燦然たる光彩を放つて居る。隨て其文化史中の果實であり、根幹である教育史も、當然偉大なる史實である。而して支那教育史の正系をなすものは、勿論儒教である。儒教に於て創造者の一人であり、而も唯一の祖述者は、言ふまでもなく孔子である。故に支那教育史の講述には、是非とも孔子の教育史實に出發すべきである。孔子の教育觀は大體『論語』を以て悉して居る。而して其約結せる要義は『大學』に於て認むるを便宜とする。勿論『大學』は孔子自身の著述でなく、其門人並に後世孔子の教義を繼唱せる學者の著述に屬するが如く傳ふるも、其要領は充分に窺ひ知ることが出来る。而して又『大學』は最初『禮記』の一篇として載録せられしを、後世唐の韓愈が別に編述せしもので、(一説に大學を禮記より抜きて、單行せしは司馬光の『大學廣義』を嚆矢となすものもある)後朱子が『禮記』中の『中庸』と、之れに『論語・孟

子』と併せ、四書として發行せしものと傳へ居ることは、世間周知の事實である。今『大學』に由つて、孔子の教育觀を見るに、左の通りである。



即ち明德を明かにすること、民を新たにすること、至善に止まることが教化の三綱領で、此三綱領を表顯せる格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下が所



謂八要目である。

之に由つて見るも、支那が夙に教學を以て治國の要と認めしは、眞に先見の明に服するものである。今「禮記」の「學記」に由つて之を證すれば（原文は漢文なるも難文なる故に國語にて説述する）

「慮を發して慮あり（學問に由らずして自ら慮りて能く法に合する意味）善良を求むるは（善良の者を求めて自ら輔くるの意味）以て少しく聞ゆるに足るべきも、以て衆を動かすに足らず、賢に就き遠きを體するは、衆を動かすに足るべきも、以て民を化するに足らず、君子如し民を化し、俗を成さんと欲せば、其れ必ず學に由らんかな」

と云ひ、又曰く

「玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず、是故に古の王者、國を建て民に君たるには、教學を先となせり」

と云ひ、又曰く

「嘉肴ありと雖も、食はざれば其旨きを知らず、至道ありと雖も、學ばざれば其善を知らず。是故に學びて然して後に足らざるを知り、教へて然して後に困むを知る（學べば即ち己れが行ひの短き所を視、教ゆれば即ち己れが道の未だ達せざる所を見るの意味）足らざるを知りて然して後に能く自ら反し、困むを知りて然して後に能く自ら強む。故に曰く教學は相長ずと、免命（書經の説命を云ふ）に曰く「教ふるは學ぶの半ば」と其れ此れ之れを謂ふか」と云つて居る。以上の意味は「論語」の

「學而不<sub>レ</sub>思則罔。思而不<sub>レ</sub>學則殆。」

「君子博學<sub>ニ</sub>於文。約<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>禮。」

と同意義で、教學は學習と研究と、併行聯進を必要とするもので、孔子の教育觀が、知と行と兩立併行して、一方に偏せざるを高調せし次第である。即ち「大學」



の格物・致知（學問）と、誠意・正心・修身（德行）との一致を期する所以である。更に『禮記』の學記に

『善く問ひを待つ者は鐘を撞くが如し、之を叩くに小なる者を以てせば則ち小く鳴り、之を叩くに大なる者を以てせば則ち大に鳴る。此れ學に進むの道なり』

と云つて居る。之に由つて考ふれば學問の要は何處迄も自發的研究的なるべき理由が分る。夫の單に訓詁を以て能事了れりとするが如きは、眞に腐儒の言たるを知るのである。

又『禮記』の『學記』に

『記問の學は以て人の師となるに足らず、必ずや夫れ語るを聽かんかな。力め問ふこと能はずして然して後に之を語る。之れに語げて而して知らざれば之れを舍くと雖も可なり』

と云つて居る。又曰く

『良冶の子は必ず裘（鞣の類）を爲るを學び、良弓の子は必ず箕（楊柳を曲げて作るもの）を爲るを學ぶ』

と、以上は孔子が『論語』に於て

『不憤不啓。不悱不發。舉一隅不以三隅反則不復也』

『不曰如之何、如之何者。吾未如之何也已矣』

と同意味で、學問は何處迄も自發的努力に由つて研究するにあらざれば効果なしとの謂れである。此呼吸は自然孔子が『學問は叙述に始まり創造に終る』との抱負を窺ひ知ることが出来る。然るに世の腐儒が孔子の

『述而不作。信而好古』

と謙讓せる一事を速断して、孔子が體驗的に創造せし大文化（例へば易の十翼の如きもの）を知察するの明なきは憫むべき極みである。畢竟するに、孔子の教義



は、知識と實行との合致にありて、彼れが知ると云ふことは、悉く實行することなる次第が分るのである。即ち『論語』の

「朝聞道夕死可矣」

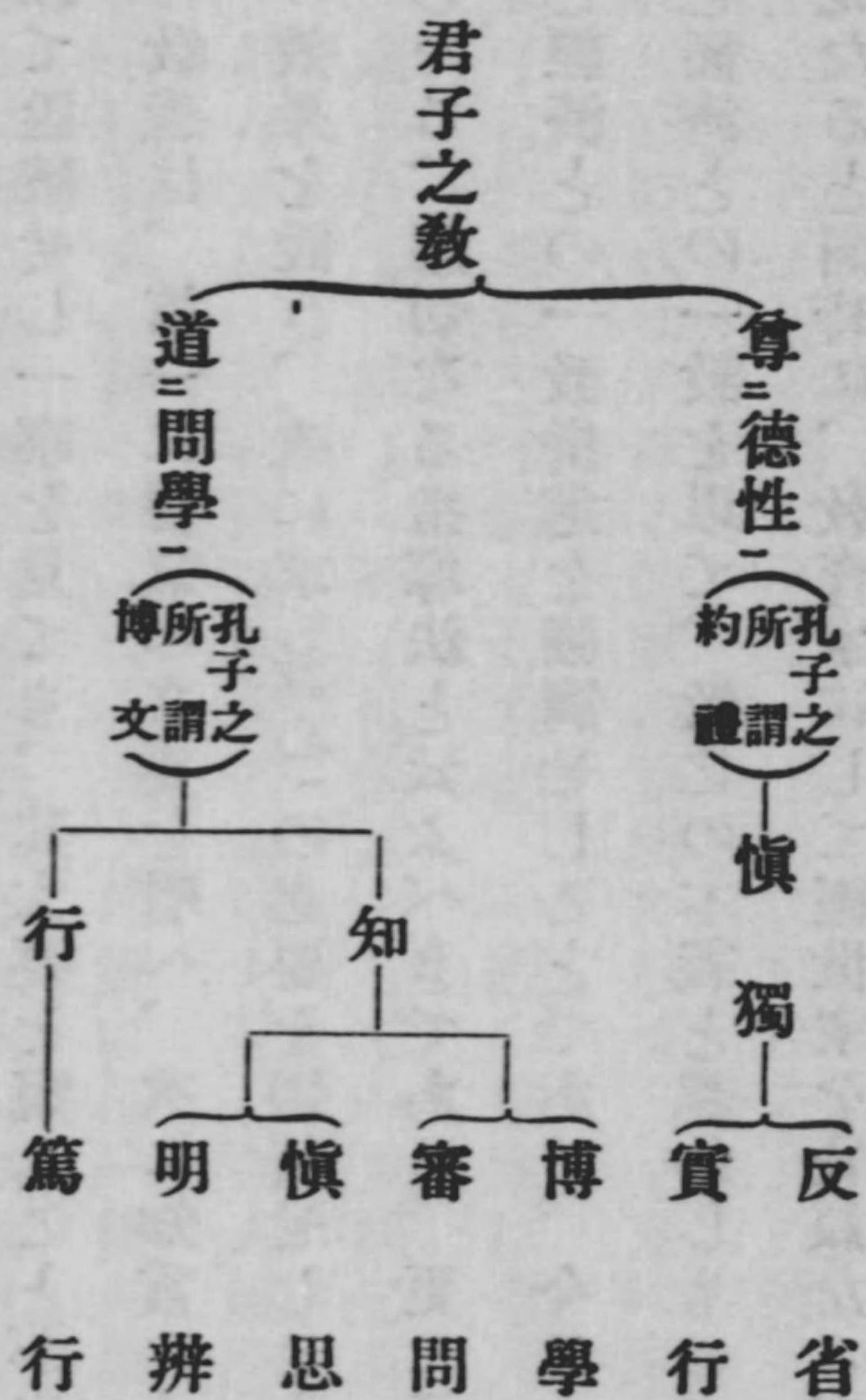
と言へるも、朝に道を聞けば、直ちに實行するから（即ち一日實行する故に）夕に死すとも、悔ゆることなしとの意味を、物語つて居る。

又『論語』の

「子曰。由、知、徳者鮮矣。」

と云へるも徳を行ふものなきは、則ち徳を知らざる者なきとの謂れである。既に知るからには必ず實行せざるを得ざるものなりとの、孔子自身の抱負と體驗とを立證して餘りあるのである。

孔子の教育主義を紹述し、而も之れを哲學的に説明せし者は、孔子の孫子思である。子思の教育觀を簡明に説述すれば、左の通りである



子思の教育觀は『中庸』に悉して居る。中庸の教とは、學理に偏せず、實行に傾かず、兩者の調和均齊して渾然融合するにあるので、取りも直さず『問學に道る』と同時に『徳性を尊ぶ』ことが君子の教へであると主張して居ることは、孔子の格物・致知と誠意・正心・修身の併行渾和を祖述せしものである。此點が儒教の本義であるべきに、後世の學者にして儒教を奉ずるもの動もすれば或は徳性の一



方に偏し、或は問學の一面に傾き、其餘弊遂に宋明時代の朋黨破綻を醸成せしは、惜しむべき次第である。

子思に次で儒教の真義を主張せしは、子思の門人と傳へらるゝ孟子である。孟子は孔子の道を傳ふるを唯一の目的とせしも、其主張は専ら時勢に適應し、順化せしむるにあつた。即ち孔子が専ら仁を以て教學の根本義となせしを、孟子は仁義を以て説破せし一事を見ても、其大要を窺ふことが出来る。稍委しく云へば、孟子の教義は、第一に養氣の必要を唱へ、次に知言の大切なるを述べ、次に夜氣存養の効果を説き、次に求放心の必要を切言せしことは、當時の社會的狀勢に善處したる、適切なる指導法と云ふべきである。更に孟子の卓見と認むべきは、道德と經濟との一致併進を強調せしことである。今日の句調で云へば教化と生活、道德と經濟との一致を以て、教化の本義と認めしもので、此點は儒家としての大卓見たると同時に、教育家にして經世家を兼ねたる者と稱すべきである。

以上孔子と子思と孟子とは、上古に於ける支那教育史上の三大明星である。

更に先秦時代に於ける儒家の亞流にして、一方の識見を有せしものは荀子である。荀子は性惡説を主張せし爲め、一般の儒家は兎角荀子を以て、儒家の傍系と視傲す者多きも、素より荀子は儒家として一見識を有するものである。唯普通の儒家と異なるは、三代以來儒家の傳統とせし天人感應説を反駁せし爲めである。則ち荀子は前人の傳へし『天と人との間には一種の默契あり』との傳統説に反對し、明かに此二者の間に何等關係なき理由を切言せしものである。換言せば天に依頼する心を打破して、茲に自覺努力、獨自の識見を建設せんと試みたのである。即ち從來の傳統的盲信的なる態度を排して經驗的事實的なる識見を主張せしは、確かに先人未發の創見と云ふべきである。彼曰く天は自然のみ、吾人の思慮を以て左右し得べからざると同時に、天又人事を左右し得べきものにあらざれば、寧ろ之れに觸れざるを可とすべきである。換言せば天道は勿論一定の法則あるも、



其法則は萬古不易にして、人界の爲めに存するにあらず、超然として人事の外に卓立し、些々たる人間の行事に左右せらるべきものでない。故に吾人は漠然として天の運命を待たんよりは、寧ろ自ら進んで其運命を開拓すべきである。吾人が獨力其運命を作らば、天は如何ともする能はざるものである。吾人は自ら吾人を指導すべきのみ。天上天下唯我獨尊の本義茲にありと云ふのである。

荀子は此見地より、自家の學説を主張せし故に、彼は確かに一家の獨創がある。就中勸學説の如きは、其著るしきものである。一例を云へば、耳目の學を極端に排斥せしが如きは、其尤も顯著なるものである。彼曰く

「小人之學也。入<sub>二</sub>乎耳<sub>一</sub>出<sub>二</sub>乎口<sub>一</sub>。口耳之間。則四寸耳。曷足<sub>二</sub>以美<sub>一</sub>七尺之軀<sub>一</sub>哉」

と眞に然りて、既に七尺の軀すら美とする能はざるもの、豈國を治め天下を平かにするを得んやである。又彼は迷信を打破するを以て、學問の要義となせしは、

當時に於て破天荒の曉鐘である。即ち彼が人の心を以て、形相を論ずるの無意味なるを説破せしが如き、又當時流行せし災異に對する迷信を打破し、天地の變異は自然なりとの現今の科學説を主張せしは、何れも卓見である。此の如き卓拔の言説を唱道せし爲め、一部の儒家は、却て荀子を以て儒家の異端者と視傲すものありしが、大體に於て儒教の本義を祖述し、特に禮に對する卓絶の意見を有し、禮を以て教化の本義を一貫せしは、確かに儒教の眞髓を道破せしものである。隨て荀子の學説は「禮記」の三年問篇、樂記篇、鄉飲酒義篇、聘義篇等に拔萃登載せられ居るのである。

然るに世人往々孟子の性善説に對し、荀子が性惡説を唱へしを以て、一は純正の儒教を祖述し、一は異端者なりと論ずるものもあるも、詮じ詰むれば孟子の理想も荀子の理想も、與に同一の聖人を目標として居ることが分るのである。惟之れに達する方法として、一方は聖人の教義に従ひ、固有の良知良能を極力發揮し



て、之れに到達すべしと云ひ、一方は禮儀師法を以て、人生固有の情欲を抑制すべしと、勸めたるに外ならぬ次第である。故に荀子の教育觀は、支那教育史上に於て、是非とも攻究すべき價值があるのである。然るに彼の門下に李斯・韓非子の如き學者輩出せし爲め、兎角儒家の異端者を以て目せらるゝは冤とすべきである。

次で前漢時代の教育史に於て注目すべきは、孝文帝・孝武帝・孝元帝三代が儒教の復興に、銳意努力せし事實である。孝文帝の時代に、専ら教化の要衝に當りたるは賈誼で、孝武帝の時は董仲舒を主とし、孝元帝の時は劉向である。此等の教育觀は其の著述に於て窺ふことが出来る。後漢時代に於ける教化の成績は、前漢時代に比し、聊か遜色ありと雖も、教育史上に於ては馬融・鄭玄の二大家は見通すべからざるもので、同時に何れも訓詁學の大宗である。次で三國時代に於ける蜀漢の諸葛亮、曹魏の何晏・王弼、梁の皇侃等の教化的功蹟も、亦頗る顯著なる

ることは、何れも具眼者の認むる所である。

降りて唐代となりて、教育史上に異彩を放つものは、韓愈である。韓愈は實に孟子以後唯一の儒家を以て自任せる程の大宗である。彼の「原道」其他の卓説は、何れも儒道の本義を詳述して餘りあるものである。彼の作賦の「符讀詩於城南賦」は、實に勸學詩として異彩を放ち、蜀漢に於ける、諸葛亮の子を誠む勸學文と、雙璧の觀がある。韓愈が文教上に於ける功績は、枚舉に遑あらざるも、就中「大學」を「禮記」より拔萃して四書の一部となし、以て儒教の祖訓權威たらしめしは、後世の推稱して息まざる所である。

支那教化史の正系は前述ぶる如く儒教を宗となし、此母系より更に幾多の小系を派出せしめしと同時に、別に亦幾多の傍系がある。其主たるものは道教であり、易である。更に兵家の教化に與へたる効果も、看過すべからざるものがある。道教の創唱者は後漢の張道陵と稱して居る。後南北二派に別れ、南宗派は命を先き



にし他力的にして、北宗派は性を先きにし自力的である。而して何れも老子を祖とし神仙説及び俗間信仰等を加味し、且佛教の組織に模して創造せし宗教で、目的は人々皆神仙たらんとするにあること、猶佛教の佛たらんことを冀ひ、儒教の聖人たらんことを學び、基督教の神に近づかんことを祈ると同じ意味で、別に不思議とすべきにあらざるも、唯種々の迷信を交ふる爲め、往々滑稽に感ぜらるゝ節が多いのである。道教では修養を養生と稱し、其目的に達せんが爲め五つの養生法を實行して居る。一は鍊丹服藥で主として天下の名山に立て籠つて仙藥を鍊り之れを服用することである。二は吐納と稱して故氣を吐き新氣を納るゝことで一種の深呼吸法である。三は導引と稱し一種の運動法で現今流行する自彊術・正氣術の如きものである。四は房中術と稱し適當の方法により男女の關係を行へば長生するものと信じ其向きの方法を行ふことである。五は積善法と稱し上天司命の神は人の善惡を察し善あれば壽を増し命を延べ、惡をなせば之れを減縮せしむる

を以て努めて、善行を積むの修養法である。而して道教は最初は専ら上層社會に行はれしが、金元時代に及び漸く一般に流行せしものである。

次に兵家の學説は歸する所軍旅に屬せしが、而も其根本義は道德で専ら仁・義・禮・智・信を唱道せしを以て、隨て風教上に與へたる效果及び影響は多大であつた。中に就ても孫子・吳子の如きは特に顯著なるものである。試みに其一斑を述べれば、孫子曰く「百戰して百勝するは善の善なる者に非るなり戰はずして人の兵を屈するは善の善なる者なり」又曰く「昔の善く戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲し、以て敵の勝つべきを待つ、勝つべからざるは己にあり勝つべきは敵にあり」(自ら城廓を修理して以て敵の虚懈を待つの意味)と。吳子曰く「昔の國家を圖るものは必ず先づ百姓を教へて而して萬民を親しむ」と又曰く「凡そ國を制し軍を治むるには必ず之れに教ふるに禮を以てし、之れを勵ますに義を以てし恥あらしむ。夫れ人恥あるときは大に在つては以て戰ふに足り、小に在つては以て守



るに足れり、然れども戦て勝つは易く守りて勝つは難し。故に曰く天下の戦ひに五たび勝つ者は禍なり、四たび勝つ者は弊なり、三たび勝つ者は覇たり、二たび勝つ者は王たり、一たび勝つ者は帝たり。是を以て數々勝つて天下を得る者は稀にして以て亡ぶ者は衆し」と以上は頗る味ふべき教理である。

易は伏羲八卦を盡し文王之れを演べて六十四卦となし、彖辭・象辭を作り、孔子十翼を作り、其の道漸次完備すと云つて居る。而して易の哲理に付ては、古來幾多の解説をなすものもあるも、孔穎達の「正義」に、易の意義を解説して三項となし、一は易簡の意義とし二は變易の意義とし、三は不易の意義と述べて居る。即ち易簡とは天地の道は自然の理に出で何等煩瑣の理なく、變易とは寒暑の來往・日月の盈昃・陰陽五行の變化等の如く宇宙萬物は何れも此變易を免れざる特質を有するものである。不易とは天地萬物は常に變化して息まざるも、其間に自ら一定不變の原理があるとの謂ひである。此三説の中、特に變易の解を以て、易の本

義と認むる説と、以上三説の渾然融合せる眞理が、取りも直さず天地人三才を一貫する眞理で、之れを易の本義と認むる説とがある。要するに易は繫辭傳に「生々之謂易」又「天地之大徳曰生」と云ふ如く、宇宙間に存在する萬物の、生々進化して息まざる原理を、人事に活用して徳行を奨勵し、更に成敗利鈍を占斷するを目的となす故に、其眞理を説く所は、純正哲學となり、其應事接物の用を説く所は、道德學となり社會學となり政治學となるのである。而して易學は眞に世界獨歩の學理である、泰西の進化論も斯學より出でしと稱ふるものすらあるのである。此易學より更に幾多の學説を出し、或は陰陽五行説となり或は識緯學となり更に清談となり仙術となつたのである。故に傍系的の易學も自然教育史上有要の地歩を占め、而も其哲學は儒教と關聯して後世宋代に於ける性理學を形成せしものである。現に孔子も晩年易學を學び哲理を以て儒教の本旨を宣明せしは著明の事實である。



斯の如く儒教と易哲學との關聯せる教化が、時勢の推移と共に漸次進化し發展し、宋代に及びて遂に兩者の學理的融合を招致し、兼て漢代より漸く接觸せし、印度佛教教義の浸潤と同化と、互に因縁應報して宋代の思想を醗酵し、茲に思想的にも教育的にも、一大革新を見ることとなつたのである。換言すれば先秦時代の儒教は、純然たる道義主義でありしも、漢唐時代に及びては、専ら訓詁主義を唱ふることとなり。更に時代思潮の進化に伴ひ、宋代には新たに性理説起り、儒教を説くにも漢唐時代の訓詁説に依ることなく、専ら性理説を應用することとなつたのである。而して宋時代に於ける性理學の先驅者は有名なる周子（周敦頤）である。即ち周子の學説は、易と老子と五行説とを融合し、之れに儒教と佛教との原理を加味せしもので、純然たる一大哲學を形成せしものである。其概要を述べれば、宇宙の實在は、吾人の五官を超越せる太極で、この太極は萬有の本體で造化の根源である。故に無極と稱して居る。而して無極と云へば無即ち理に傾き、

太極と云へば有即ち物に偏するを以て、周子の説を絶對的方面より見れば、實在即ち本體にして、之を相對的方面より見れば、現象即ち萬有となる。換言すれば太極動きて陽を生じ、動極りて靜となり、靜にして陰を生じ、靜極まりて復動き、一動一靜互に其根を成す。即ち陰を分ち陽を分ちて兩儀立つ、此の如く陰と云ひ陽と云ふ皆太極より發成し來る、故に其間唯理と氣との差あるのみと謂つて居る。周子は此見地より、一家の倫理説を立てたのである。彼の説に従へば、人は太極を縮小したるもので取りも直さず、人の精神的方面は太極の理的方面にして所謂性である。性には仁・義・禮・智・信の五あつて道德的判斷をなすものである。斯の如く吾人は太極の顯現なるを以て、其本性は絶對善である。故に吾人の一舉一動、皆此絶對的善に合致すべきものである。然るに吾人には我慾なるものを生じ、之れが爲め絶對善の儘に行動すること不可能となる。是に於て修養の必要が起り、教化の施設が急務となると謂つて居る。而して周子は此修養法を、積極的



方面と消極的方面の二様に説きしは斯道に志すものの皆知るところである。

周子と並びて張子（張載世に横渠先生と稱す）も亦一家の哲學を主張した。張子は専ら易に本づきて宇宙の本體を太虚となし、太虚は氣の本體にして、其陰陽の二氣を内含的に具有する方面から見て、之れを太和と稱して居る。而して太虚に氣あり、其氣聚つて萬象となると云つて居る。故に之を周子の説に比すれば宇宙の本體を理の方面より見て太虚とし、氣の方面より見て太和となす故に、周子が無極にして太極と云ひしと、少しも異なるものなきも、此理と氣とは決して離るべからざるもの故に、張子の宇宙觀も、純然たる一元論である。張子は此哲學的見地より一家の倫理説を立て、居る。即ち張子は天道を以て無爲となし、無爲なるが故に其徳亦至大なり。是れ吾人の天道に従ふべき次第であると説き、曰く太虚に由つて天の名あり、氣化に由つて道の名あり、靈と氣とを合はせて性の名あり、性と知覺とを合はせて心の名あり。天と云ひ道と云ひ性と云ひ心と云ふも

の皆是れ一の太虚のみ。太虚の性は虚明なるを以て人性も亦虚明を本質と説いて居る。而して張子の倫理説は仁を主とす、仁は誠を以て骨子とす。是れ即ち徳の根元であると説いて居る。

周子の主義を繼承せしは、其門下生なる大程子（程頤世に明道先生と稱す）と小程子（程頤世に伊川先生と稱す）の兄弟である。而して兩者の異なる點は、大程子は宇宙の原理を、専ら人道に融合するを眼目とし、所謂「尊徳性」の主義に傾き、小程子は格物窮理を主眼とし、専ら事物に當つて眞理を窮めんとする者にて、所謂「道問學」の主義を強調せしものである。重ねて云へば明道は性氣を一とし易に所謂乾元の氣を以て本體とせる一元論を主張し、伊川は性即ち理となし、氣を以て性の外に置き、所謂精神的の理と、物質的の氣とを以て、宇宙の二原理なりと主張せしものである。後世明道の學説は、陸王の強調する所となり、伊川の學説は、朱子の大成せし所となりしは、頗る注目すべき點である。而も宋



代哲學者中最も孔子の意を傳へしは明道である。伊川亦格物窮理を努むと雖も、同時に實踐躬行を重んじ、而も意を誠敬に存せしは、以て明道と揆を同ふし、與に宋代哲學者中に其儔を見ざる篤學者である。此二兄弟は眞に萬世に涉りて道の師と稱すべきものである。

以上の二程子を祖述し、更に周子の哲學を繼承し、以て從來の學說を統一大成せしものが、朱子（朱熹）である。故に朱子は、支那に於ける儒學哲學を統一せし大宗にして、之を歐羅巴の哲學者に比すれば、恰も獨逸の『カント』に當るのである。

朱子の哲學並に倫理説は、實に蔚然たるものあるも、本講演に於ては、素より之を縷述するの暇なきを以て、茲には單に其教育觀の大要を述ぶることとする。

朱子の教育説は彼の著述に係る『小學』に悉して居る。『小學』は實に古代支那に於ける唯一の教育學である。而して『小學』の學說を實際に施行せしものが、

有名なる白鹿洞學規である。故に白鹿洞學規を講述すれば、充分朱子の教育觀を窺ふことが出来るのである。

因みに申せば、白鹿洞は江西省星子縣の北廬山五老峰の下に在りと云ふ。此地は唐の李渤が兄の涉と與に、書を読みし處で、當時兩氏は一頭の白鹿を畜ひ常に隨はしめたところから此名が出たのである。後南唐に至り、茲地に學を建て、宋の初め亦書院を置きしも、後之を廢せしが、朱熹南康軍に知たるに及び、復び之を建立し其地に講學し、其後明清兩代皆書院を建て、士を課せしと傳へて居る。

白鹿洞學規は左に掲ぐる通りである。

父子有<sub>レ</sub>親。

君臣有<sub>レ</sub>義。

夫婦有<sub>レ</sub>別。



長幼有<sub>レ</sub>序。

朋友有<sub>レ</sub>信。

右五教之目

五教目とは嘗て堯舜が契を司徒となし敬んで五教を敷かしたる教化の本義で、特に孟子の強調せし所である。孟子の説に従へば親・義・別・序・信は人の本性である。「中庸」に所謂「天命之謂<sub>レ</sub>性。率<sub>レ</sub>性之謂<sub>レ</sub>道」と謂ふのである。蓋し性は仁・義・禮・智・信で此五者渾然として有れば、則ち齊しく存するものと謂つて居る。而して父子は仁之れが主をなす故に之を親と云ひ、君臣は義之れが主をなす故に之を義と云ひ。夫婦は智之れが主をなす故に之を別と云ひ。長幼は禮之れが主をなす故に之を序と云ひ。朋友は信之れが主をなす故に之を信と云ふのである。次に

博學<sub>レ</sub>之。

審問<sub>レ</sub>之。

慎思<sub>レ</sub>之。

明辨<sub>レ</sub>之。

篤行<sub>レ</sub>之。

右爲<sub>レ</sub>學之序

以上は「中庸」の文にして、子思の主張を採用せしものである。而して慎思<sub>レ</sub>之の意義は「論語」の「君子有<sub>レ</sub>九思」の意味にして九思とは視思<sub>レ</sub>明・聽思<sub>レ</sub>聰・色思<sub>レ</sub>溫・貌思<sub>レ</sub>恭・言思<sub>レ</sub>忠・事思<sub>レ</sub>敬・疑思<sub>レ</sub>問・忿思<sub>レ</sub>難・見<sub>レ</sub>得思<sub>レ</sub>義を云ふのである。次に

言忠信・行篤敬。

懲<sub>レ</sub>忿窒<sub>レ</sub>慾。

遷<sub>レ</sub>善改<sub>レ</sub>過。



## 右修身之要

言忠信・行篤敬は孔子の語にして『論語』に出づ。忠信の意は『己れを盡す之を忠と謂ひ、實を以てする之を信と謂ふ』にて明かである。篤敬の意味は『篤ければ則ち薄からず、敬すれば則ち怠らず』で悉して居る。

懲<sub>レ</sub>忿窒<sub>レ</sub>慾は易の山澤損<sub>三三</sub>を謂へるもので、此卦は地天泰<sub>三三</sub>の下を損して、上を益するの象である。山澤損の象に曰く『山下有<sub>レ</sub>澤損。君子以懲<sub>レ</sub>忿窒<sub>レ</sub>慾』と、象に曰く『損損<sub>レ</sub>下益<sub>レ</sub>上。其道上行』と。王弼之れに註して曰く『可<sub>レ</sub>損之善。莫<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>損<sub>三</sub>忿慾<sub>二</sub>也』と眞に味ふべき言である。

遷<sub>レ</sub>善改<sub>レ</sub>過とは易の風雷益<sub>三三</sub>にして、此卦は天地否<sub>三三</sub>の上卦の陽爻下りて下卦の初爻に入りて震となり、上卦の一爻變じて巽となり、即ち上を取りて下を益したるものである。即ち風吹いて雷鳴り、雷聲風力を添へて互に相益するの象で、故に益と云ふのである。換言せば上に在るもの己れを損して下を益する故民

を安んずるのみならず、又己れの益となるとの象である。風雷益の象に曰く『君子以見<sub>レ</sub>善則遷。有<sub>レ</sub>過則改』と象に曰く『益損<sub>レ</sub>上益<sub>レ</sub>下。民説无<sub>レ</sub>疆。自<sub>レ</sub>上下<sub>レ</sub>下。其道大光。』と、重ねて云へば善を見れば巽風の如く速かに遷り、過ちあるときは電雷の如く英斷以て改むるの意味である。程伊川曰く、善を見て遷れば、則ち以て天下の名を盡すべし。過ありて能く改むれば、則ち世人を益する、是より大なるはなしと、至言と云ふべきである。次に

『正其義不<sub>レ</sub>謀<sub>三</sub>其利<sub>二</sub>。』

『明<sub>三</sub>其道不<sub>レ</sub>計<sub>三</sub>其功<sub>二</sub>。』

## 右處事之要

此語は前漢董仲舒の格言である。即ち仁人は義と道とを發明し、利功を計らざるものなりとの意味である。宋の葉適（水心先生）之を評して曰く『義は當然の理、利は義の和なり。君子は惟其義を正ふせんことを欲するのみ。末だ嘗て其利



を謀らず。利を謀るの心あれば則ち是れ爲めにする所ありて之を爲す。隨て其義を正ふすることあらず。道は自然の路、功は道を行ふの效なり、君子は惟其道を明にせんことを欲するのみ。未だ嘗て其功を計らず、功を計るの心あれば則ち是れ私意を其間に介するあるを以て隨て其道を明かにするに足らず」と至言と云ふべきである。次に

「己所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲。勿<sub>レ</sub>施<sub>ニ</sub>於人<sub>一</sub>。」

「行有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得。反<sub>ニ</sub>求諸己<sub>一</sub>。」

右接<sub>レ</sub>物之要

己所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲。勿<sub>レ</sub>施<sub>ニ</sub>於人<sub>一</sub>。とは孔子の語にして「中庸」の所謂絜矩の道である。絜矩の道とは人の心は同じき故に（人の本性は善なる意味）我を以て人を度り彼我の間を方正ならしむるを云ふ。當今の言葉で申せば正しき同情である。

次に「行有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得。反<sub>ニ</sub>求諸己<sub>一</sub>」とは孟子の語にして、其意味は我れ人を愛し

て、人我に親まず、人を治めて治まらざれば、之れを己れに反り求めて反省するの意味である。反言せば我れの仁知未だ至らざるを反省して、人を責め問ふなかれとの意味である。

以上は白鹿洞書院の學規にして、朱子が古今學者の粹を攝取し、儒道と哲理とを渾融同化せし、圓滿穩健の卓説である。

此の如き圓滿穩健なる朱子の教育説に對し、反對説の出づるは、一見不可思議に思はるるも、然し何れかと云へば、朱子の學説は餘りに理智的であり、窮理的である。即ち彼が主張に従へば「吾人は先づ物我の關係を知るを要す、それには一々事物に就き能く其理を窮めて本然の性を涵養すべきである。本然の性を涵養するには、窮理と同時に居敬が大切である。窮理と居敬とは修養の二大要綱である。而して窮理は「大學」に所謂「格物致知」である。此格物致知は、自己の知識を推し極めて、其極致に達することである。然らざれば眞實に本然の性を涵養する



こと不可能である』と云つて居る。隨て朱子の教育觀も自然理性に偏し、徳性を二次の物となすが如く見らるるのである。茲に自然と朱子の反對説が起るのである。而して其一大反對者は有名なる陸象山である。

陸象山の説は、朱子と同じく二程子の流れを承け、理氣の二元を認めて居るが、其中でも特に理を重んじて居る。彼れ曰く『心則理』である。吾人の心は宇宙の本體から來て居ると稱し、朱子が『心を道心と人心との二つに區別し、其所謂道心は理から出で人心は氣から出づ』と認むるに反し、象山は吾人の心は唯一の理である。本性の心に二つあるべき筈がないと謂つて居る。象山の説に従へば、惡は人の氣質から生ずるもので、此氣質は人に由りて異なるものである。故に象山の所謂心と云ふは、本心又は良知良能であつて、邪心若くは私心即ち惡と區別して居る。隨て其修養法は慎獨實行を重んじ、茲に朱子の窮理を主とするものと、相反するのである。故に象山曰く『自ら自己本心の善を求むることを知らずして、

徒らに人の脚跟に隨ひ、人の言語を學ぶは、徹底的修養の要を得たるものにあらず』と。此の如く同時代に二大家の對立となつて互に拮抗し、勿論兩者の私交上は、誠に麗はしきも、兩者の門弟は、互に鎬を削つて争ふこととなりし爲め、當時の學者にして、特に陸象山に好意を有する呂祖謙は之を憂ひ、遂に自ら進んで兩者の調停を謀つたのである。是れ即ち有名なる鵞湖寺の會合である。此會見に出席せしは一方は朱子と一方は陸象山及び兄復齊（九齡と號す）にして、外に當時の俊髦と稱せられし劉子澄・趙景明等數人であつた。會議は二日間に涉り隨分皮肉の論戰ありしも到底一致を見るに至らなかつたのである。而も陪席せし劉・趙等は一言も意見を吐かずして默聽せしとのことである。試に鵞湖會に於ける三子の吟懷を比較翫味せば、自然三者の抱負と人格とを推知し得るのである。

述 懷

陸 九 齡

孩提知<sup>レ</sup>愛長知<sup>レ</sup>欽。

古聖相傳只此心。



大抵有<sub>レ</sub>基方築<sub>レ</sub>室。  
留<sub>二</sub>情傳注<sub>一</sub>翻榛塞。  
珍<sub>二</sub>重友朋<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>切琢<sub>一</sub>。

未<sub>レ</sub>聞無<sub>レ</sub>址忽成<sub>レ</sub>岑。  
著<sub>二</sub>意精微<sub>一</sub>轉陸沈。  
須<sub>レ</sub>知至樂在<sub>二</sub>于今<sub>一</sub>。

次 韻

陸象山

墟墓興<sub>レ</sub>哀宗廟欽。  
涓流積至<sub>二</sub>滄溟水<sub>一</sub>。  
易簡工夫終久大。  
欲<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>自<sub>レ</sub>下升<sub>レ</sub>高處<sub>一</sub>。

斯人千古不磨心。  
拳石崇成<sub>二</sub>泰華岑<sub>一</sub>。  
支離事業竟浮沈。  
眞僞先須<sub>レ</sub>辨<sub>二</sub>古今<sub>一</sub>。

和 韻

朱 子

德義風流夙所<sub>レ</sub>欽。  
偶扶<sub>二</sub>藜杖<sub>一</sub>出<sub>二</sub>寒谷<sub>一</sub>。  
舊學商量加<sub>二</sub>邃密<sub>一</sub>。

別離三載更關心。  
又枉<sub>二</sub>篋輿<sub>一</sub>度<sub>二</sub>遠岑<sub>一</sub>。  
新知培養轉深沈。

却愁說到<sub>二</sub>無言處<sub>一</sub>。

不<sub>レ</sub>信人間有<sub>二</sub>古今<sub>一</sub>。

朱子の詩は三年後の和韻なるも、以て三者の抱負と人格とを想見することが出来る。而も學說の論難に付ては、殆んど仇讎の如く對するも、兩士相互の私交は眞に深厚を極めし由にて、陸象山は嘗て朱子の招ぎに應じ、白鹿洞書院に出席して院生の爲め終日「論語」中の君子喻<sub>二</sub>於義<sub>一</sub>・小人喻<sub>二</sub>於利<sub>一</sub>なる一節を講述せしとの事である。斯くありてこそ眞に君子の儒たる雅量襟度を見るに足るので、吾人の最も欽仰に堪えざる所である。

陸象山の教育主義を繼承し、之れを完成せしは明の王陽明である。王陽明の教育説は世間周知の事實で、象山を以て最も孔孟の正傳を得たるものと稱し、心を以て學問の第一義となし、而も知行合一を強調したものである。王子曰く「知は是れ行の主意、行は是れ知の工夫、知は是れ行の始め、行は是れ知の成なり」と而して王子は良心を以て先天的に人生に普遍するものと認め、其聖と愚とを問は



ず、而して實際に於て賢愚の差あるは、唯良知を認めて自覺し努力すると否とに由つて生ずるものと斷じ『大學』の格物致知を良知と認め、窮理よりは自覺と實行とを重んじたのである。

宋明時代に於ける性理學は、朱子の問學說と陸王の徳性學との争ひが遂に極端に走りしと、同時に宋明の學徒が漫りに自家の見地に據つて經典に對する解釋を下す爲めに、自然空疏に傾く弊を生じ、後世清時代に及び黄宗義・顧炎武等をして、考證學なる一派を創造せしめたるは、頗る着目すべき史實である。而して考證學は漸次學者の共鳴する所となり、從來の性理學並に訓詁學の外に、一新機軸を出せし爲め、一般の學術界には、確かに新生氣を啓發せしも、而も國民一般に對する實際的教化には、何等の向上發展なきのみか、却て清朝時代の變調とも云ふべき、科學的學風を馴致し、教育學問は、單に官吏登用の方便に偏し、肝腎なる開物成務の人材と、品性陶冶の目的とを忘るるに至りしは、惜しみても餘りある次第である。

る次第である。

之を要するに、古代に於ける中華民國の教化は、燦然たる光彩を放ち、其成績亦頗る見るべきものありしも、其教化は専ら儒教の良心説を唯一の教科となしなから、而も之を時代々々に順應せしむべき、臨機適應の指導に缺陷ありしと同時に、一面訓詁學にしても、性理學にしても、將亦考證學に基ける教育法にしても、兎角形式に拘はれ、所謂「堪<sub>レ</sub>笑翰林陶學士。年々依<sub>レ</sub>樣畫<sub>二</sub>葫蘆<sub>一</sub>」の弊に陥り易きを以て、自然國民教育の施設と效果とに、缺陷を生ぜし次第である。故井上梧陰大人に言はしむれば『支那の病は一言にして盡すべし。曰く文弱なり』と眞に至言である。要するに從來の儒教は、各個人に對する修養法としては素より遺憾なきも、國家を中心とし、協同的生活を目的とすべき、所謂治國平天下の活國民教育としては、聊か緩慢を認むる次第である。

茲に於て我等は明治天皇の聖勅を奉體し、祖國固有の國教に率由するの幸福を



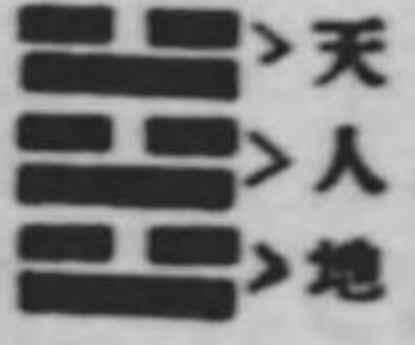
感佩するときは、彌増しに其効果を擧げ、以て其發展實蹟を全ふすべき、責任を感ずると同時に、隣好あり恩義ある中華民國の爲め、夙に同國教化復古の大白覺を起さしめんことを、衷心より切望して息まざる次第である。然るに翻て祖國現在の政治界、並に一般社會の實狀を回顧するときは、折角今日聖勅下賜四十年の記念すべき吉辰を迎へて、國民を擧げて歡喜を與にせんとするの機會に接しながら、衷心轉た聲感に堪えざる次第は、恐らく諸君も同感の事と推察するものである。思はず談意外に冗漫に涉り、各位の倦厭を招ぎしことは幾重にもお詫び申上ぐる次第である。

### 論理學としての易學

「まっり」の意義から見たる易の眞理

易學は一言にして言へば、蔚然たる一大哲學である。故に易理は倫理學としての道理も含めば、社會學としての實理も含み、更に政治學・經濟學は勿論、歴史哲學の原理をも含蓄し居るものである。而も其眞理は、正確なる論理的證明に叙述せられ、且其論理式は普通の三段論法とか、因明とか、辨證法とか、唱ふる單純の論理方式でなく、渾然たる聯環的大論理式である。故に余は易學の論理を、關繫論理若しくは循環式論理と稱するものである。何となれば、易の論理は、自然界の法則と、理性界の法則との交錯感應を一貫せる、渾然たる脈絡的論理であるからである。隨て其實證は、一々互に相關係せる形式と事理とで、照明し得るのである。



然るに説明に先だち、初めて易學の講義を聽く人々の爲めに、一と通り易の大體の筋を、述べ置くを便宜と思ふ。蓋し往古聖人の易を作るや、天の本體を大極と認め、其大極から陰陽の兩儀が現はれ、其陽の大なるものが天であり、陰の大なるものが地である。(一陽の數は奇、陰の數は偶である。天は三にして奇、地は二にして偶である。故に參<sub>レ</sub>天兩<sub>レ</sub>地と云ふ。參とは天は圓にして三點を通じ、地は方にして二偶を合するからである。參天兩地を合して五となる、之を衍して五十となす。筮策の數は茲に基づくのである。)天地立ちて萬物生る。萬物の最も靈なるものが人である。故に天・地・人を三才と稱す。而して三才亦各陰陽の二氣を有す、即ち天に陰陽あり、地に剛柔あり、人に仁義がある。(我皇道から云へば和魂と荒魂とである)故に三才は六位を有して茲に章を成す。易の六爻は此意義に象るものである。即ち  である。斯く天地の位定りて、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火相離れず、茲に八卦が成立し、更に交互錯綜して六十四卦をなすも

のである。

- 乾 兌 離 震 巽 坎 艮 坤
- 天 澤 火 雷 風 水 山 地

此八卦を人倫に配すれば

- 父 少女 中女 長男 長女 中男 少男 母

更に八卦の性質を示せば

- 健 說 麗 動 入 陷 止 順

更に動物に譬ふれば

- 馬 羊 雉 龍 雞 豕 狗 牛 又牝馬

更に之を肢體に譬ふれば

- 首 口 目 足 股 耳 手 腹

易の意義に三つある。第一に易は簡易である。簡易とは天道は至純至正にして、



誠に分り易き眞理と云ふことである。次に易とは變易である。變易とは、萬象何れも此變易を免るゝ能はざる性質を有つて居るとの意味である。次に易とは不易である。不易とは萬象は常に變易して息まざるも、其變易の中に亦一定・不變不易の眞理が存在して居るとの意味である。此三つが易の生命で、これが萬物を生々發展せしむる至徳である。

以上の大綱に由つて先づ乾坤兩卦即ち乾爲天 ☰ ☷ ・ 坤爲地 ☷ ☰ の意義を説明すれば

乾。元・亨・利・貞。

元・亨・利・貞は乾卦即ち乾爲天 ☰ の象辭である。象とは斷の意義で、一卦の意義を斷言せる辭である。而して乾は元即ち大なる上に、亨ふるであり（通り・透ふり・徹ふるである）利即ち正しき結果をなすものであり、貞とて堅固正確なるものである。而して元・亨・利・貞の關係は、乾元とは天の元氣（本體）にし

て、萬物を生々する至徳である。萬物は此至徳より育まれ、生々發展し、何れも其個性を展ぶることが出来る。是れ即ち亨である。斯く萬物各々其個性を展ぶるを得ば、遂にはそれ〴〵相當の價値を表現するものである。此結果を利と云ふのである。斯く萬物各々其價値を表現するを得ば、其處に各々其性を正しく守り、互に調和を保つことが出来る。是れ即ち貞である。故に元・亨・利・貞を四時に配すれば、元は春、亨は夏、利は秋、貞は冬に當り、人生の良心に配すれば、元は仁・亨は禮・利は義・貞は智に當るのである。是を以て乾の性、即ち天行は健なり、君子以て自ら彊めて息まらずと云ふ、天理が明瞭となる。更に元とは善の長であり、亨とは嘉の會であり、利は義の和であり、貞は事の幹なりとの意義が明瞭となり、而も四者互に因となり、果となり、縁となり、報となるの關係が理解せらるゝのである。

次に坤卦即ち坤爲地 ☷ の象辭は



元亨利<sub>二</sub>牝馬之貞<sub>一</sub>。君子有<sub>レ</sub>攸<sub>レ</sub>往。先迷後得。利<sub>二</sub>西南得<sub>レ</sub>朋。東北喪<sub>レ</sub>朋。安貞吉。

とある。此意義を叙ぶれば、坤の卦は乾の卦と相對するもので、乾は天、坤は地である。隨て坤地の卦は乾天の卦に順ふもので、乾天に元・亨・利・貞の四價値があれば、坤地の方にも、同じく元・亨・利・貞の四價値があるのである。唯異なる點は、乾天の方が陽位で、坤地の方が陰位である。もとく大極の本體は絶對的一元であるから、乾坤各の正位も、無論本質は同じである。唯乾天は命令し、坤地は隨從するもので、地は柔順に天の命令に承順する丈である。(此承順の意義は我等が皇道にては「まつろひ」に當るのである「まつろひ」は「まつり」を延ばせし言葉で「まつろひ」を約むれば「まつり」であるとは、故西川須賀雄大人の常に強調せられしものである)隨て坤地の元・亨は乾天の元・亨と同じく、利・貞も勿論同じである。然るに説卦傳に八卦の象を動物に配して、乾を馬として居

る。それは乾は善く動くの象あるを以て、馬に象りしものである。乾を馬に比する爲めに、坤は柔順にして而も無疆なる故に、其象を假りて、牝馬に譬へて居る。即ち牝馬の貞は牡馬の貞の如く、唯正固一點張りでなく、柔順を旨とするとの意味である。(坤卦の象辭に曰く、「至哉坤元。萬物資生。乃順承<sub>レ</sub>天。坤厚載<sub>レ</sub>物。徳合<sub>二</sub>无疆<sub>一</sub>。含弘光大。品物咸亨」とある。坤元の一陰の氣は萬物を生々するの本で、萬物は其氣を受け、資りて以て生々し、天道の施設を順承するものである。而して坤地の博厚豊沃なる、能く萬物を容載するを得、以て乾道の无疆に配するから、飛潜動植悉皆其氣を含蓄し、以て功益大いに現はれ、萬物咸く其性を全ふすとの意味である。此坤徳は婦人に譬へて、其廣大無限の徳を稱するのが、東洋倫理の妙諦なることを思へば、男尊女卑を東洋の思想などと主張する輩は、全く一を知つて二を知らざる、齊東野人の妄論と云ふべきである)故に其柔順の徳を主として行ふ君子は、事業を行ふに當り、何事も自分が先きに立つことなく、必



ず主君・長者の命を承けて、執行することとすれば、凡てに利あるも、若し已れ先んじて、専断するときは、必ず失敗を招くものである。是れ即ち後るれば君主の信用を得ると述べて居る所以である。西南に朋を得るとは、西南は修養を致すの地（東北は功業を致すの地）にして坤と道（即ち方角）を同ふすとの謂ひである。西南は坤（即ち母にして女性）卦の所在で、南より西は皆陰卦の所在である。圖を以て示せば、





即ち離の卦は中女で南に居り、兌の卦は少女で西に居り、巽に陰性である。又東と南との間に、巽の卦（即ち長女）の位置がある。是亦陰性である。隨て西南に於ける卦は皆坤の同朋との意味である。故に修養は成るべく同朋を求めて切磋するを利とする。然し女は結局男に従ふものであるから、一生涯同朋

とのみ交際するは不利なるのみならず、女の道に背くことである。東北に朋を喪ふとは、東北を卦に配すれば、震は長男・艮は小男・坎は中男・乾は父で皆陽性である。故に朋はないが、其代り結局其方に行くが利である。即ち修養の時期には同朋を利とし、女としての奉仕をなす場合には、男子に従事するが利であるとの意味である。而して安貞にして吉なりとあるは、坤徳の人は、何處までも柔順にして、操守堅固なれば、吉を得るとの意味である。故に坤卦の元・亨・利・貞も互に關係聯絡して功あると同時に、乾卦の元・亨・利・貞と表裏會通して、功あることが、理解されるのである。

此の如く天道は至純至正にして、誠に分り易き眞理であると同時に、一切道理詰めなることが理解されるのである。即ち象（象とは卦下の辭を云ふ、文王の述ぶる所と傳へて居る。象は又斷なりと云つて居る。卦の斷言である）象（象とは爻下の辭を云ふ）文言（文言とは乾坤兩卦に對する經文の解説を云ふ）繫辭（繫



辭とは易全體に對する解釋の言辭を書き綴りたるもの、説卦（説卦とは卦中の全體特に卦象・卦位・卦時に付述べたるもの）序卦（序卦は文王が伏羲の畫せし卦を榮枯・盛衰の理法によりて、順次排列せしもの）雜卦（雜卦は六十四卦の中の二卦づゝを或は反對に或は正對に兩々交へて述べしもの、雜とは交錯の意味である）皆何れも此關繫論理に由つて説述せられて居るのである。而も最も簡明にして、其根幹を説述するものは、序卦なるを以て、左に平易に叙述することゝする。序卦は上下の二經に分ちて述べて居る。先づ上經から叙述すれば、大極分れて陰陽となる。而して陰陽の大なるものが天地である。天は陽にして地は陰である。此陰陽二極の天地間に萬象が生れる。萬象の中で一番貴いのが人間である。故に人間が萬象を代表して、天地と併びて天地人三才と稱することは、前に述べし通りである。而して上經は専ら萬象の關係を説き、下經は主ら人生の關係を説いて居る。勿論人間と萬象との間に、共通感應の關係を有することは當然である。天

地の間に盈つるものは萬象であるが、萬象の初めは、屯（シユン）とて物の始めて生ずる象である。隨て萬象の初生を象徴する卦を水雷屯  と云ふ。屯の字は一と艸との合字で、一は土地の意、艸は草木の芽ぐむ意、艸が芽ぐみて、地上に生え出でんとして、土の重さの爲めに、莖曲りて難める貌、此時の屯の音は「シユン」である。屯は亦春の意義をも有し、又蠢と云つて動くの意味も含んで居る。蠢などの動く有様を蠢動と云ふは、屯の形容を表現せし文字である。韓子（韓子とは韓康伯を云ふ。以下之れに従ふ。）は「屯とは剛柔始めて交るの意味」とも云つて居る。斯く物初めて生じたる屯の貌は蒙である。故に之れを象徴せし卦を山水蒙  と云ふ。蒙とは頭に物を深く被ぶれる貌で、無智にして心暗く、幼稚の状態を云ふのである。故に屯の卦に次ぐのが蒙の卦である。物の始めは頓と分らぬが、追々と養ひを受けて、大きくなる様に待つものゝ如く思はれる。換言すれば、幼稚にして愚蒙なる物は、是非とも世話を施し、養ひ育てることが天



理であると云ふやうに思はれる。故に此次に来る卦が需である。其卦は水天需  $\text{䷄}$  である。需とは「飲食の道」なりと云ふから、飲食の道を以て、身體を養ふ意味である。而して養はれる方から云へば、飲食を求むるのであるから、需は「モトムル」と訓むのである。而して一方に物を需むるものがあれば、又一方にも之れを求めようとする様になるから、其處に争ひが起る。是れ即ち訟へである。韓子曰く「生あれば則ち資あり、資あれば則ち争ひ興る」と恰も「マルクス」主義者の唱ふる生物社會相の一面である。故に需の次には自然訟の卦が續くのである。其卦は天水訟  $\text{䷅}$  である。即ち食物の争ひに訟へが起ると、是非とも裁判を下して、事の當否を決定することとなる。然るに其訟が大きくなると、中には多數を頼んで、其裁判に服従せぬ様になる。其場合に此大衆の反抗を如何にして防ぐかと云へば、茲に軍隊の必要が起る。而して軍隊のことを師と云ふ。師團の字義は是れから出て居る。往昔支那では、一師の人数を二千五百人として居る。

師即ち軍隊は訟の大なるもの故、訟の次に師が必要となるのである。其卦は  $\text{䷆}$  にして、之を地水師と云ふ。斯く大勢になれば、是非とも親しむ様になることが必要である。一面から見れば、大衆集れば、自然親比するものが出来るのである。故に師の卦の次には比の卦が表はるのである。比とは人と人とが、肩を比べて一緒に立つの意味で、親しむことである。比の卦は水地  $\text{䷇}$  であるから、水と土と和合して、離れざる貌である。斯く親しみ睦み合ふ故に、集りて大となる。故に比の卦の次に小畜の卦が来るのである。比すれば必ず養ひ畜ふるからである。例へば親が子を畜ふ如く、又二人並んで歩行する際、一方が倒れんとすれば、一方は手を引いて、助ける様な次第である。即ち畜ふ所あれば、相濟ふことが出来る。小畜の卦は風天  $\text{䷈}$  で、大臣が天子を助け育てると同じ意味で、陰の養功を云ふのである。(其反對に山天  $\text{䷳}$  大畜と云ふ卦は天子の方で大臣の徳を助け育てる卦で矢張陰の養功を云ふのである)物を畜ふれば、自然と譲り合ふ



心が出来るから、其處に道德上の禮が實現するのである。所謂衣食足りて禮節を知るの謂ひである。故に小畜の卦の次に履の卦が次ぐのである。履は履み行ふこととで禮である。禮は凡ての事に程能く適用するの意味である。更に履の卦は天澤  $\text{䷉}$  で、天は高く澤は低く、互に其位置を重んじ、其本分に安んずるは、禮を守る所以で、高き人は低き人の心を汲み、低き位置の人は高き位置の人を思ひ遣りて、其處に意志の會通が出来れば、兩者の間安泰となること勿論である。故に履の卦の後に泰の卦が続くのである。其卦を地天泰  $\text{䷊}$  と云ふ。泰とは通なり、有無相通ずることを云ふ。然れども物には自ら制限がある。故に道に行き詰りが出来、通することが不可能となる。何となれば泰には一面過ぐる性質がある。物過ぐれば亂るゝものである。即ち安泰の裏には、天下の騷亂を胚胎するものである。故に泰の卦の次に否の卦が来る。其卦は天地否  $\text{䷋}$  である。否の卦は天地閉塞の象である。然し何時迄も上下不通にして置くことは出来ぬ。是非とも和解

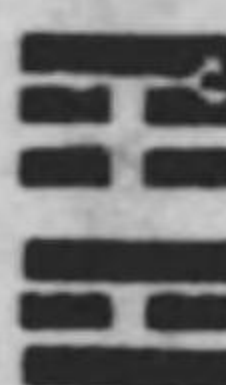



の方法を講ずべきが如くに、天理は窮すれば亦通ずるものである。故に否の卦を受くるに同人の卦を以てするのである。其卦は天火同人  $\text{䷌}$  である。同人とは四海皆同胞であるから、人間の本性として、互に相親しむ情がある。否すれば必ず通ずるとは此謂れである。其處で人々志を同ふして會通を圖ることとなる。人と人と志を同ふせば、其處に物必ず歸するものである。故に同人の卦の次に大有の卦が続くのである。其卦は火天大有  $\text{䷍}$  である。有には多しと云ふ意味と、富むと云ふ意味を有つて居る。是迄なかつた者が、多く有る様に、是迄貧しかつた者が、充分富める様になるとの意味である。故に大有と云ふ。斯く富が多量になると、所謂盈つれば缺くるものである。故に茲に謙讓の必要が起る。隨て大有を承くるに謙を以てするのである。謙の卦は地山  $\text{䷎}$  にして、五陰の中に一陽があるの象で、之を六人の兄弟に譬ふれば、六人の女性の間、四人目に一人の男子が居る象であるから、其男子は謙讓にして居れば、姉妹の五人から尊重敬愛

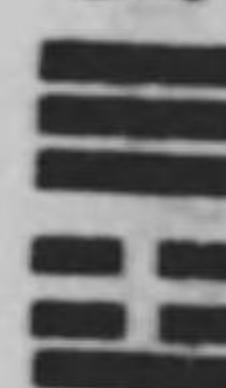
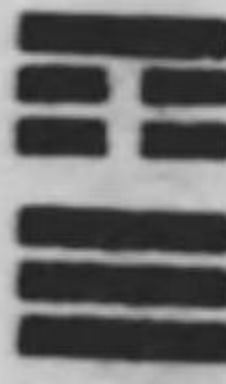



せらるゝは勿論である。故に有すること大にして、我身驕らず、能く人の下風に立ちて、能く謙なれば、必ず豫ヤく安穩である。故に謙を承くるに豫を以てするのである。其卦は雷地豫  $\text{䷏}$  である。豫とは安く・寛やかであり・あらかじめ用意するの貌であるから、自然に随ふ者も出来るのである。韓子曰く「順以て動く者は衆の随ふ所」と云ふは此事である。故に豫を承くるに隨を以てするのである。其卦は澤雷隨  $\text{䷐}$  である。人に好スかれると、自然と人が着いて来る、人が着いて集つて来ると、必ず仕事が始まる様になるから、隨の卦の次に蠱の卦が現はるのである。山風  $\text{䷑}$  蠱とは内部の腐敗なり・壊なり・事なりである。上卦は艮山にて止むる意味、下卦は巽風にて吹き入るゝの象である。物壞れて人之れを繕ふ意味である。隨の卦は人が多勢隨ひ来るから、ソコで自然と事が殖える。事が殖えるから、それに始末を着けるのが此卦の意味である。事起つて次第に盛大になれば、我身も自然に大を致すことゝなる故に、之れを承くるに臨を以てすること


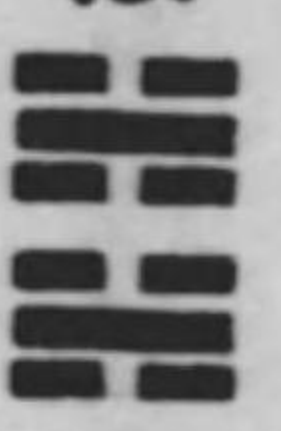
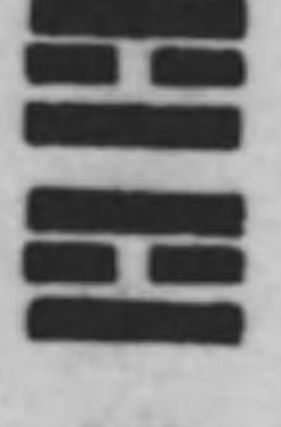
となる。地澤  $\text{䷐}$  臨とは大である。此卦は二陽を以て四陰に臨むと云ふ所から、大なる意義を持つ。(之れを四時の節に譬ふれば、恰も陰曆の十二月に當る。  $\text{䷁}$  は坤爲地の卦で、陰曆の十月に當り、陰の滿てる象である。  $\text{䷁}$  は同じく十一月で一陽來復の象である)。而して臨とは上から下を見る義であるから、物が大きくなつて、より能く見ることが出来ると云ふ意味である。故に臨を承くる卦は觀である。其卦は風地觀  $\text{䷓}$  である。觀とは見る所大きくなれば、眼界次第に廣がり、遂に視力が及ばぬ様になる。そうなると中を隔つるものが出来るから、ソコで之れを治むる媒介者が必要となるのである。故に觀の卦を受くるものが噬嗑の卦である。噬嗑の卦は火雷  $\text{䷔}$  である。上卦の  $\text{䷔}$  は口中にある食物を、上齒と下齒で、嚼み合ふて碎く貌を示して居る。此の如く隔つるものを、會合せしむる意義であるから、當座凌ぎに合はせる丈では効果が無い。其處で儀禮を以て正しく融合せしむるが肝腎である。即ち禮儀に外づれ、道を忘れては、シ



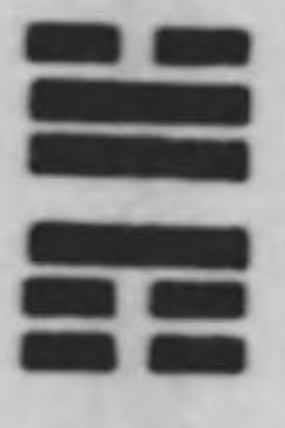
ツクリ噛み合ふことが出来ぬからである。それで此卦の次には是非とも賁の卦が必要となるのである。賁とは山火  で飾ることである。即ち猛火が前山を照らして、草木輝くの象である。此意味から禮儀を以て、物を修飾することである。斯く巧みに纏りが着くと、物が納まつて仕舞ふから、之れを承くるに剝の卦を以てするのである。韓子は「飾りを極むれば、即ち實亡ぶ」と云つて居る。剝とは物窮れば盡くるの意味である。卦に表せば山地剝  なるを以て、陽が次第に伸び過ぎて盡くるの象である。然し物遂に盡すべからざるが故に、此次の卦は復となり、復するのである。復とは地雷  にして山地  の一番上の陽爻が一番下の爻に復するの卦である。恰も植物の果實が、熟し切つて地に落ち、地の中に埋つて復たそれから芽が吹き出ようとする貌である。即ち前には陽が上に昇り切つて危くなつたのは、人間に譬へて見れば、慾が増長したのである。然るにそれが地に落ちて、落ち着く處に落ち着いたから、慾がなくなつたのである。

慾がなくなれば、真正の精神に復したのであるから、無理がないのである。之れを无妄と云ふ。故に復の卦を受くるは無妄である。其卦は天雷无妄  である。妄は望なり、慾なり、それが來復即ち低きに下りて、無謀・無慾となるから、天理の良心に安んずることとなる。之れを妄ならずと云ふ。即ち眞實の意味である。斯く无妄となれば眞實を止め置くことが出来る。之れを畜ふと云ふ。故に无妄の卦の次に大畜の卦が来る、其卦は山天大畜  である。大畜の意味は大の正氣で之れを我身に稟けて畜ひることである。物畜めて貯へ置くことが出来るから、之れを以て廣く養ふことが出来る。換言せば、正しい精神を以て資産を蓄積すれば、之れを以て無産者や不幸の者を、救助し扶養することが出来る。故に大畜を受くるに頤を以てするのである。其卦は山雷頤  である。頤とは養ふことである。頤（おとがひ）とは物を噛んで咀嚼し、以て身體を養ふ機能をなす所から、此字を養ひと訓むのである。養ふ以上は充分に積極的に養ふのが肝腎



である。何となれば充分に養はざれば、立派に心力體力を、發育せしむること、不可能であるからである。故に頤の卦の次に大過の卦が続くのである。大過とは澤風  で、陽が過ぎ居る象から、剛に過ぐる意味である。然し物は餘りに強く過ぐるは宜しくない。故に大過を受くるに坎を以てするのである。坎とは陷ること、卦は  坎爲水である。坎は險なり、水なり、上下同じく坎にして險難重さなる故に習坎と云ふのである。習は重習なり、一陽二陰の間に陷る、故に坎と云ふ。而して坎の重さなるは、一難去りて一難來るの象である。然し物陷れば亦必ず何れにか落ち着くものである。例へば水に溺るゝものも、岸に取り着くが如き次第である。故に坎に次ぐに離の卦を以てするのである。離の卦は離爲火  にして一陰爻二陽の間に附屬し、又二つの離形相重さなる故に、附着するの意味である。而して離とは、麗（繫ぐ・着く）で物に着き止まることである。即ち物窮れば則ち變ず。故に陷ること極まれば、更に麗く所に反るものである。

以上が序卦の上經で、互に聯絡關係し、其處に不易の眞理の一貫し居ることが分るのである。而して坎水の卦と離火の卦にて終るは、要するに天地間に於て、最も效用の多きは、此坎離即ち水火である。即ち天に在つては日月であり、地に在つては水火である。水火に由つて萬象生成し、人類も生活し得るのである。


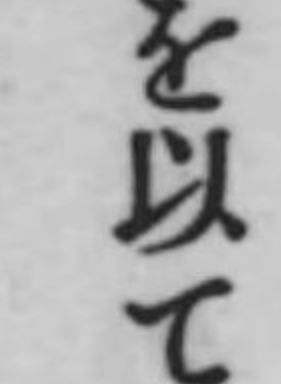
是より序卦の下經を叙述する。前述ぶる如く、上經は天地を主とし、下經は人生を主としての關係を説いて居る。即ち天地あつて然る後萬象があり、萬象があつて然る後に男女があり、男女があつて然る後に夫婦があり、夫婦があつて然る後に父子があり、父子があつて然る後に君臣があり、君臣があつて然る後に上下の區別があり、上下の區別があつて然る後に、禮儀が生ずるのである。以上の關係を咸と云ふ。其卦は澤山咸  である。咸とは交感の意味である。古は咸と咸と通用せしものである。象に曰く「柔上りて剛下る。二氣感應して以て相與みす」と又曰く「天地感じて萬物化生す」と、易に於ては感應を至要の事相と認

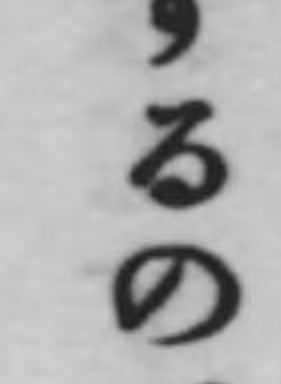
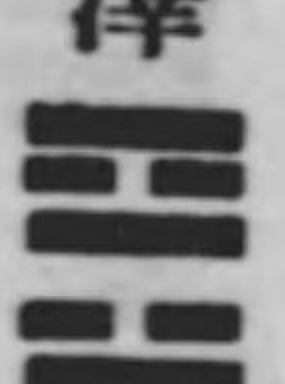
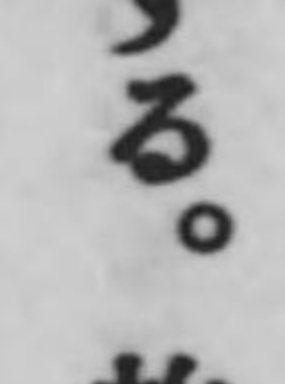


めて居る。自然界の運行も、理性界の當爲も、感應が一切の表現をなすものと認める。故に感應の節理が調へば、天地人の三才は必ず調和融合を招來すると謂ふのである。易學の妙理は一に茲に存するとも謂ふことが出来ると思ふ。而して人間未開の際は、知識がなかつた爲めに、夫婦の別がなかつたのである。夫婦の別がない爲めに、生れた子供は父親が分らぬ。父親が分らぬから、人間も禽獸と同じ様なものであつた。そこで聖人が人倫の道を立て、感應の妙理に基づき禮を設けて、夫婦の別を立てたのである。此禮が所謂婚姻式である。此婚姻の禮を以て、夫婦の別を立てた以上は、是非とも永久に保續せしむるの必要がある。然らざれば再び往古の野蠻時代に逆戻りするからである。故に咸の卦を受くるに恒を以てするのである。恒の卦は雷風  $\text{䷟}$  で上卦は震の雷、下卦は巽の風で、取りも直さず雷鳴して風聲を増し、風吹いて雷聲を高むるの象であるから、二者相助け、其聲を繼續せしむるとの、恒久的意味である。又別に震の長男が外に出で、巽の

長女が内に居る意味をも含んで居る。然れども物何時までも、久しきに居ることを許さぬ事情がある。例へば水も久しく同じ處に停留すれば、腐敗する如く、何事も久しく沈滞すると、百弊隨て生ずるものである。故に之れを受くるに遯を以てするのである。遯は退避である。遯の卦は天山  $\text{䷠}$  で上卦は乾天であり、下卦は艮山である。山上に登りて天を眺むれば、天愈々遠ざかるの象である。又二陰漸く長ぜんとするから、小人進み君子退き去るの意味がある。然し何時迄も引込み切りでは協はぬ。是に於て其反對に、進むべき道を得たならば、大いに邁進すべきである。換言すれば、人は消極的に隱退するは、人生活動の意義に反するから、大壯として雷天の勢を以て、積極的に向上進展すべきである。故に遯の卦を承くるに大壯の卦を以てするのである。大壯とは人の年齒に配すれば、三十である。即ち血氣盛りの象である。重ねて云へば、陽盛なれば陰衰ふるもので、君子の道の盛なるを表現せる象である。此卦は雷天  $\text{䷗}$  で、雷が天上に鳴りて、其



聲壯大であるとの貌である。又下の四陽が盛んに進みて、上の二陰正に排去せしめらるゝの象である。然し物は單に血氣の旺盛なるに任せ、邁進する丈では、所謂猪武者で、必ず行詰るものである。故に大壯を承くるが晋の卦である。晋は火地  で上卦に離火、即ち大陽があり、下卦に坤地があるから、大陽地上に昇りて、遍く天下を照らすの象である。又坤地は柔順の徳を以て、大陽即ち明德の君子に事へて、天下を安んずるの象とも云へる。故に晋は進歩向上の意味で而も徐々と進展する卦である。是れ即ち猛進の大壯に次ぐに漸進的晋を以てする所以である。然るに進めば必ず疲れ若しくは傷くものである。故に之れを承くるに明夷を以てすることとなる。明夷の卦は地火  である。其意味は目を傷ひて光明を失ひたる貌である。即ち日中すれば則ち昃カクムき、月盈つれば則ち蝕することを云ふ。再言すれば、恰も日が西山に落つれば、明を失ひ、明らかなる所も暗くなるから、其儘進み行くと怪我をするとの意味である。夷は傷なり、外に出で傷を

得れば、必ず家に反つて養生をするの意味である。故に明夷の卦の次に家人を以てするのである。風火家人の卦は  である。家人の卦の象に曰く、「家人利女貞」とある。家人は家族の婦人を指して云へる稱である。上卦の巽は長女、下卦の離は中女で、二女同居して家庭圓滿なるの象である。又巽は木、離は火であるから、婦人が薪を以て爐や竈に火を焼き、暖を取り食を齊へて、病人を看護保護するの意味にも通ずるのである。然し一家も親密が度を過すと、其極相反するに至るものである。故に家人を承くるに睽を以てすることとなる。睽の卦は火澤  である。睽は乖なり、其卦は上卦が火で、下卦が水で互に離るるの貌である。又離は中女、兌は小女であるから、小女が内に在つて寵愛を受け、中女が疎んぜられて、外に居るの貌で、之れを妻妾に譬ふれば、妾が内に幅を利かせ、妻が外に別宅をして居るの貌で、離反の意義である。斯く乖けば必ず混雜が生ずる。故に睽を承くるに蹇を以てするのである。蹇の卦は水山  である。



即ち水と山と重なり居るから危険の象である。進むも退くも兩難の意味である。故に蹇と云ふ。蹇は「あしなへ・ちんば」と訓み、艱むの意味である。然し物何時までも艱み續くものでなく、必ず打解の途が就くものである。即ち窮すれば通ずるの譬への通りである。故に蹇に次ぐに解を以てするのである。雷水解の卦は  $\text{䷧}$  である。解とは緩かで困難融けて寛かになるの象である。解の卦を四時に配すれば冬に當る。而して雷が上で水が下であるから、地下の水が凍りて、萬象皆閉ぢ籠つて居るが、雷が鳴つて雷火の爲めに、地面の水が解けると云ふ象である。即ち是れから春に向つて段々寛かになると云ふ貌である。然るに物寛なれば、必ず失ふ所を生ずるものである。故に解を承くるが損である。其卦は山澤損  $\text{䷶}$  である。然し損して已まざれば、必ず益するに至る。故に損を承くるに益を以てすることは、説明を俟たずして明かである。其卦は風雷益  $\text{䷗}$  である。然し益して已まざれば、必ず決するに至る。韓子も「益して已まざれば則ち盈つ。

盈つれば決す」と謂つて居る。凡て物の分量が飽くまで加はれば、破裂するは當然である。故に之れを承くるに、夬を以てすることとなる。夬の卦は澤天  $\text{䷪}$  で一番上が陰で小人である。其處で五陽の大人が一陰の小人を追拂ひ除くの象である。然るに小人は容易に根絶するものでなく、首尾能く追拂ひしかと思へば、何時しか姿を變じ、今迄と反對に下の方に潜んで隠れ居るのである。斯く隠れ潜んで居る内、少し落着くと、徐々復た其本性を表はして、悪い事をする、自然と、小人同志が集ひ寄る様になる。故に夬の卦に次ぐに姤の卦が出て來るのである。天風姤の卦は  $\text{䷫}$  である。姤とは遇であり、集まりである。甘言佞辭を以て、巧みに人の機嫌を取つて、類を以て集まるものである。故に姤の卦を承くるものが萃の卦である。澤地萃  $\text{䷬}$  の萃は聚なり・至なりで、上卦に澤あり、下卦に地がある。故に澤水が浸潤して、地下に聚まるの象である。且此卦の象を見るに、中に  $\text{䷌}$  即ち巽の卦がある。巽は草木である。地上の澤山の水が地下に浸



潤し、その爲め草木が成長し、次第に上に高く峙ち立つの意味である。聚ると上向とは此意味である。故に萃の卦の次に升の卦が來るのである。聚りて上る、之を升と云ふは、次第に成長する意味を云ふことである。升の卦は地風  $\text{䷭}$  で坤地上にあり、巽風下にあり、風即ち下より起りて、塵埃を吹き揚ぐるの象である。然し升りて已まざれば必ず困むもので、所謂進むを知つて退くを知らざれば必ず行詰るに至るものである。故に升の卦を承くるに困の卦を以てするのである。困の卦は澤水  $\text{䷮}$  で内卦二爻目の陽が二陰の間に挟まり、外卦の二陽爻が上六の陰に壓さるゝ貌で、取りも直さず、諸陽困難なる時相の象である。故に象に曰く「困は剛・揜はるゝなり」と云つて居る。又困の卦は上卦は澤で、下卦は坎水である。澤は堤防を設けて、水を貯ふる處である。然るに其底に地下水が流れて居るので、折角の溜池の水が漏れて、不時の用をなさぬとの困みを含んで居る。而して此困難は、澤の水が堤防の上に、升り過ぎての困難なる象であるから、自然

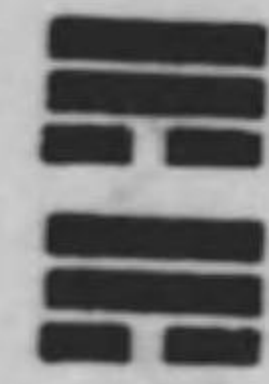
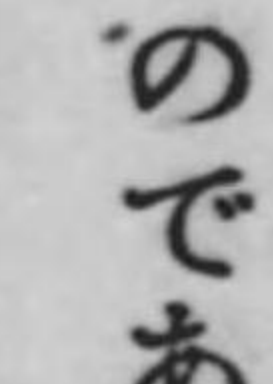
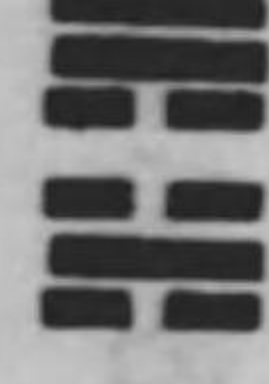
下の方に引返すのが當然である。故に困の卦を承くるものが井の卦である。井の卦は水風  $\text{䷯}$  で、井は地を低く穿ちて清水を得る意義なれば、人間も升り詰めて困む者は、思ひ切つて低き地に着くことが利益である。然し井道は時々汲み替えることが大切である。何となれば、井久しければ塵埃滓りて汚穢となるからである。宜しく其故土を汲み出し、革易すべきである。故に井の卦を承くるに、革の卦を以てするのである。澤火革  $\text{䷰}$  の卦は水と火と相遇ふて、互に消し合ふ象であり、又兌の小女と離の中女と、同居して志合はず、争ひの極其居を別にするの貌である。即ち物を改め替ゆるの意味である。而して物を革むるには、鼎に若くものはない。鼎は如何なる物も、中に納れて之れを煮れば、皆變はるものである。故に革の卦を承くるのが鼎である。其卦は火風鼎  $\text{䷱}$  である。韓子は「革は故を去り、鼎は新を取る。既に以て故きを去る、則ち宜しく器を制すべし。法を立て以て新を治むべし、鼎は生物を和齊する所以」と云つて居る。斯く鼎は

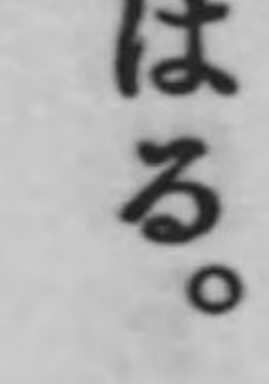
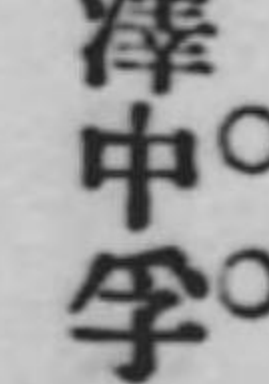
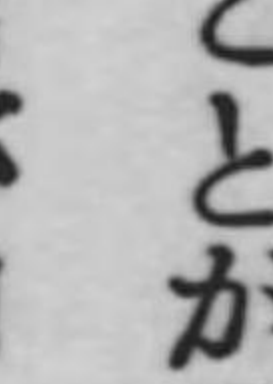


生物を和齊する故に、昔より鼎を天子の寶器と尊重して居る。其意味は、食物を齊へて、民を養ふ器なりとの、意味に基くのである。而して此器を取扱ふものは誰かと云へば、長子に若くなしと云つて居る。震は長男で一家の繼續者なるを以て、自然と鼎を取扱ふこととなる。故に長男の關係から、鼎の卦の次に震を以てするのである。震爲雷  $\text{☳}$  の震は雷であり、動く意味である。動いて萬象を養ふのが、此卦の本質である。長子は相續し、仁徳を施して他を養ふの義務がある。既に其義務があるから動くのである。働くべきである。然し唯動く働く丈では、亦行詰りが出来る。宜しく之れを止め、調節するの必要が起る。隨て震の卦を承くるに、艮を以てするのである。艮爲山の卦は  $\text{☶}$  である。艮とは艮山で、動かざるもの、即ち止まりて變動せざるの意味である。艮の卦は上下とも山なり、故に兼山とも云ふ。卦の貌は、一陽爻が二陰爻の上に止まり、進むことが出来ぬので、所謂動かざること山の如しと云ふ象である。然るに物以て何時迄も止まる

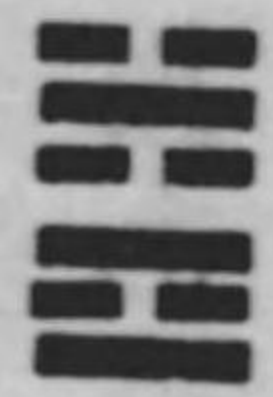
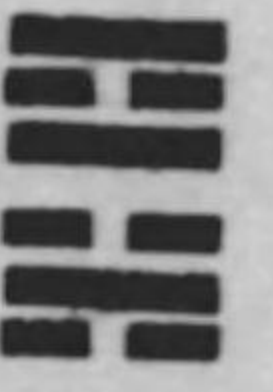
べきでない。宜しく變化し進展することが肝要である。故に艮の卦を承くるのが漸である。漸の卦は風山  $\text{☴}$  で、漸の意義は進むことである。漸く進むこと。順序よく進むことである。上卦は巽木で、下卦は艮山である。樹木山下に生じて、漸く成長するの象である。進めば必ず歸着するものである。故に漸を承くるに歸妹を以てするのである。歸妹の卦は雷澤  $\text{☱}$  にて、兌の小女が震の長男の處に嫁ぐの意味である。嫁して其落ち着く所を得れば、必ず大を極め、富を得て豊かなる生活を遂ぐるものである。故に歸妹の卦に次ぐに豊の卦を以てする。豊の卦は雷火  $\text{☲}$  で、其意味は大である。而して上卦は震にて動き、下卦は離れて明かである。故に象に曰く「明以て動く故に豊なり」とある。然し大を極むるものは、必ず其居を失ふと云つて居る。故に豊の卦を承くるものが旅である。火山旅  $\text{☲}$  とは、貧くして家を出で、彷徨容るゝ所なき貌である。即ち人が旅をして艱難勞苦を嘗め、心中悟る所あるの意味である。旅の卦は上卦は離火、下卦は艮



山で、山火事の象である。彼所が燃え、此處が燃ゆること、恰も飄浪處定めぬ貌である。斯く身を容るゝ所なき爲め、旅の卦を承くるが巽の卦である。巽爲風  の巽の意味は、巽順・従ふこと・入ることである。又小さくなる意味である。卦は上下共に巽にして、一陰爻二陽爻の下に入り、陽に従ふ有様を象徴して居る。斯く小さくなつて、温順に従へば、自然人から愛せらるゝに由り、喜悅を感じるのである。故に巽の卦に次ぐは兌である。兌爲澤  の兌は説（悦）ぶ意味である。此卦は上下とも兌の卦であるから、兌爲澤と名づくるのである。形は下に二陽爻あり、上に一陰爻ありて、内剛に外柔なる故に、人皆喜び來り従ふの象である。然し餘りに喜び居ると、自然と氣が緩んで來る。緩んで來れば物が段々敗れ荒んで來る。そこで之れに替はるに渙の卦が必要となる。風水渙（風水坎）  の渙は離るゝこと・散ることである。上卦は巽風、下卦は坎水で、水・風に吹かれて、波瀾飛び散るの象である。換言すれば、凝り固まつた氷が融け、それ

が次第に緩み、遂に風の爲めに飛び散る意味である。斯く物は散亂し盡すべきにあらず、そこで宜しく引締むることが必要である。故に渙を受くるに節の卦が現はる。水澤節  の卦は、陰陽各平等に分るゝ故節と云ふ。物節あれば成る。節して而して後之を信ずとは、十分に引締めて恰も竹の節の如く固くなれば、必ず其處から信用を得る様になる。故に節を承くるに中孚を以てするのである。風澤中孚  の孚とは信である。即ち心の中に孚あることの意味である。我心の中に誠があれば、自然と人から信用を受くる様になる。信用があれば何事も行ふことが出来る。故に中孚の卦を受くるものが小過である。雷山小過  の卦は、雷が山上に鳴りて其聲遠しの象である。又全卦二陽四陰にして、小即ち陰が多く、大即ち陽が少き故に、小過と云ふ。小過とは天下の事必ず物に過ぐる所、即ち長所あるを要すとの意味である。換言すれば、如何に小事と雖も、正しき物は必ず其處に何等か他に過ぐる長所があるとの意味である。斯く物に過ぐる所ある者は、



必ず事が成就するものである。故に小過を承くるが既済の卦である。水火既済  とは、文字の示す如く、事悉く成就するの意味である。卦の象は上卦は水、下卦は火である。水を火の上に加ふれば、必ず沸く、是れ水火相濟ひて、用をなす意味である。然し成就するも、久しきに亘れば、また行詰りが出来るものである。故に既済を承くるに未済を以てする。火水未済  の意義は、一つの事一つの物も、纏つたならば、それで止まり切りかたと云ふに、そうは行かぬものである。復た初めに戻つて、新規時き直しをする様になるから、そこで「以未済終焉」と結んで居る。茲に人生の生々發展の道が開かれ、易の所謂「生々曰易。又天之大徳、謂生」所以が理解されるのである。

以上叙述する所によれば、易理には一定の順序がある。此順序は、易の不變の眞理が存するに由る。而して順序は固定するものでない。固定すれば變化がなくなるのである。然し變化はあるが、其變化の間に必ず一貫の眞理がある。茲に易

の生命たる、生の本體が實在するので、此原理が自然に論理式をなすものである。隨て易理を我皇道から見ると「まつり」即ち「まことのつらなり」である。故に我「しきしまのみち」の原理を以て、易理を解説することが出来、而もそれが適當である。斯く易理が大哲學であり、而も其眞理が動かすべからざるもので、我「しきしまのみち」と同哲理であるとすれば、兩者の眞理は、洵に不可思議なる價值であると共に、偉大なる東洋文化の誇り、否世界文化の一大特色と云ふことが出来るのである。



## 明治天皇を仰ぎ奉りて

明治天皇に對する我等臣民の敬仰心は恐れ多くも九重の宮闕にも、上達せしものによ、嚮に政府は天皇の御誕辰即ち十一月三日を以て、畏くも國家の大祭祝日に制定せられしは、國民一同の歡喜に堪えざる次第である。

あやに畏こき明治天皇は、誠に活き神にあらせられしと同時に、絶對的人格者にいませられしは、唯り我等臣民のみならず、宇内萬國の等しく敬仰し信服せしところである。斯く世界を擧げての敬仰は、何に由つて然るか云へば、私は唯絶對的聖愛の權化で在らせられしとの、一言を以て盡し得ることと思ふ。換言すれば天皇は全然沒我的至上愛と犠牲的大御心とを以て、君臨遊ばされし次第と恐察し奉るのである。随つて天皇は何時も國民全體の安寧福祉を軫念あらせられ、毫も御一身の利害休戚を、叡慮あらせられざりしが如き、感起さしむる次第で

ある。一例を申上ぐれば、御在位中一度も、避暑避寒の御行幸を仰出されし事實なきに就きても、充分如上の感を深刻ならしむる次第である。又適當なる機會に於て、宮内大臣より屢々上奏ありしも、御遊覽的行幸の御裁可は遂に一度も在らせざりしとのことを、拜聞いたし居るのである。即ち此裏の御消息は、ありがたき御詠に由つて、一々恐察し奉る次第である。

暑しともいはれざりけりにえかへる水田に立てるしづを思へば  
たちつゞく市の家居は暑からむ風の吹き入る窓せばくして  
重荷曳く車のおとどきこゆなるてる日の暑さたへがたき日に  
たかどのゝ内もあつさにたへぬ日にしづがふせやを思ひこそやれ  
つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて  
かたはらにおける氷のきゆるにも道ゆく人のあつさをぞおもふ  
たへがたき暑さにつけていたであふ人のうへこそ思ひやらるれ



窓の内に扇とれどもあつき日にてる日をうけてしづの草かる  
いくさ人いかなるのべにあかすらむ蚊の聲しげくなれるよごろを  
ものゝふの野邊のたむろやあつからむ宮の内にも風をまつ日は  
ときのまに硯の水のかわくにもけふのあつさのしられけるかな  
梅雨にたたみのうへもしめれるをたむろのうちぞ思ひやらるる  
もろこしの荒野の末のありさまを思ひやりても月を見るかな  
たゝかひのには心をやりながらむかひふかしつ秋のよの月  
しぐれして寒き朝かな軍人すすむ山路は雪やふるらむ  
ものゝふの野邊のかりふしいかにぞと思ひやらるゝよはの霜かな  
しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな  
桐火桶かきなでながら思ふかなすすきま多かるしづがふせやを  
寐覺してまづこそ思へつはものゝたむろの寒さいかがあらむと

こらは皆軍のにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ  
斯る大御心の程にあらせられし故に、天皇にはついぞ避暑避寒などの、叡慮も  
起らざりし次第と恐察し奉るのである。

何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身のためにこそ  
一天萬乗の尊位にいませらるゝ、天皇に在らせらるゝ上は、何事も思ふがまゝ  
に御振舞遊ばさるゝことが、出来るかの様に恐察せらるゝにも拘らず、御身親ら  
克己反省して、態と御不自由をお忍び遊ばさることが、如何にもありがたき御事  
である。天皇にも時としては、物見遊山の御思召も起らざるには、あらざるべく  
も、終始如上の大御心を、御持續在らせらしことは、何とも感謝に堪えがたき極  
みである。

庭の面に清水の音はきこゆれどむすぶいとまもなき今年かな  
年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり



真に感泣に咽ぶ次第である。或時宮内大臣（田中光顯伯）が京都御臨幸を、お勧め申上げしに

「朕は京都を愛す、山川草木何となくのびやかに人の心を落ちつかせる。朕が若し京都の地を踏むことならば、恐らく半月の旅行が一月となり、一月の遊覧が二月となるに相違ない。左様な時には國事は曠廢し、上は祖宗の遺訓に忤り、下は萬民の望みに背くことになるであらう。故に京都へ參ることは斷念して居る」

との御沙汰を拜して、宮内大臣は何とお答へ申上げてよろしいか、胸が塞がる思ひをしたとのことである。（『明治大帝』拔萃）之れと同じき御逸話は、嘗て西園寺公爵にも、御沙汰があつたと云ふことである。

「朕は京都がすきであるから行かぬ」

「すきであるから行かぬ」と云ふ御思召は、實に普通人の真似も出來ぬことで、

此大御心が全く明治天皇の神にいませし御聖徳と、拜察し奉る次第である。天皇は豫てより、天の橋立の勝景をお聽き遊ばされ、其憧憬心も深かりしと見えて、或時

松風の音のみきゝて年も経ぬいつかゆきみむ天のはしだて

と御詠遊ばされしとの御事である。天の橋立への行幸は、天皇の御身として、真に一投足の御事なるべきに、一度も御遊覽的行幸を仰出されし御事なきは、真に感激の極みである。

斯の如く萬事に、絶對的愛情を以て、臨ませらるゝ故に、お直の宮様方に向はせられても、尙一般の臣民と一視同仁に思召されしことは、嘗て私が故佐々木高行侯より傳承せし、明治天皇の

「朕には七千萬の赤子がある」

と仰せられし一事にて、充分恐察が出来るのである。前掲の「明治大帝」と題す



る、著書に左の記事がある。

「明治二十一年五月八日より、憲法會議が開かれ、毎會殆んど明治天皇の出御が在つたと云ふことである。而も其歲十一月十二日の會議の當日、侍従があはたゞしく、這入つて來て、伊藤議長に耳打した。其時は樞密顧問官が、議論を戦はし居る最中であつたが、議長は席を起つて、天皇に何事か内奏された。其時列席の諸官は、何の事やら無論分らなかつた。天皇は相變らず泰然自若として、御座につかれて居る。頓て會議が濟ひと、議長が入御を奏請し、天皇は玉座からお立遊ばされた。そこで議長は一同に向つて、……さて只今入御あつたは、皇子殿下が薨去遊ばされたのである。先刻侍従が其報告をした時、余は議事を直ちに止めて、入御遊ばされますか、如何取計ひませうかと申上げた處、天皇には此一條が議了するまでは、議事を続けよと、御沙汰になつたにより、討論を続け、可否を取り、それから議事の濟んだことを申上

げ、只今入御に相成つた次第である。……議長から此報告を聞きし時は、列席の大臣・顧問官は何れも感泣の涙に咽んだと云ふことである。即ち此日は皇子昭宮猷仁王殿下が薨去遊ばされたのであるが、天皇には皇子の薨去は、皇室の私事である。憲法會議は國家の公事である。公事の前には、私事はないと云ふ如き、ありがたい大御心があつた爲め、議事の一片つくまで、玉座をお立ち遊ばされなかつたと恐察し奉るものである』云云

以上は金子子爵の物語として、記載せられて居るが、これに付て考へても、天皇の絶對的愛を恐察し得ると同時に、

罪あらば吾れを咎めよ天津神民は吾身の生みし子なれば

との聖旨が眞實に味解直感さるゝのである。更に天皇の御襟懷と御仁愛とは、左の御詠を拜誦するに於て、一段の御稜威を感拜し奉る次第である。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな



よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ  
國の爲めあだなす仇はくたくともいづくしむべき事な忘れそ

斯くの如く申上ぐれば、明治天皇の大御心は、偏に仁愛一邊に富ませられしかと云ふに、決して左様でないのである。天皇の叡智と云ひ、沈勇と云ひ、所謂智・仁・勇兼備であらせられしことは、最も顯著の事實である。即ち叡智の方面に就て申上ぐれば、天皇は萬事に通曉し給ひ而も何事にも奥義に達して在らせられたのである。そは斯道の専門家が、一々實證して居られた。例へば天皇の馬術に就ての造詣には、當時斯道の達人と聞えし、藤波侍従が舌を巻いて驚き居られたと云ふことである。藤波侍従は近世稀に見る馬術の達人でありながら、時々天皇より質問せらるゝ事柄に對して、容易に即答が出来兼ねし程であつたと云ふ。更に天皇は美術品の鑑賞に、非凡の御眼識を持せられたと云ふことである。私は嘗て帝國博物館長として、當時書畫の鑑定に特得の眼識を有せし、故山高信離より、

天皇の御鑑識の非凡に在らせられし、實例に就て再三聞及んで居る。隨て天皇の卓越なる美術眼の程は、充分御推察申上ぐることが出来る。次に天皇の歌道に於ける御造詣は、私などの兎や角申し上ぐるまでもなき御事にて、御一代に十萬の御詠を残されし事實に就ても將た亦其御詠が、悉く金聲玉振なる事實に徴するも、天皇の御天才と、御造詣とは、唯々驚くの外なしと、言ふべき次第である。而して如上の叡智と學識とは、如何にして達成在らせられしかと考ふるに、勿論天縱の御英資に由るべきも、恐らく天皇の至上的聖愛の表現に外ならざる次第と、拜察するのである。何となれば、單に才智に由りて、表現せる學識にましませば、其内容も自ら究極あらせらるべきも、絶對的聖愛より表現する叡智は、眞に計り知るべからざる次第と、信ぜらるゝからである。弘法大師が「智を得るには仁者の處に在り」との格言は、全く這般の消息を道破せしことと思はる。隨て天皇の勇武否寧ろ沈勇に於ても、全然聖愛より生れ出でしものと、恐察さるゝ次第で



ある。力を頼む勇氣は自ら限りあるも、愛より生れ出づる沈勇は、無限の勇氣で明治天皇の沈勇は、即ちそれで在らせらるゝものと信ぜらる。天皇の沈勇に就ては、既に屢々傳承せし事實なるも、前掲『明治大帝』の誌上に、記載せられたる、長岡外史中將の説話の大要を摘述すれば

『明治三十七年五月十四日、我戦艦初瀬・八島と巡洋戦艦吉野・砲艦宮古の四艦旅順沖にて撃沈せられし時、海軍々令部長は勿論、陸軍參謀本部に於ても非常に驚き、朝野を擧げて、憂愁に沈みしが、何時迄も天皇にお隠し申すことも出来ぬので、早速御前會議を開き、其由を奏上することとなり、親しく出御を仰ぎて、伊東軍令部長並に伊集院次長より、代る／＼委細上聞に達せしに、群臣は何れも大切なる、天皇の軍艦四隻を失ひしこととて、非常の恐懼の下に、大御心の程を、恐察し奉り居りしに、天皇には唯ハア／＼と宣ひて、お聴き容れあり、其態度は平常と毫しも、お變りなく從容自若として、

頓て入御遊ばされ、群臣諸卿何れも天皇の沈勇なる態度に、驚歎の餘り、却て萎縮せし元氣を恢復し、喜び勇みて捲土重來の英氣を、發揮することが出来たと、云ふことであつた。其後明治三十八年一月一日、旅順開城の捷報が、乃木將軍より大本營に到達し、夜を徹して翻譯に従ひ、翌二日の午前九時頃、長岡參謀次長は、其捷報を携へ、大急ぎに三人曳きの腕車を走らせ、參内して天皇に上奏せしに、而も其際長岡中將は、自ら喜びの餘り、餘程周章てたる態度にて、言上せしに、天皇は此捷報の奏聞を受けながら、恰も昨年五月十四日、四隻の軍艦を失ひし際に於ける、當時の態度と少しも變りなく、長岡中將の喜び勇みつつ、奏上する報告を聴きつゝ、「ハア、ハア」と仰せらるるのみにて、間もなく入御遊ばされし、御沈勇の程には、眞に驚歎の外なかりしと、同時に中將自身は、己れの周章狼狽の態度に、深く恥入りしとの事實を物語られたりと云ふ。其後同年五月二十七日、日本海の大戦にて、敵の



艦隊十九隻、三十九萬噸餘りの大海軍を撃沈せし、大捷報を上奏せし際にも、群臣諸官は、手の舞足の踏むを覺えざりし程の、驚喜の態度にも似ず、天皇は平常の沈着なる御態度を以て、終始御聽許あらせられしと云ふ』

斯の如き天皇の沈勇は、普通の勇氣を以て任ずる、武將連の到底、得て學び得べき次第に、あらざることに信ぜらる。前にも申述べし如く、力を頼む勇氣には、自ら限りあるも、明治天皇の沈勇は、絶對的愛より生れ出づる、至上的沈勇にあらせらるゝ故に、一勝一敗を以て、宸慮を動かすが如き、次第にあらざることと恐察せらる。取りも直さず、天皇の沈勇は、將士をして一敗の下に挫折せしめず、一勝の下に愈々兜の緒を引締めしむるの、威力を暗示せらるゝもので、其勇は神武と稱し奉るべき、絶對的至上勇と恐察さるるのである。

明治天皇の仁愛と云ひ、叡智と云ひ、將た沈勇と云ひ、所謂絶對的大人格、否活き神と仰ぎ奉る程に、大成神化あらせられし次第は、要するに天皇御自身の克

已反省と、自覺的精進の結果と、恐察し奉る次第である。斯く恐察し奉る理由は、畏くも明治天皇と雖も、普通人と同じく、荒身魂を具備あらせられし以上、人生としての本能的悩みも、具有あらせられし御事と恐察し奉る次第である。随て内面的克己反省の修養と、體驗とに彌増しに、御精進遊ばされし御事と、恐察さるのである。天皇は眞に天照大神にも比すべき、偉大圓滿なる和魂を玉成遊ばさしも、其玉成遊ばさるゝまでには、如何ばかりか荒身魂の御修養と、其相關的反省克己の下に、彌増しに和魂の御精進を勵まされ、あらゆる内面的煩悶と、體驗とをお忍び遊ばされし、御成果と恐察し奉る次第である。普通人ならば自由に直言の朋友も得られ、賢良の師資も迎へられ得べきも、一天萬乗の尊位にまします、天皇に對しては師資の選擇さえ、容易の御詮議にあるまじく、換言すれば絶對的尊位にまします丈に、内面的修養體驗の上に一入御困難の次第と恐察されるのである。然るに明治天皇は御壯年にして、維新の大功臣であり、而も硬直の聞え